
生きがいを見つけよう

蒼空のクジラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きがいを見つけよう

【Nコード】

N3588L

【作者名】

蒼空のクジラ

【あらすじ】

——生きがいとは何だろうか？

中学1年の夏、生きがいを見失った少年、一前進。いちぜんすすむ

進は新しい生きがいを探す為、自分に自信を取り戻す為、新たな始まりの季節に一人暮らしを始める。

そんな高校生活の始まりである入学式の日、早起きした進は散歩でもしようと部屋を出る。

出掛けた進は、しばらく行ったところでふと景色が緑一色に変わった事に立ち止まる。

——もしかして……迷子？

不安に思った進は、駆け出す先に小さなブランコを見つけ、そこに座っていた女の子に道を尋ねる事にする。

「……あっちに、神社が……あるから……」

女の子に教えてもらって林を抜けた進は、神社で竹刀を振っている女の子——葵に出会う。

それをキツカケに友達になった葵と一緒に部活の体験入部に行く事になった進は、HRで配られた部活リストに書かれていた一つの言葉に引き寄せられる。

《きつとこの先、たくさんの笑顔が君達を待っているだろう》

この言葉に、自分が探している答えが隠れているような気がした進は、さっそくこの言葉の元——お助け部へと向かう。

お助け部に着いた矢先、進はちよつとした不注意で怪我をしてしまう。

次の日、改めて葵とお助け部に向かった進。そこに、入学式の日迷子になったのを助けてくれた女の子が現れる。

「はぴあちゃん！」

その女の子を見て、葵が叫ぶ。二人は幼馴染みだったのだ。

体験入部を経てはぴあと再会した葵と3人、お助け部へ入部する事にした進は、キツカケになったあの言葉を胸に、「ここでなら、きつと……！」と変わる事を決意する。

入部してからの初めての活動を終えた進達。

その帰り道、「……用事があるから……」と一人歩いて行くはぴあ。

次の日、また次の日も、用事があるからとはぴあは一人で帰って行く。

次第に、小さな頃何も言わずに引越して行ったはぴあの事を思い出していく葵は、「嫌われたのかな」と元気を無くしていく。

明るさを弱めてしまった葵の姿に、あの頃の——弱い自分を重ねる進。

——友達の為に力を尽くす事。その想いは、きっと相手の支えになる。

自分に何ができるのか？ 誰かを想う事で見つけられるモノ。

今、進は歩いて行く。

一歩一歩、少しづつ、たくさんのモノを胸に抱いて——

そう、新しい？生きがい？を見つける為に——

プロローグ 踏み出す前に（前書き）

は、初めまして、蒼空のクジラと言います。

この作品は僕が初めて書いた小説になります（ジャンルとしてはライトノベルを意識してみました）。元は、縦書き40字34行の書式で120P分の文章です（制限あり）。無理して削った分もあるので、所々に違和感とかがあったりするかもですが、後々直していきたいと考えております。

そしてもう一つ、「何か一つをやり抜こう！」という想いで創られた作品でもあります。

何分初めてなので、未熟な部分（同じような文章など）が多々あるとは思いますが、最後まで読んで頂けたら嬉しいです（＊＾|＾＊）

あ、ちなみに僕が初めて書いた文は「生きがいて何だろう？」でした（＃＾・＾＃）

プロローグ 踏み出す前に

中学一年の夏。あの時から俺は、生きる意味を見失った。

生きがいというやつだ。

それまでの俺は我が儘で、自分の為なら、とたくさんの人達を傷つけてきた。

誰かの陰口を言ったり、黙って人の物を盗ったり、平気で人を殴ったり、酷い時は人を階段から突き落としたりもした。

子供だからといって許されないような事を、たくさん……してきた。

俺は、人の気持ちを考えた事がなかった。

だから、これは罰なんだと思った。

たくさんの人達の心に傷をつけてきた報いなんだと。

それから、しばらくの時間が過ぎて気づいたことがある。

俺はあまり笑わなくなっていた。自分が何でここにいるのかわからなくなっていた。何をしてもしつまらないと思うようになっていた。そう思ったら、いつの間にか俺は人と係わる事を避けるようになり、ついには学校にも行かなくなっていた。俗に言う、不登校と呼ばれるようになった。

その時からだろうか。俺はこんなことを思い、考えるようになってた。

——生きがいとは何だろう？

それは、夢であったり、趣味であったり、憧れであったり、恋愛であったり、目標であってもしいかもしれない。

人は誰もがそれをもって生きている。

いや、その為に生きているといっても、あながち間違っではないののではないか？　と思う。

何か1つでもそういうものをもっていれば、それを楽しみにして日々を過ごしていけるだろう。

そうして、生きる意味を見出していくのだろう。

生きていると、自分はここにいるぞ！　と思えるのだろう。

きつと、生きがいとはそういう事なんだと思う。

じゃあ、もし、その生きがいを失ってしまったら？

その人は生きていけるのだろうか？

いや、生きていけるといえるのは、少しおかしい言い方かもしれない。

確かにそこにその人は存在していけるだろう。

だけど、そこに存在しているだけでは、一生を寝て過ごしていくようなものではないか？

まるで機械のような、決められたことしかできない、そんな、自分の意思をどこかに落してしまったかのような人間になってしまっているのではないか？

何事にも本気になれず、頑張るということを忘れてしまっているのではないか？

何かを失くしてしまったかのように、心から笑ったり、泣いたり、怒ったり、そんな当たり前のことさえできなくなってしまうのではないか？

はたして、それは生きているといえるのだろうか？

……いや、そんなことはない。そんなわけがない！　そんなものが生きているといえるわけがない！　そんな、空っぽで何も無いものになんの意味がある？　それで何になる？　そんな人生で、なんで生きているといえる？　本当に生きていると思えるのか？　そんなので満足できるのか？　そんなはずがない！

少なくとも俺はそうだ。

ではどうすればいい？　どうすれば、生きていると思うことができるのだろうか？

答えは1つ、新しい生きがいを見つけなければならない。

もしかすると、他にも答えがあるのかもしれないが、それしか思いつかなかった。

じゃあ、どうやってそれを見つければいい？
今の俺にはそこまでわからない。
でも……

でも、だからこそ俺は、

それを見つけれたらいいな！

と思う。

もう一度、心から笑えるように……

プロローグ 踏み出す前に（後書き）

読んでくださって何か気付かれた事などがありましたら、アドバイスや感想を頂けると嬉しいです（＊＾―＾＊）

この作品については、どこまでも探求していきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いします。

一歩目 変わったらしいなと思う（前書き）

本編です（＊＾―＾＊）

1話丸々一気に載せたので、ちょっと長いかもです（約25000文字かな）。

分けたほうが読みやすかったかも（＜―＞）

もしそっちの方が良いかもと言う事であれば、一言もらえると僕としても助かります（＾＾）

そ、それではっ、少しでもお楽しみ頂ければ幸いです。

一歩目 変わったらしいなあと思う

——ちゅんちゅん、小鳥の鳴き声が聞こえる。

「んう……」

もぞもぞと布団の中で寝返りを打つ。

「すう、すう……」

しばらくそうして、布団の暖かさに幸せを感じて過ごす。

すると、ジリリリリリ！ と音をたて目覚ましが鳴り出した。

「んう」

眠い。だが、このままこのうるさいやつを止めなければ、いつまでたっても俺を襲ってくる睡魔を退治し続けるだろう。そうなる、とゆっくり二度寝もできない。まあ、睡魔退治を頼んだのは自分なんだけど……。

仕方ないから、俺を起こしてくれたこのうるさいやつを手さぐりで探して、そいつに付いているスイッチを「もういいよ」と押し、ひとまず音を止める。

「んう……ふわあ……」

緩慢な動作で布団をめくり、半身を起こし両腕を大きく上げ体を伸ばしながら、大きな欠伸を一つ。

寝ぼけた顔で布団から立ち上がり、部屋の青いカーテンを開けると、部屋全体に春の暖かな陽が差し込む。いい天気だ。

「ふうっ」

ガラッと窓を開け、朝の新鮮な空気を吸い込みながら深呼吸し、もう一度大きく伸びをする。

「……入学式……かあ」

中学を不登校になった俺は、毎日を抜け殻のように過ごしてきた。何も無い、本当に何も無い毎日を、ただそこに居るというだけの日々を……。

だから俺は、高校生になるこの春を機に変わりたいと——変わる

うと決めた。

親にわがままを言い、無理を通して住み慣れた実家を離れ、この春から小さなアパートを借りて、一人暮らしを始めた。

だから、自分の為にも、親の為にも、ここで自分に自信が持てるようにならないといけない。そして、そのための一步を踏み出せる勇気が欲しいと思う。

そんな受け身な希望を胸に抱きながら、俺は布団を三つ折りにして片付ける。

布団を部屋の隅に片付けると、洗面所に行き顔を洗う。水が気持ちいい。

ここは、洗面所と風呂が一緒の空間になっている。そこにトイレも合わせて――というところもあったけど、さすがにトイレだけは別の方がいいと思い、このアパートを選んだ。

掛けてあったタオルを手に取り、顔を拭く。タオルを掛け直すと、鏡を見て、目が覚めたことを確認する。

そこには、適当な長さに切り揃えられているが、前髪だけは目にかかるほど長い黒髪をし、相変わらずの眠たそうな細い眼をしている自分がいた。

本当に目が覚めたのか？ と鏡の中の自分に問いかける。すると、「……ん、たぶん」という返事が返ってきた。

部屋に戻ると、壁に掛けてある時計を見る。6時40分を針が指している。

9時からの入学式までには十分な時間がある。まあ、その前に少しのんびりと散歩でもしながら、と思っていたのだが、それでも少し早かっただろうか？

でも、やっぱり入学初日は時間にゆとりをもって行きたいからな。ちょうどいいのかもしれない。

小さな冷蔵庫から、市販で売っている安い緑茶を入れた容器を取り出し、コップに薄茶色の液体を注ぐ。そしてそれを、ゴクゴクと飲み干す。渋い苦みが口の中に広がる。

「ふう、やっぱり緑茶はいいなあ」

「今時の高校生が緑茶好きなんてジジ臭い。コーラとか飲まないの？」とか言われるかもしれないが、俺はどうもそういうジュースよりも、緑茶やウーロン茶、麦茶などのお茶系が好きなのだ。飲んだとしてもカル〇スとオレンジジュース、ココアやスポーツドリンクなど、本当に限られたもので、十種類もないのではないか、というほどである。ちなみに、炭酸は絶対に飲まない。喉が痛くなるからな。

もう一杯緑茶をコップに注ぎ、容器を冷蔵庫に仕舞う。と同時に、卵とハムを二つずつ取り出す。

取り出した卵とハムを台所に持っていき、フライパンで焼く。焼きあがった卵とハムを皿に移し、塩を振りかける。ハムエッグの完成だ。そして、焚いておいた白ご飯を茶碗によそい、さっきの緑茶が入ったコップと一緒に、部屋に置いてある小さな丸いテーブルに運ぶ。これが今日の朝食だ。

朝食を食べ終わると台所に行き、昨日の夜の分と一緒に使い終わった皿を洗う。

皿を洗ってから、もう一度洗面所に行き、歯を磨く。

部屋に戻ると、時計は6時57分。まだまだ時間があるが、特にすることも無いのでそろそろ制服に着替えよう。

青色のパジャマを脱ぎ、白いカッターシャツを着る。その上に、赤色をベースに白のラインが斜めに入ったネクタイを結び、灰色よりも少し黒っぽいズボンを穿いてベルトを締める。シャツの上に青のブレザーを着て、着替え終了。中学と比べると、なんだか大人の雰囲気をする制服だ。

「……7時10分か」

時計を見ると7時10分になっていた。前の日から練習をしていたのに、ネクタイをキチンと結ぶのに時間がかかってしまった。

それから、あらかじめ教科書等を入れておいたカバンを手にも取りうとしたところで、ふと、本棚の上にある水色のクジラのヌイ

グルミと目があった。

このクジラのヌイグルミは口にチャックが付いており、その中に文庫本を一冊程度入れることができるスペースがある。さらに、頭の上にポケットティッシュを入れることもできる。なんとも実用的なやつである。

せっかくなのでそのクジラと、その両隣に飾ってある青色と水色の小さなクジラー——サカクジとクジツムリ——に「いつてきます」と心の中で呟く。

それから改めてカバンを手に持ち、部屋を出て、俺は空を見上げながらゆっくりと歩き出した。

さて、入学式までのんびり散歩でも、と思って部屋を出たのはいが、まだこの辺に何があるのかよく知らないんだよなあ。どうしよう。

ここから、今日から俺が通う事になる学園——私立 そうげいがくえん 蒼鯨学園——までは、歩いて30分くらいかかる。

8時40分までには着くようにしたいから、まだ1時間以上の余裕がある。

うーん……よし、決めた。まだまだ知らない場所があるからな、散歩ついでに少し道を覚えよう。

そうと決まればまずはあっちの方に行ってみよう、と向って右の方へ進路を変える。

少し歩き、住宅地を抜けると広い道路に出る。左に曲がり道路沿いを真っ直ぐに進むと交差点があり、その交差点を右に曲がる。

また少し行ってから、横断歩道橋を通り、向い側に渡る。

そのまましばらく歩くと、アーケード型の商店街——ドルエール商店街と呼ばれている——が見えてきた。

横断歩道を渡って波の形をしたアーチを潜り商店街に入ると、ス

ライド式の屋根はもう開いていた。とはいえ、建ち並ぶ店舗は屋根と違い、各々に「まだ開いていませんよ」ということを示している。

このドルエル商店街は十字型をしていて、その中央はちょっとした広場になっており、時計も建っている。屋根があり、天気の良い時はオープンモール。雨が降っている時や風が強い時、空が暗くなり夜が近くなると、屋根が閉まりクローズモールになる。

そのため、なかなか快適に買い物をすることができる。

俺もここに何度か買い物に来ていたりするのだが、一人暮らしの身としては、近場にこういう場所があるのは凄く助かる。これからは学校の通り道なので、学校帰りに、そのまま買い物をして行くこともできる。

俺は十字路を東に進み、商店街を抜ける。

このまま真っ直ぐ進めば蒼鯨学園が見えてくるはずだけど――俺は真っ直ぐ進まず、脇道を左に入っていく事にする。

「……あれ？」

特に考えもなく、観光地に來た観光客のような好奇心を胸に歩を進めていた俺は、異変に気づいて足を止め、首を傾げた。

いつの間にか道を外れ、気づけば辺り一帯を緑に囲まれていた。

「あれ？」

周りを見回してもう一度呟いてみる。しかし、当然の如く何も変わらない。

そのまま耳を澄ませば、そよ風によって木々の囁きが聞こえてきた。

もしかして……迷子？

これは口に出さなかった。これを口にしてしまえば、この年で、しかも記念すべき高校生活のスタートである入学式の日、絶対にあってはならないことを仕出かしてしまったと、認めてしまうことになると思ったからだ。

嘘、だよな？ と不安に思い、俺は駆け出――

「っ！」

——そうとしたところで、躓いて転んだ。……痛い。
「うう……」

なんだか自分に情けない気持ちになる。でも、このまま落ち込んでいても仕方がないと立ち上がる。制服についた土を払い、転がったカバンを拾って、今度は足もとに気をつけて走り出す。

しかし、もう随分と運動らしい運動をしていなかった所為か、それとも急に走った所為なのか、少し進んだだけで息が切れた。

「はあ、はあ……」

くそっ、体力落ちているとは思っていたけど、ここまでとは思っていなかった。小学生の方がまだ走れるんじゃないか？ 自分のことながら、まったくもって情けない。今度、少しランニングでもした方が良くいかも。

——とか思いつつ、この状況をどうしようかと考える。

……いや、迷っていても仕方ない、とりあえず行動だ、と足を動かそうとしたところで思い出した。

——そうだ、携帯電話があるじゃないか！

俺はカバンの中から、希望アイテムへメタリックブルーの携帯電話《話》を急いで取り出す。

「何かあった時の為に」、とお母さんが入学祝いに買ってくれた物だ。

まさか必要になる時がくるなんて……ありがとう、お母さん！

今頃一生懸命に働いているだろう実家のお母さんに心から感謝しつつ、さっそく電話を掛け……って、どこに掛ければいいんだ？

そうだよ、こんな時はいったいどこに電話すればいいんだっけ？

警察？ いやいやいや、そんな恥ずかしいことできるわけがないじゃあどこに？ というか、そもそも携帯に番号登録してあるのって、実家と家族の番号だけじゃなかったっけ？ まあ、それしか知らないからんだけど……って、結局全然携帯の意味ないじゃん！

俺はガツクリと項垂れ、落ち込む。

そのまま呆然としていると、不意に、辺りを強い風が吹いた。
「うわっ」

ボーっとしていた所為で、その風に背中を押され、また倒れそうになる。

「つとと」

……ふう、また転ぶところだった。

一息つき、「よしっ！」と気持ちを切り替えて、踏みとどまったその足で再び走り出す。

「ん？」

少し走ったところで、急に視界が広がり、小さく開けた場所に出た。

太陽の日差しで輝く不思議な空間に、小さなブランコが一つ。

丈夫そうな太い樹の枝に、これまた丈夫そうなロープを吊るし、そのロープに木の板を取り付けたもので、普通の公園にあるようなブランコとは違い、誰かが自分で作ったお手製のものに見えた。

そのブランコに一人の女の子が座っていた。

幼い顔立ちの女の子は、その大きな瞳で虚空を見つめていた。

肩のあたりで切り揃えられた雪のような綺麗な髪が、暖かな陽を浴びて白銀に輝いている。その髪と遊ぼうと、風が女の子の髪を揺らしている。

思わずじっと見つめていると、女の子がこちらに気づいたのか、その瞳に俺を映した。

「……あ」

ハッと気がつき、俺は女の子に近づく。

さっきは気付かなかったが、よく見ると赤い小さな鈴が付いた葉っぱの髪飾りを、頭の両脇に一つずつ付けていた。

「あ、あのっ」

俺が声をかけると、女の子はこちらを見つめたまま小首を傾げた。
「つと、その……」

声をかけたのはいいが、慌てて混乱している所為かすぐに言葉が

出てこない。

「えっと、あの……」

「……？」

「えーっと、その、あの……っ、道に迷ってしまっ！」

「っ！」

少し焦った俺は、いきなり叫んでしまっていた。慌てて女の子の姿を見る。

驚きと怯えが混じった感情を瞳の奥に宿し、女の子はこちらを見ていた。

……しまった、と思った。いきなり大きな声を出すなんて、何をしているんだ、俺は。

一つ深呼吸してから、頭を下げ、もう一度女の子に声をかける。

「あのっ、すみません！ いきなり大きな声を出してしまっ……」

…その、どうも道に迷ってしまっみたいで、少し混乱してて……あのっ、それで、もしよければ道を訊きたいなあって。えっと……」

俺は顔を上げ、そっと女の子の様子を窺う。

………。

——沈黙が舞い降りた。

あ、あれ？

俺の言い方が悪かったのだろうか、女の子はこちらを見つめたまま動かない。

対する俺も、どうしたらいいのか分からず、立ちつくす。

「えっと……」

三度声をかけようとしたところで、

「……あっち」

「えっ」

すっと、女の子の細い腕が持ち上がり、その先の小さな白い指が、ここから南西の方角を指す。

「……あっちに、神社が……あるから……」

まるで、海の中で輝く真珠のような、静かに、透き通る声で女の子は言った。

「神……社？」

一瞬何のことだか分からず、口の中で小さく呟いてしまう。

その呟きが聞こえたのだろうか。女の子が、コクンと頷く。

……もしかして。いや、もしかしなくても道を教えてくれたのだろう。まあ、道を訊きたいって言ったんだから当然かもだけど。

ということは、えっと、それはつまり『神社に行けば道が分かるから』ということだろうか？

それとも……、『私に聞くより神社に行って、神様にでも聞いた方がよいよ』ということだろうか……？ まさかあ、この女の子がそんなこと言うはずないよね？ ……出会ったばかりだけど。まあ、普通に考えれば前者だよな。きっと。

女の子に対し、失礼な考えを追い払い、俺は頭を下げる。

「あ、その……ありがとうございます。教えてくれて」

「……ん」

そうお礼を受け取って頷いてくれた女の子に、俺はなんだか嬉しくなっただけ。と、そこで今更ながらに気づいたことがあった。

「あ、その制服って、確か……」

女の子が着ている服は、確かに蒼鯨学園の女子制服だった。入学案内に載っていたのをよく覚えている。

青のブレザーには波を思わせる白いレースが付いており、その波からは噴き上げる潮のようにラインが首元まで届いている。空色のスカートには長く伸びた白い雲が並んでいて、そこから等間隔に陽が射し引かれている。まるで、気持ち良さそうに海を泳ぐクジラをイメージした制服だった。

「うん、やっぱ。それ蒼鯨学園の制服ですよな？」

尋ねると、そこで女の子も俺が蒼鯨学園の制服を着ている事に気がついたみたいだった。

「あ、あの、俺、今日から蒼鯨学園に入学するんです。あ、あなた

は？」

「……私も」

「そ、そっか、じゃあ一緒ですね」

「……一緒？」

「はい。同じ蒼鯨学園の新生同士ってことです。……あっ、決して道に迷った者同士なんて思っていないですよ。迷ったのは俺だけだと思っていますし、その証拠に道も教えてもらいましたし」

小首を傾げる女の子になぜか焦ってしまった俺は、誤解されないようにと早口で話す。

「……一緒……」

「？」

そんな俺の話を聞いていたのかいないのか、瞳を閉じ、胸に手を当てて女の子は呟いた。

いったいどうしたんだろう？ 具合が悪くなったとか。ん、でもそんな風には見えないし。何か変なことでも言ったかな、俺。

「……行かなくていいの？」

女の子が、考え込んでいた俺を見つめて言った。

「あっ、そ、そうですね。それじゃあ、そろそろ行こうかな。また迷うと困りますし……」

苦笑を浮かべ歩き出そうと女の子に背中を向けたところで俺は忘れ物を思い出したかのように、すぐさま、また女の子の方へ振り返る。

「？」

「えっと、その……もし良かったら、一緒に行きませんか？」

一回転しての俺の申し出に、女の子は少し驚いた様子を見せた。だけどそれも僅かな間、何かを思うようにした後、女の子は静かに首を横に振る。

「……もう少し、ここにいますから」

「そう、ですか……それなら仕方ないですね。……あの、道教えてくれて、ありがとうございました。 それでは、また学園で……」

ちよつと残念に思いながらそう言い残した俺は、女の子に教えてもらった方へと進んで行った。

少し歩くと、女の子の教えてくれた通りに神社が見えてきた。

こんな近くにあったのか、と思うと急に恥ずかしくなってくる。

……あーもうっ、本当に俺ってカッコ悪いなあ……。

「はあ……」

ブン！

「ん？」

思わずその場で頭を抱えて一人落ち込んでいた俺の耳に、突然風を切るような音が聞こえてきた。

今何か聞こえた……よな。多分。

確かめる為、俺は辺りに耳を澄ましてみる。

——ブン！

あつ、やっぱり何か聞こえた。神社の表の方からか？

音が聞こえた方に足を運ぶ。

「はっ！」

そこには、竹刀を一生懸命に振っている女の子がいた。

その女の子は剣道でもしているのか、白い道着を着ていた。

ヒマワリのように太陽の陽を浴びた明るい髪を青いゴムで纏めてポニーテールにしているが、前髪や耳の辺り、毛先の部分だけは他とは異なる薄い色をしていた。その髪が竹刀を振る度元気に揺れている。

「ふっ、やあ！」

……なるほど。あそこに居る女の子が竹刀で素振りをしている音があそこまで聞こえてきたという訳か、納得。

それにしても……すごい音だなあ。よほど頑張っているのだろう、少し振っただけじゃこんな音はしないんじゃないかと思う。

「あの〜」

「えっ！ ひゃわぁ！」

女の子に声をかけたら、よほど集中していたのか、すごく驚かれた。

「あっ……」

勢いよく驚いた女の子はそのままバランスを崩し、背中から地面に倒れそうになる。

「あ……くっ！」

瞬間、足が勝手に動いたと思ったら、頭が真っ白になった。

「……………っ！」

気づいたら俺は、地面にぶつかる前の女の子を抱きかかえていた。
えっ……？ あ、あれ？ 俺、今……あれ？

いつの間に？ 自分の事ながら驚いてしまう。

「あ、あのお……」

「え……っ！」

すぐ下から声がした。

下を見ると、すぐそこに女の子の顔がある。

さっきまでの凜々しい表情とはうって変わり、少し頬を赤くした女の子は照れたような表情を浮かべ、こちらを見上げていた。

「えっと……」

「っ！ ごめんなさい！」

目が合った途端、俺はなぜか謝りながら、女の子を起こした。

「えっ？ あ、えっと……うん、別にいいよ。気にしてない」

突然謝った俺に戸惑いを見せたのもすぐ、女の子が笑顔で言っ
落とした竹刀を拾う。

「あ、その、驚かせてしまったみたいで……その、大丈夫ですか？」

「うん！ 全然平気。助けてくれてありがとう」

驚かせてしまった事を詫げる俺に、花が咲いたような笑顔でそう
言ってくれる女の子。

「っ！」

瞬間的に顔が熱くなった。う……何だろう、この感じ……？

「いえっ、悪いのは俺ですから。それより、集中してたところを邪魔しちゃって、すみませんっ」

「いいよ、いいよ。丁度もうすぐ止めようと思ってたところだったから、そんなに気にしないで。まあ、ちよつとビックリしたけどねっ」

勢いよく頭を下げた俺に、女の子は微笑んで許してくれる。

なんか、明るい人だなあ。こっちまでつられて笑ってしまいそうになる。

「あっ、その制服！」

女の子が俺の着ている蒼鯨学園の制服を指差して言った。

「それ、蒼鯨学園の制服だよねっ？ ……この時間に制服を着てるってことは、もしかしてこれから入学式？」

「あ、はい。そうなんです。それで入学式まで時間があつたのでちよつと散歩でも、と思ったんですけど。そしたら、その……み、道に迷っちゃって……」

「ああ、なるほど。それで神社の裏から出てきたんだね」

「う、はい……」

恥ずかしくなって俯いた自分の顔が、これ以上無いくらい真っ赤になったのが分かった。

あゝ、何かもう駄目だー。恥ずかしすぎて、顔上げられないよう。

あまりの恥ずかしさに体が震えだしてくる。

「ふふっ」

クスリッと笑う声がして、俺は顔を上げる。

「ふふっ、ご……ごめん。ふっ、何か……ふふっ、可笑しくて」

女の子は、お腹を押さえて笑っていた。……恥ずかしい。

「ふふっ、ふ……ふ……ふうっ」

俺が恥ずかしさに耐えている間にだんだんと落ち着いてきたようだ。女の子は、目に浮かんだ笑い涙を拭うと頷いた。

「そっか、そっかぁ。実は、私も今日から蒼鯨学園の一年生なんだあ。それで、少し気合いを入れるために朝の稽古をしてただけど……そっか、そっか」

「えっと、あなたも？」

「うん！ そうだよっ」

俺が訊き返すと、またさっきの笑顔で女の子が答えてくれる。

……なんだか、笑顔が似合う人だなあ。俺とは正反対だ。

「あっ、そうだ！」

急に良いことを思いついたようにパアッと手を合わせ、女の子が大きな声を出した。

「それじゃあさ、もし良かったら一緒に学園まで行かない？ せっかくこうして会ったんだしさ、そうだよ、そうしょっ！ ね？」

「えっ、えっと、あの……は、はい」

女の子の勢いに圧されて、つい俺は頷いてしまう。

「よし、そうと決まれば！ ちょこっど行って、ちょこっど着替えてくるから、ちょっとだけ待っててね」

そう言い残して、勢いよく駆け出していく女の子。

「あ……」

……行っちゃった。

まあ、ここからだとは道分らないし、丁度良かったかもしれないな。……いや、きつとそうじゃないな。さっき俺が道に迷ったって言ったから、気を遣ってくれたんだろう……さっきの女の子もそうだけど、優しい人ばかりだな。

しばらく春の風を浴びながら感慨にひたる。

そうしていると、蒼鯨学園の制服に着替えた女の子が、息を切らせながら戻ってきた。

「はあ、はあ……おまたせっ」

「そんなに急がなくても……」

「だって……待たせるの……悪いし」

「別にそんなの気にしませんよ」

肩を揺らして、てへへっ、と笑う女の子に自然と俺も笑いかける。
「そう？ それなら良かったあ」

暖かな陽気の中、そうやって微笑み合う。

「あ、ねえ……」

「あ、はい」

もじもじと手を後ろに組んだ女の子が、こちらを見上げ訊いてくる。

「その……これっ、どうかなっ？ ……似合ってる、かな？」

「えっ？ あ、その、えと……に、似合ってますよ」

こんなこと言うのは初めてだったから、少し照れながら答える。

「本当！ 良かったあ」

嬉しそうにその場でクルリと回って、照れ臭そうに微笑む女の子。
「くすっ」

そんなことでそんなに嬉しようにする女の子を見ると、なんだか、こっちまで嬉しくなってきた。

「えへへ。よし、それじゃあ、しゅっ……」

元気よく右手を挙げ、歩き出そうとした女の子が動きを止める。

「？」

どうしたんだろう？ 忘れ物でもしたのかな？

「あ、えっとね。まだ名前言ってなかったなあって思って。私の名前は、《貴峰^{たかみね} 葵^{あおい}》！ ここ、貴峰神社の一人娘だよ！」

そう、元気よく自己紹介する女の子——貴峰さん。

そういえば、まだ言ってなかったかも。

「あっ、えっと、《一前^{いちぜん} 進^{すすむ}》です」

特に何か言う訳でもなく、名前だけの自己紹介をする。

「そっかあ、じゃあ進くんだねっ。これからよろしくねっ、進くん！」

「あ、はい！ えっと、貴峰さん」

「ふふっ、葵でいいよ。私も名前で呼ぶから」

「えっ、いや、でも……」

「いって。だって、そっちの方が早く仲良くなれる気がしない？」
微笑みながら訊いてくる貴峰さん。

うーん、確かにそうかも。ってか、そんな風に言われると断れないな。

「えっと、その……あ、葵……さん？」

俺は戸惑いながら、葵……さんの名前を呼ぶ。

「うん！ よろしくねっ、進くん！」

「あ、はい！ こちらこそ、よろしくお願いします！」

「ふふっ、別に敬語じゃなくていいのに」

かしこまって頭を下げる俺を見て、葵さんは笑う。

「……ところで、進くん、カバンは？」

葵さんは落ちている俺のカバンを指差し、悪戯っぽくそう言った。

「え……あっ！」

そういえばと、俺はいつの間にか落としていたカバンを拾いに行く。

「ふふっ、進くんって面白いねっ」

？ 俺が、面白い？ そんなことを言われたのは小学生の時以来だった。

あの時から、学校に行かなくなってから、俺はあまり笑わなくなった。あまり喋らなくなった。そして、人との関わりを持たなくなった。

その俺が、面白い……？ 何だか嬉しいような、くすぐったいような、そんな気持ちになった。

「どうしたの？」

急に立ち止まった俺を不思議に思ったのか、葵さんが声をかけてくる。

「あ、いえ。えっと、行きましようか」

「？ うん！」

カバンを拾い上げ、俺は葵さんの所に戻る。

「じゃあ今度こそ、しゅっぱーっ！」

「くすっ、ホント元気な人だなあ」

元気よく歩き出す葵さんに小さく呟いて、俺もその後が続いた。

「そういえば、進くん道に迷ったって言ってたけど、この辺初めて？」

学園に向かう途中、隣を歩く葵さんが訊いてきた。

「あ、はい。俺、蒼鯨学園に入学する為にこの街に引っ越してきたばかりなんです。それで少しでも道を覚えよう！　と思っていたのですが……その、旅行に行った時みたいな、新鮮な気持ちになったといえますか、周りの見たことのない景色について、夢中になっちゃったといえますか……ホント、大事な入学式前にする事じゃないですよねっ。あはは……はあ……」

「あははっ、そうなんだあ。でも分かるよ、その気持ち」

溜め息を吐く俺に、なだめるように言う葵さん。

「そうでしょうかー」

「うん！」

ん。まあ、それならいいかあ、と俺は空を見上げる。

青い空を白い雲が泳いでいる。いいなあ、気持ちよさそうだなあ。

「あっ、じゃあさ……」

ん？　空から葵さんに視線を戻す。

「今度、道案内してあげるよっ。どうかな？」

「えっ！　本当ですか？　そうしてもらえとすごく助かります！」

あ、でもいいんですか？　迷惑なんじゃ……？」

「ううん、全然！　もちろんオッケーだよ！」

遠慮する俺に首を振り、右手の親指と人差し指で丸を作って笑いかけてくれる葵さん。

あ……やっぱり、優しいな。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらっていいですか？」

「うん！」

えへへっ、と笑い合う。

そうこうしているうちに、あっという間に学園が見えてきた。

《私立 蒼鯨学園》
そうげいがくえん

……学校に行かなくなった俺は、それでも周りの先生方やたくさんの人達に支えられて、なんとか無事に中学を卒業することができた。こうしてこの学園に通えることになったのも、そういう人達がいてくれたおかげだと思っている。

だが、こう言ってはなんだが、無事に卒業できただけ、というだけであって、決して勉強ができるようになったわけではない。

俺が自分でできた勉強はといえば、学校でもらった教科書と問題集を、やる気が出た時に少しずつ、もしくは一気に、その時の気分によってやるだけだった。

そんな俺が「よく受験に受かったな」と、周りの人達に言われる訳がちゃんとある。

それは、この学園の入学試験が面接しか無かったことだ。

3日間の試験勉強を終えた当日（後で『三日前！ ホントに受かる気あったの？』と散々言われた）、いざ気合いを入れて入学試験に行ってみたら筆記試験が無く、面接だけだと言われ少し拍子抜けしてしまった俺は、それでも気を取り直して面接会場に向かった。

緊張しながら扉を開けると、触ったら柔らかそうなフサフサした白い髭を伸ばしたお爺さんが一人、湯呑みを置いたテーブルの前に居るだけだった。

「？」

まさか、白い髭を生やしたお爺さんが一人で居るだけだなんて思ってもみなかった。ましてや、机ではなくお茶の間にあるようなテーブルが代わりに置いてあるだけなんて……部屋を間違えたのかな？
思わず部屋の入口で立ち尽くしてしまう。

「ん？ どうしたのかね？ 早くそこに座りなさい」

「あっ、は、はい！」

お爺さんに促された俺はハツとして、急いで用意されていた座布団に「失礼します」と正座する。

「ふむ。ではまず、受験番号と名前を教えてくださいませんか？」

フサフサの髭を摩りながら、お爺さんが訊いてきた。

「あ、はい。えと、受験番号217番、一前 進です！ よろしくお願ひします！」

「ほほ、元気があってたいへんよろしい。では、この学園を志望した理由を聞かせてもらえるかの？」

「あ、はい。自分がこの学園を志望した理由は……あ、いえ、理由と言えるのかは分からないのですが、その……ク、クジラが好きだからです！ この学園の名前に鯨ってついていたので……それで……あ、あと青色も好きです！ それから……えと……」

俺は理由と呼べるのか分からない事を言い、照れて頭を掻く。

「ほっほっほっ、そうかそうか、クジラが好きとな？ これはおもしろい」

顔を皺だらけにして笑うお爺さん。

「えと……」

笑われてしまった……。

やっぱり変、だよな。クジラが好きって、いくらなんでも理由になるわけないよな。

恥ずかしがりながら後悔する。うう、俺のバカ。

「ほっほっほっ。いやいや、笑ってすまんかった。……そうか、クジラが好きか。ふむ、なるほどのお」

俯いてしまった俺に向かって、声をかけるお爺さん。

「ほほ、まあそう恥ずかしがることもない。顔を上げなさい」

「……はい」

うう、目を合わせられない。

「ふむ。実はの、ワシもクジラが好きなんじゃよ。それでワシ自身

も、クジラのように大きく、そしておおらかな人間になりたい。また、たくさんの子供達にもそんな人間になってもらいたい。そう願って、この蒼鯨学園を創ったんじゃない」

そうやって、何かを慈しむような瞳で話すお爺さん——いや、この学園の理事長……なんだろう。今、創ったって言ったし。

「ふむう、そうか。……よし、これにて面接終了じゃ。御苦労じゃった」

「えっ！ これで終わりですか？」

頷きながらそう言った理事長に、驚きながら訊き返す。

「うむ。おもしろい事を聞かせてもらった。……君とは気が合いそうだな。縁があつたらまた会おう」

理事長はそう言って、ニカッと笑ったのだった。

そうして面接会場を出た俺は、

「……こんなので受かるのだろうか？ クジラの話しかしてないよな？ ……なんか不安になってきた……」

こう呟いた——

……ホント、あの時は受かるかどうか心配だったけど、こうして蒼鯨学園の制服を着て登校することができて、本っ当に良かった気がする。

「？ どうしたの、進むん？ なんだかボーっとして。もう学園に着いちゃったよ」

「ふえっ？」

気付いたら、一緒に歩いていた葵さんがこちらを不思議そうな顔で覗き込んでいた。

「あ、本当だ……」

面接の時のことを思い出し、どこか呆けてしまっていたらしい。前を見ると、もう校門前まで来ていた。

「わぁー、ここが今日から私たちの通う学園……なんだねっ！」

両腕を広げ、希望の色で瞳を輝かせて校舎を見上げる葵さんは、今にも踊りだしそうだ。

その姿に、一瞬見惚れてしまう。

葵さんは今、これから始まる何かで胸を一杯にしているのだろうか？

「……これから、楽しい事がたくさんあるといいですねっ」

——そんな事を思ったら、自然とそんな言葉が出てきた。

俺自身そんなことを期待しているからだろうか？

ここで、この場所で変わるように……。

思いを実現できるように……。

そうだ。俺は変わるんだ。ここで、絶対に！ その為に親にわがままを言っただけここに来ただけ……！

「うん！ よーし！ 楽しい思い出、たくさんつくれるように頑張るぞー！ おー！」

静かに決意を改めていた俺の横で、葵さんが大きな声で右手を勢いよく空に向かって突き出した。

「！ ちよっ、葵さん！」

周りにいた他の新入生であろう生徒達が「ん？ 何だ？」とこちらに注目する。

「ほらほらっ、進くんも一緒に、おー！」

「えっ！ ちよっ、まっ」

葵さんはそんなことを余所に、驚く俺の手を取り、大きく持ち上げる。

「っっっ！」

な、なんてことを。

周りの視線が一気に集まる。そして聞こえてくる数々の声。

「ぷっ、何あれ？」

「恥ずかしい奴ら」

「見て、あの男の子、顔真っ赤にしてるよ」

「あ、ホントだ。可愛い」

「おっ、あの元気な女の子、結構かわいくねっ」

「うんうん、俺もそう思った。いいなあアイツ……」

……うう、恥ずかしい。

周りを全く気にしていないような葵さんに、顔を真っ赤にしながら尋ねる。

「あ、葵さん」

「ん？ どうしたの、進くん？」

「あ、あの、周りが……」

「周り？ 周りがどうかしたの？」

俺に言われて周りを見回す葵さん。

「あっ……」

どうやら、周りの視線を集めていることを気にしていなかったのではなく、気づいていなかっただけのようだ。

「ご、ごめん。つい、はしゃいじゃって……」

照れながら俺の手を離す。

「い、いえ……」

二人で真っ赤になって立ちつくす。

……とりあえず移動した方が良いかも、と思い葵さんに声をかける。

「あ、えと……と、とりあえず行きましょうか」

「う、うん。そうだね」

そうして、俺たちは校舎の中に入って行く。

校舎に入ると、玄関に大きな掲示板があり、そこに人が集まっていた。

「俺F組、おまえは？」

「僕はB組だよ」

「そっか。まあ最初で最後の高校生活だ、お互い頑張ろうぜ」

「うん。僕、絶対かわいい彼女つくるぞ」

等々、期待に満ちた声が周囲から聞こえてきた。

どうやらあそこにクラス表が貼ってあるらしい。

「あ、あそこ！ 私たちも行ってみようっ」

駆け出す葵さん。俺も早足で向かう。

掲示板には六枚のクラス表が貼ってあった。

だけど、俺の目だとこの距離からはまったく字が視えない。近づこうにも、人がたくさんいる所為でこれ以上は進めそうもない。

……しょうがない、眼鏡掛けるか。

俺は胸ポケットから眼鏡ケースを取り出して、眼鏡を掛ける。

ん、なんとか視えるようになった。

えーと、一前、一前はーと、左から順番に見ていく。

「あ、あった」

一前だからと上の方をざっと眺めてみたら、あった。1―Dだ。こうして名前があると本当に合格したんだなあって思う。良かったあ。

葵さんは……違うクラスのようだ。1―Dのところには名前が見あたらなかった。

「んーと、あ、あった！」

どうやら葵さんも自分の名前を見つけたようで、俺の方へと振り向く。

「あったよ。1―Cだって！ 進くんは？」

「あ、えと、1―Dです」

「えっ、そっか……違うクラスになっちゃったね……」

俺が言うと、葵さんはなぜか、しゅんと落ち込んでしまった。

「？ えっと、そんなに落ち込まなくても……」

「だって！ ……せっかく、知り合えたのに……」

うぐっ、何だろう。そんな顔をされると、なんだかいけない事をしてしまった気持ちになってくるじゃないか。

「えっと、その、大丈夫ですよ！ クラスが違うだけで同じ学園の生徒なわけですし……それにほら、違うクラスといっても一つ隣のクラスになっただけですし……その……」

慌てて元気づけようとする俺。

「でも……一緒にクラスになれたらいいなあって、思ってたんだもん……」

……葵さん。まだ会ったばかりなのに、もう俺のこと友達だっと思ってくれてるのかな。……なんか嬉しいな、あったかい気持ちが胸に沸き上がってきた。

——うん！ だったら俺も、葵さんの友達として！

「葵さん！」

「えっ！」

大きな声で名前を呼ばれて、ちよつとビックリした様子な葵さんに言う。

「葵さん。俺も葵さんと一緒にクラスになれたらなあって思ってた。そしたら、すごく楽しいだろうなあって。葵さんの元気な声が隣のクラスから聞こえてくる事を思うと、すごく羨ましいです。でも、こうも思います。来年は一緒にクラスになれるといいなあって、楽しみができるわけです。そして、それを楽しみに1年間を過ごして、もし来年、一緒にクラスになれたら……すごく嬉しいと思うんです。だから、そんなに落ち込まなくても大丈夫ですよ。きつと！」

「進くん……」

こちらを静かに見つめてくる葵さん。

……あ、ダメ、だったかな。

どうしよう。思った事は全部言えたと思うんだけど……困った。今まで誰かを励ました事があまり無かった俺にとって、こんな風に言葉を送るのは慣れていない事だ。これ以上何て声をかけたいのか、と迷ってしまう。

「……うん。そうだね！ 進くんの言う通りだよ！ よーし、なんか元気出てきたあー。ありがとう、進くん！」

でも、そんな口下手な俺に、お日様のように葵さんは笑ってくれた。

「えへへっ——ってあれ？ 進くん、眼鏡」

「えっ？ ああ」

もうクラス分かったから必要無いか。

俺は眼鏡を外す。

「あ、まって。もう一回掛けてみて」

「？ 別にいいですけど。どうしてですか？」

いきなりそんなことを言い出した葵さんに訊く。

「いいから、掛けてみて」

「？」

まあいつか。とりあえず掛けてみよう。

「えと、これでいいですか？」

もう一度眼鏡を掛けて葵さんの方を見る。

「……………」

葵さんの瞳は観察するようにジッとこちらを見つめてくる。

え、何？ もしかして、眼鏡掛けた俺ってどこか可笑しかったりするのかな？

「あのっ……………」

「……………うん、やっぱり。進くん、眼鏡掛けてもカッコイイねっ」

「へっ？ カッコイイ……………ですか？」

「うん！」

えっと……………何を言っているんだ葵さんは？ カッコイイ？ いくらなんでもそれは誉め過ぎだろう。

自分で言うのもなんだが、俺はオシヤレとは程遠い存在だ。そんなものにはまるで興味が持てない。だから髪はいつも邪魔にならないうように適当に切ってもらっているだけだし、普段着ている服だっ て安物しか買ってこない。その上、アクセサリーなんか一つも持っていない。腕時計でさえもだ。

そんな俺が眼鏡を掛けたくらいで……………ありえない。まったく、お世辞が上手だな葵さんは。あっはっは。

「でも進くん、眼鏡掛けてるって事は目悪いの？」

お世辞と分かっているつもりでも嬉しくなってしまう単純な俺が、心の中でアメリカンジョークを言って笑う人みたいに笑っていたら、葵さんが訊いてきた。

「あ、はい。裸眼だと0・1も無いかも知れません」

「そんなに！ そんなに悪いと視えないんじゃないの？ それで普段生活してる時とか大丈夫なの？ さっきまで眼鏡掛けてなかったよね？」

葵さんは早口にそう言いながら、心配そうにグイッと近寄ってきた。シャンプーのいい香りが鼻をくすぐる。

「えう、あの……」

眼鏡を掛けている所為でハッキリと見える。

シオンの花のような薄い紫色が滲む瞳。長いまつ毛や可愛い小さい鼻。薄紅色の唇。神社で見た時には気付かなかったところもよく見えた。

「っ」

まずい！ 何がまずいのかよく分からなかったが、そう思った瞬間、思わず一歩後ろに下がってしまう。

「むっ！ どうして逃げるの？」

ちよっと怒ったような表情になった葵さんは、左手を腰に当て、少し前屈み気味な姿勢で問い詰めてくる。

「あ、いえ、別に逃げては……」

両手と首を横に振り、葵さんに逃げてないということをアピールする。

「でも今、後ろに下がったよね？」

「いえ、これはその、なんて言ったらいいのか……」

顔をあさったの方向に逸らしながら、軽く頬を掻く。

素直に恥ずかしいから、と言えぱいいのだろうか？

んー、でも、そう言うのも恥ずかしいような気がするし……。

どう言えぱいいのか分からず、俺は黙ってしまう。

「もしかして……」

「えっ」

「もしかして私、迷惑……だった、かな？」

沈んだ声が葵さんの口から聞こえてきた。

「え、迷惑？ そんなこと思っ
てませんけど……」

「でも私、会ったばかりなのに馴れ馴れしかった……よね」

「葵さん？」

気になって葵さんに視線を戻すと、俯き加減の瞳で、自分の左腕をギュッと掴んでいる葵さんの姿が映った。

え……！ どうして？　なんで、そんなに寂しそうな顔をしているんだ？

「あ……」

……駄目だ。声をかけようとしたが、言葉が出てこなかった……。そのまま、さっきまで吹いていた風が急に止んで回らなくなった風車のように、俺は動けなくなった。

周りの生徒が、掲示板の前で立ち止まっている俺と葵さんを邪魔そうに見ている。

俺は、揺れていた。

いや、多分揺れていると感じているだけなのだろう。

だけど確かに俺の頭はクラクラしていて、今にも倒れてしまいそうな感覚に包まれていた。

くっ、何で、こんな……。

不意に、あの頃の自分が思い浮かんできた。

学校に行かずにずっと一人でいた時の事を。

なにも無い自分を否定されたようで、それが怖くて、ただ日々を過ごしていた頃を。

葵さんの瞳は、どこかそれに重なって見えた。

「……なぐんてねっ。冗談だよっ！」

「ふえ？　じよ、冗談？」

「うん、そうだよ。ちよっと進くんを困らせてみたくなったんだあ。えへへっ」

葵さんはそう言って、さっきまでの明るい表情に戻ってみせた。
冗談……なのか？

そう、だよな。こんなに笑顔の似合う人が、そんな訳ないもんな。
なら良かった。少しホッとする。

「じゃあ、そろそろ教室行こっか。進くん」

「あ、はい、そうですねっ。それじゃあ、行きましようか」

今の寂しそうな顔は気のせいだったのか、とまだ少し気にしつつも、俺は葵さんと一緒に教室に向かった。

「じゃあ、また後でねっ」

1―Dとプレートに書かれた教室の前で立ち止まる俺に手を振って、葵さんは1―Cの教室にと入っていく。

「よしっ、俺も入るか」

少し気合いを入れて、1―Dの扉を開ける。

教室に入ると、もう結構な人がいた。

それぞれ話をしたり、緊張した面持ちで席に着いていたり、キョロキョロと落ち着きなく周りを眺めていたり、逆に落ち着いて本を読んでいる人もいる。

この人達が、今日から1年間を共に過ごす事になるクラスメイト。
うわっ、ちょっと緊張してきたあゝ。

うまくやっていけるだろうか。不安になる。

……いや、弱気になるな！　ここで変わるんだろ？　頑張れっ俺！

気合いを入れ直す。うん！

よし、じゃあまずは席だな、席を探そう。俺の席は、と。

――あ、あった。窓際の前から2番目の机だ。机に出席番号と名前が書いてある紙がテープで貼ってある。

しっかりとした木製の机は3人くらいまで座れる程広く、真ん中にスペースを空けて椅子が二つ置かれていた。

どうやら一つの机に2人ずつ座るようだ。

用意されていた自分の席に着く。

「ふう」

んー、やっぱり自分の場所があるっていうのは落ち着くなあ。

一息吐き、窓の外を見る。中庭が見えた。

結構広いな、たくさん花が咲いていてベンチなんかもあるや。噴水もあるし、のんびりお昼ご飯を食べるのに良さそうだ。

「……ん？」

あれ、あの噴水……もしかして……。

中庭の一点にあるへそれへに気づき、俺は小さく笑う。

「そういえば、理事長が言ってたもんな」

……その噴水はなんと、丸っこいクジラの形をしていた。

いや、形だけじゃない。あの、まあるゝいつぶらな瞳。大きな口、お腹の線まで、形よく造ってあった。

それはまるで、あのクジラがゆったりと海を泳いでいるかの様。

……ぐはっ、か、可愛い……！ 可愛すぎるうゝゝ！

あまりの可愛さにニヤけだす口元を咄嗟に右手で押さえ、グツと込み上げてくるものを抑える。

くっ、いったいなんて物を造ってくれたんだ、あの理事長は。まったく、クジラ好きにも程があるだろう。……でも……あつりがと……ございまっす！ ナイスです！ 理事長万歳！

心の中でたくさんの俺が、白い髭をフサフサと伸ばして笑っている理事長を胴上げする。

「……はっ！」

な、何をしているんだ俺は。頭をブンブン振って落ち着きを取り戻す。はふう。

や、でもまさか、あんな可愛いものがあるなんて。ついハイテンションになっちゃったじゃないか。まったくもうっ。

頭を振ってずれた、眼鏡を直す。

って、眼鏡掛けたままだった。

ポケットからさつき仕舞った眼鏡ケースを取り出して、直したばかりの眼鏡を仕舞う。

眼鏡を外すとクジラの瞳が見えなくなった。

……さて、特にすることも無いし、時間まで少し休んでようかな、と目を瞑る。

ふう。こうしてのんびり時間が過ぎるのを待つのも結構好きなんだよなあ。なんか時間を無駄にしている気がしないでもないけど、それはそれで贅沢だと思う。

「――あのっ」

近くで声がした。

「あのっ、すみませんっ」

誰かに話しかけているようだけど、俺じゃないだろう。俺に知り合いいないはずだし。

「えっと……もしかして寝てるの、かなあ？」

……ん、あれ？ もしかして、俺のことなのかな？ 周りから見て、目を閉じてジッとしている人は寝てるように見えるものだろうからな。今の俺がそうなんだろう。この賑わっている教室で他に居るようには思えないし……。

「フン、なら別にいいじゃない。寝てるのなら無理に挨拶なんてしなくても」

「でも、これから隣の席になった人だから、ちゃんと挨拶しておきたいなって」

「ふう、本当に真面目ね、香苗って」

「そ、そうかなあ？」

……やっぱり俺のこと、だよな。

俺は目を開けて、声のした方を向く。

「あっ」

「なんだ、起きてたじゃない」

そこには、女の子が二人立っていた。

一人は大人しそうな可愛い人だった。

優しそうな瞳は少し垂れ下がっていて、もじもじとこちらを見ている。控えめに切り揃えられたショートカットがよく似合っていた。その隣に立っているもう一人はバラのように、綺麗な、それでいて触れれば棘が刺さってしまいそうな、そんな容姿をしていた。

その人は、その勝気そうな瞳で俺を真っ直ぐに見下ろしていた。薄く輝く髪を腰辺りまで伸ばしていて、両耳の辺りに赤いリボン巻いている。

「あ、えっと……」

「フン！ まったく、起きてたのならもっと早く返事しなさいよね！」

——何でしょう？ と訊こうと思ったのだが、俺が言うよりも先に強気そうな方の女の子に怒られてしまった。

「えっと……すみません……」

女の子の剣幕に負けて、なんとなく謝ってしまう。

「フン、なんだか冴えない奴ね」

「優希ちゃん！ 駄目だよ、そんな事言ったら。謝らないと」

「何で？ 本当の事を言っただけよ」

ふう……まさかいきなりそんな事を言われるとは思っていなかった。……まあ、確かに冴えないだろうけど。それにしたって……。

軽く落ち込む。

「あ、えと、いきなり失礼な事を言ってすみません！ でも、優希ちゃんも悪気があるわけじゃないんです。ただちょっと入学式だからって緊張してるだけなんです」

「べ、別に緊張なんてしてないわよ！」

大人しそうな方の女の子が俺に頭を下げて謝り、もう一人の強気そうな女の子は顔を少し赤くして、フンツと小さく鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「い、いえ、別に構いませんよ。多分本当の事ですし、気にしてませんから」

「えっ、えっと、その……すみません……」

？ 気にしてないって言ってるのに、大人しそうな女の子になぜかちよっと困った風に謝られた。

「……えーと。それで、俺にいったい何でしょうか？」

「あ！ えっと、私《叶井^{かないかなえ} 香苗》って言います。あのっ、これから1年間、よろしくお願いしますっ」

俺が訊くと、思い出したみたいに丁寧に頭を下げながら自己紹介してくる大人しそうな女の子――叶井さん。

「あ、えと、一前進です。こちらこそ、よろしくお願いします」俺も頭を下げて、そう返す。

「ほら、優希ちゃんもちゃんと挨拶しないと」

「な、なんで私まで！」

「だって、ほら、前の席だし……」

「だ、だからって別に、自己紹介する必要なんて無いわよっ」

「でも……」

「フン！」

叶井さんに言われて、またそっぽを向く女の子。

「えと……優希ちゃんは私の友達で、《綾瀬^{あやせゆき} 優希》ちゃんって言います。そのっ、普段はちよっとキツイことを言ったりするかもですが、本当は素直になれないだけで、困った人がいたら放っておけない、とても優しい人なんですよ」

まるで自分の事のように自慢げに、満面の笑顔で叶井さんは友達の自己紹介をする。

「なっ！ ちょ、香苗！」

その友達の綾瀬さんは、勝手に紹介された所為か、それとも褒められて照れているだけなのか、真っ赤になって叶井さんに詰め寄る。……仲が良いんだな。ちよっと羨ましくなる。

そんな二人を眺めていたら、「キンコンカンコーン。新入生の皆さん、おはようございます。もうすぐ入学式が始まります。自分の教室に入って席に着いていてください。繰り返しします。新入生の――」と放送が鳴り出した。

「あ、もうこんな時間ですね。席に着きましょう」

叶井さんが言いながら俺の隣の席に座る。

「フン！」

叶井さんに詰め寄っていた綾瀬さんも、自分の席である俺の前の席に座る。その時さらりと髪が泳ぐ。細くて綺麗な髪だと思った。席に着いてしばらくすると、教室の扉を開けて先生らしき人がやってきた。

茶髪のロングヘアで白のスーツを着ている、背の低い女の人だ。

「おお、中々……」

「しゃあ！ 美人先生？ きたあー！」

「でもちよつと若すぎねえ？」

女の人を見た周りの男子生徒から、喜び？ の声上がる。

そう、なのか？ 俺の目じゃなんとなく若そう、くらいにしかわからないんだが。

皆の注目を集める中、女の人がゆっくりと教卓に向かって歩いて行く。そして――

「新人生のみんなあ、おっはようございま〜す！ 今日からこのクラスの担任をすることになった《諸江 美子》もろえよしこでっす！ 美子ちゃんって呼んでくださいっ。んーとですねえ、趣味はあ、裁縫でっす！ それで、時々自分でお洋服を作ったりしてますです。えっへん！ 担当科目はもっちゃん家庭科で、制服のボタンがとれた時などは遠慮せずに先生に言ってくだされば、パパッと直しちゃいますよ。是非、気軽に声をかけてくださいねっ。あつ、それと、ただ今彼氏募集中でっす！ でもお、だからといって先生に恋してはいけませんよ。先生と生徒の禁断の恋、それはそれでロマンティックですけどねっ」

教卓の前に立った本当に先生なのかと思いたくなるような女の人が、いきなりエンジン全開で喋りだした。しかも、最後はウインクまでしたような……。

「「……………」」

教室が静まりかえった。

そりゃそうだろう。いきなりこんな……。

「「お……」」

ん？

「「おお……」」

えっ、何？

「「おお、おおおおー……おおーお！」」

次の瞬間、教室を揺るがすほどの雄叫びが響き渡った。

ええー！ な、何？ いったい何がおき……。

「か、可愛いー！」

「うむっ、実にキュートだ」

「先生！ 俺と付き合ってください！」

「あ、お前ずるいぞ、俺だって！ ……先生！ いや、美子ちゃん

！ 俺と結婚してください！」

「先生！ 俺とパールックの服を作って、デートしませんか？」

「ダ〜メ。美子ちゃんは私のお嫁さんにするんだからっ」

「あーそれ良い。あたしも〜」

……どうやら、男子も女子も入り混じっての先生への告白大会が始まってしまったらしい。周りのクラスメイト達が次々と席を立ち叫んでいる。

「……何、これ？」

とてもじゃないが、突如として始まったこのイベントについていく事ができず、俺はただ静かに眩きを洩らす。

「……」

隣を見ると、叶井さんも俺と同じらしい。小さく口を開け、目をパチパチと瞬かせていた。

「わぁ〜、みんなあ、あつりがと〜！ そんな風に言ってもらえて、先生すっごく嬉しいでっす！ でもおこれから入学式について軽く言っておかなくちゃいけない事があるので、しっかりと聞いててくださいね〜」

「はーい！」

先生がそう言うのと、皆一様に声を揃えて着席した。

……なんか凄い先生だな。なにかの人気アイドルみたいに一瞬で生徒達の心を掴んでしまったようだ。ノリが良いというかなんというか、クラスメイト達もだけど……。

ふう……まあ、なんにしても賑やかなクラスになりそうだなあ。

そうして俺達は、美子先生の簡単な説明を聞いた後に皆で廊下に並び、体育館で行われる入学式に向かった。

入学式は、割とあっさりと終わった。

というのも、俺は話を聞いているうちにだんだんと眠くなってしまっ、ほとんど内容を覚えていなかったからだ。

覚えているのは、在校生代表の生徒が新入生歓迎の挨拶を述べていたのと、理事長がこの学園のモットー「クジラのように大きく、おおらかな心を持った人間に！」について熱く語っていた事。それと、なぜか式の途中で「何だ、あれ？」というざわめきが聞こえてきた事くらいだが、その時はもう眠くて確認しなかった。あれはいったいなんだったんだろうか？

なにはともあれ、こうして新たなスタートである入学式が終わった。

入学式が終わって教室に戻り、各クラスで最初のHRを済ませた後、解散となった。

「あ、あの、一前くん」

席を立ち、帰ろうとしたところで、俺は叶井さんに呼び止められる。

「あ、はい。何でしょう？」

「えっと、その……ま、また明日、です」

叶井さんは遠慮気味に手を挙げてはにかみながら、控えめにそう言ってくれた。

「あ……はい。また明日、です」

俺もそれに応えて軽く手を挙げた。

叶井さんと挨拶を交わして教室を出ると、廊下の少し離れたところに葵さんがいた。

「あ、進くん！」

葵さんが駆け寄ってくる。

「葵さん？ どうしたんですか？」

「うん、えっとね、進くんと一緒に帰ろうかなって思って……」

「？ 別に構いませんが……ああ、そっか。……そんなに心配しなくても、学園からの帰り道なら大丈夫ですよ。朝のはちょっとボーツとしてただけであって……そこまで気にしてもらえるのは嬉しいのですが……俺なら、全然平気ですよっ」

朝助けてもらった上に、今度道案内までしてもらえるんだ。既に把握しているところまでお世話になるわけにはいかない。

「あ、ちがうちがう、そうじゃないよっ。そうじゃなくて……ただ、進くんと一緒に帰ろうと思っただけだよっ」

胸の前で手を振り、道案内の為じゃないと主張する葵さん。

「そうなんですか？」

「うん！」

ふむ、まあそうだよな。普通に考えて、自分の通学路を知らない、なんて思うわけないよな。

んー、でも、だったら別に一緒に帰らなくてもいいような気もするんだが……まあ断る理由なんて無いけど……。いや、それよりもむしろ嬉しいくらいだ。

朝も思ったけど、こうして誰かと一緒に登校したりするのって、なんか、学生っぽくて良いよなあ。

中学にまともに行っていない俺にはこういう経験があまり無い。だから、高校に行ったら友達といつかは！ っと、密かに憧れていたにしていた。それがこんなに早く、しかも入学初日から叶うなんて……。

葵さんには、いつかお礼をしないといけないな。

「……分かりました。俺で良ければ、ぜひ！」

つい感激してしまい、妙に気合いの入った返事をしてしまった。

「うん？」

そんな俺の事情を知らない葵さんは、頭の上に疑問符を浮かべながら頷いた。

「えと……じゃあ帰ろっか、進くん」

「はい！」

玄関を出て、校門を抜けると葵さんが訊いてきた。

「入学式、終わったねっ」

「はい。そうですね」

「それにしても……式の途中で出てきた、あれ、びっくりしたよねっ！」

「？ あれ……ですか？」

いったい何のことだろう？ 半分寝てたから覚えてない。

「うん！ ほらっ、あのクジラの着ぐるみっ。覚えてない？」

なっ、なんだってっ！ クジラの着ぐるみ！

「ちょ、あの……それっ、本当ですかっ！」

「え！ う、うん。本当だよ。なんか周りがざわざわしだしたから、なにかなあ？ ってステージ見てみたらクジラが踊ってて……もうびっくりしたよう。……もしかして進くん、見てなかったの？」

そ、そんな……じゃあ、あの時のざわめきは……くっ、そういうことだったのかぁー……！

くうっ、なんてことだ！ まさかそんなビッグイベントを見逃すなんて……。

衝撃の事実を聞いてしまった俺は、あまりのショックに肩を落として項垂れる。

「ど、どうしたの進くん！」

急に地面に手をつき落ち込むという奇怪な行動をとった俺を、驚きながらも気遣ってくれる葵さん。

「い、いえ……ちょっと、躓いてしまって……」

「だ、大丈夫？」

「はは、大丈夫です」

苦笑いを浮かべて立ち上がる。

危ない危ない、クジラの事になるとついキャラが変わってしまう。というかテンションが変わってしまう。教室で理事長のことを思ったけど、俺も人のこと言えないな。

……まあ可愛い物ならクジラ以外も大好きだけど。

あゝ、でもやっぱり見たかったなあ……。

「……あ、ねえ。じゃあ、進くんのクラスはどうだった？ 私のクラスは中々面白そうだったよ。友達もできたし」

「え、ああ。えっとですね……」

頬に人指し指を当てながら、どうだったかを思い出す。

「えっと、先生が凄かったです」

「先生？」

「はい」

とても先生とは思えなかった美子先生の事を、葵さんに説明する。
「へえ。なんだか楽しそうなクラスだねっ。いいなあ、そんな人が担任で。ウチはおじいちゃん先生だったよお」

ちよっと拗ねたような顔になる葵さん。

「はは……」

まあ、確かに楽しそうだったけど。なんとなく、不安を感じずにはいられなかったんだなあ。

「他には？ クラスの人はどうだった？」

先生の話を聞いた所為か、何かを期待しているような瞳で葵さんが訊いてくる。

「ん」と、隣の席になった人が良い人そうで良かったです。あ、あと、前の席の人とその人が友達で、凄く仲が良さそうで、それなんか良いなあって思いました」

俺は叶井さんと綾瀬さんの事を思い出しながら言った。

「その人達って、男の子？ 女の子？」

「あ、二人とも女の子です」

「そうなんだ。その二人可愛かった？」

「えっ、ん？俺そういうのよくわかんなくて……。苦手なのか、恥ずかしいのかはわからないんですが、あんまり女の人の顔とか見られないんです……。あ、でも、二人とも可愛い人だったと思います」
この町へ来る2年余り、俺はあまり人と接してこなかった所為か、特に異性に対しては若干の苦手意識がある。それを克服するというのも、ここに来た目標の一つだ。

「そうなの？ 別にそんな風には見えないけど、こうやって普通に話してるし……。ハッ、じゃあ私の顔はっ。私の顔もまだ覚えてなかったりするの？」

「えっ！ い、いえ、大丈夫ですよ。まともに目を合わせられないってくらいで、少しくらいなら見られますし……。それに、その……あ、葵さんは、とっ、友達ですからっ！」

真剣な表情になった葵さんに、勇気を出して俺は友達宣言する。

「えっ！ 友達……」

驚きと共に少し意外そうな表情をする葵さん。

「あ、はい。えと、嫌……。でしょうか？」

不安になって訊き返す。

「……ううん、嫌じゃないよ。全然嫌じゃないよ！ すっごく嬉しいよ！」

暗い部屋に明かりが灯ったように、パツと葵さんの表情が明るくなる。

うっ。そんなに嬉しそうにされると、て、照れてくる。

「あっ、もうこんな所ですねっ」

照れ隠しに前を見たら、商店街の入り口が目の前にあった。

「あっ、ホントだ……。残念、もっと進くんとお話したかったのにな」

「ふふっ、そうですね。……。葵さんはどちらですか？ 俺は左です」

「あ、私は右だよ。って朝も通ったような……」

「えっ。そ、そうでしたっけ？」

「うん！　もしかして、お話しに夢中で気付かなかった？」

「うーん。そ、そうかも知れません」

「ふふっ、そっか。やっぱり進くんって面白いねっ」

「あ……」

葵さんが笑ってそう言うのと、またくすぐったいような気持ちになった。

「ふふっ。それじゃ進くん、またねっ！　ばいばい」

「あ、はい。また……」

大きく手を振って駆け出しながら帰って行く葵さん。

俺はそれを見送った後、自分の部屋があるアパートを目指した。

部屋に帰ると、まず黒色のジャージに着替えた。服をあまり持っていないので、とりあえずこれを部屋着にしている。

それから昼食の醤油ラーメンを作って食べる。5食パックで売っているお得なやつだ。

食べ終わると台所に持っていく。朝洗ったから食器は今使った一つだけしかない。

ん、夜にまとめて洗おうっと。

さてと、これからなにしようかなあ、と考えてみる。

「んー。あっ、そうだ。入学式終わったって、お母さんに連絡しないと」

俺はカバンから携帯電話を取り出し、メール作成画面を開いて本文を打ち込む。

「えーと。――入学式終わったよ。最初ボーっとしてて道に迷ったけど、そのおかげで友達ができました。クラスの人達も面白そうだった。特に、先生が。それに、隣の席の人も良い人そうで良かった。

る。

こっち側には桜並木があつて、その横を緩やかな川が流れている。「何か久しぶりだなあ、こうして走るのも。いや、朝のは抜きにして」

なんて独り言をぼやきながら、その川沿いをのんびりとランニングする。

「……にしても……」

本当、面白そうな学園で良かったなあ。

元気一杯な葵さんっていう友達ができたし。隣の席になった叶井さんも優しそうな人だったし。前の席の綾瀬さんは……まあ、その……綺麗な人だったし。そういえば、神社の林で会ったあの女の子は何組になったんだろう？ 学園で会ったら、もう一度ちゃんとお礼を言わないとな。

まだ始まったばかりの学園生活だけど、これから色々な行事や、毎日のちょっとした出来事。きっと、たくさん楽しい事があるんだろうな。

そして、その中で必ず、俺だけのモノを見つけてみせる。

「ふふっ。よし、頑張るぞ」

その思いに向かつて行けるようにと、桜が舞う中、俺は走るスピードを上げた。

一歩目 変わったらしいなあと思う（後書き）

もしよろしければ、感想&アドバイスをお願いします（＜―＞）

——ルビ付けた事に感動（TOT）

二歩目 変われるキツカケ……なのかなあと思う（前書き）

本編の続きです（＊＾―＾＊）

本編中1番のページ数になってしまった、体験入部でのお話です。どうも僕は細かく書きすぎるようで、「これいらないんじゃないか……」という部分が結構あったりするとは思いますが……

ですが、そこは長い目で見守ってやってください（＜―＞）

では、よろしくお願いしますですm（―）m

二歩目 変われるキツカケ……なのかなあと思う

新たなスタートである記念すべき入学式を終えてから一週間程、皆も少しずつ高校生活に慣れてきたようだ。

そんな4月の半ばを過ぎた朝のHR。

「はーい、みんなあ。今日も元気に、おっはようございまーす！」

「「おっはようございまーす！」」

いつものように、元気な挨拶を交わす美子先生とクラスメイト達。それに混じって、元気があるともないとも言えないくらいの大きさの声で俺は挨拶する。

「ふふっ。今日もみんなが元気で嬉しいでっす！ さてさて、みんなも少しずつ学園に慣れてきた頃だと思えます。そこで、今日はみんなにお知らせがありまっす。じゃじゃーん！ なんと今日から2日間、各部活で体験入部が始まっちゃいまーす！ わあー、良いですねー青春ですねー。先生も、学生時代は恋をほったらかしにしてまで部活に熱中してたものです。まあでも、そのおかげで……はあ……」

てつきり部活の素晴らしさを教えてくれるのかと思いきや、何か嫌な事でも思い出したようで、皆の前で深いため息を吐く美子先生。

「先生、落ち込まないでください！」

「そうだよっ！ 美子ちゃんまだ若くて美人だし、幾らでもチャンスがあるよ！」

「そうだ！ それに先生には俺たちがついていきます！」

そんな落ち込んでしまった美子先生を見て、励ましの言葉を送るクラスメイト達。

「っ……みんなあー！ うん……うん！ ありがとう！ 先生、みんなのクラスで良かった……」

「せ、先生ー！」

ホロリと泣き出した先生に、皆は席を立ち駆け寄って行く。

えーっと……。

「ふう、まったく……朝から元気がいいわね、ホント……」

俺の前の席に座っている綾瀬さんが、机に頬杖をつきながら氣だるそうに呟いた。

だがそのしぐさとは裏腹に、彼女の腰辺りまである線の細い白色の髪は、今日も彼女の鮮麗な容姿を表すかのように煌めいている。

「みんな、ありがとう。先生はもう大丈夫だから、自分の席に着いてくださいねっ」

美子先生が女子生徒から渡されたハンカチで涙を拭いながら、まだ少し涙声で皆を席に戻るよう促す。

本氣泣きだったのか……。

「よし、それでは氣を取り直していっちゃいますよー！ ではでは、これからみんなに部活の入部希望用紙と、どんな部活が在るのかや、その活動場所を記した表も一緒に作ってみたので配りたいと思いますっす！ 部活を決める参考にしてくださいねー」

そうして美子先生は、2種類の紙を「1枚ずつ取って後ろに回してくださいねー」とそれぞれの列にその人数分配り歩く。

「ん！」

俺は、「早く取って」と言わんばかりの綾瀬さんから紙を受け取り、自分の分を取って後ろの席に渡す。

「？」

紙を後ろの席に渡した俺が振り返ると、何か言いたそうな顔で綾瀬さんがこちらを見ていた。

「優希ちゃん？」

俺の隣に座っている叶井さんも、どうしたんだろーという風に、その大人しそうな瞳で彼女の友達である綾瀬さんを見つめていた。

「……………」

「……えっと、ありがとう？ です」

綾瀬さんが何も言わないので、とりあえずそう言ってみた。

「ふん！」

すると綾瀬さんは、なぜか怒ったみたいに前を向く。
？ 何なんだ、いったい。俺、何かしたかなあ？

どうも入学式の日から綾瀬さんは苦手だ。まあ、綾瀬さんだけじゃなくて他の女の人も苦手なんだけど……。というか人と話すのが苦手なだけだ俺は。

昔はこうでもなかったんだけどなあ……。

遠慮なんてことをまったく知らず、誰とでも気楽に話しをしてた。まあ悪い事ばかりしてた気がするけど……。でも、それでも明るく笑ってた。ホント、良くも悪くもちよとしたキツカケで変わるもんだよなあ人間って。

でも、だからこそ、もう1度変わってみたいんだけどな。

「じゃあこれで朝のHRを終わります。みんなあ、自分に合った部活を見つけて楽しい学園生活を送ってくださいね」

HRが終わると、美子先生は教室を出て行った。

少しするとチャイムが鳴り、1時間目の歴史を担当する先生がやってきて授業が始まった。

——自分に合った部活。

授業中にも係わらず、俺はずっとどうしようかと考えていた。変わるため、新しい何かを見つけるために、そして嫌な過去を払拭するためにこの街に引っ越してきた、つもりだ。

もう一度夢を見てみるのが良いか。これから先のためにバイトを増やして貯金に励んでみるのが良いのか。それとも、新しい何かがある処へ踏み出してみるか。

まあどれを選ぶにせよ、勇気を出さなきゃ始められないだろうけど。本気になることを忘れた俺には難しい事かもしれない……。――って、マイナスに考えてどうする！ それでも変わるって決めたんだろ！ だったら変わるための努力をすればいいだけの事じゃないか！

でも、やっぱり俺は……。

そんな事を考えていたら、あっという間にお昼休みになった。

もうこんな時間か……。

教科書を机に仕舞い、カバンの中から今日のお昼を取り出す。

「やつほー、進くん。今日も一緒に食べよう」

お昼ご飯のパンを机の上に並べていると、葵さんが元気な声をかけてきた。

入学式の日知り合った彼女はお昼休みになると、隣のクラスの1―Cから、この1―Dにやってくる。

人と話すが、特に女の子とは顔を見て話すこともできない程苦手な俺が、なぜか彼女とは割と普通に話すことができる。彼女の明るさのおかげだろうか？

葵さんは、お昼を叶井さんと一緒に別の場所で食べていて空いている綾瀬さんの席から椅子を借りると、そこに座った。

「ねねっ、進くん。もうどんな部活にするか決めた？」

持ってきたお弁当箱を広げると、葵さんはさっそく、今最も学園内で注目されているであろう話題を振ってきた。

少し耳を傾ければ、他の所からも部活についての会話をしているのが聞こえてくる。

「いえ。まだどうしようか、迷ってます」

「そうだよね。これだけいっぱいあると迷っちゃうよね」

朝、俺達のクラスで配られたのと同じ紙を葵さんのクラスでも配られたのだろう。葵さんは制服のポケットから部活リストを取り出して、俺にも見えるように机の上に置いた。

リストは、体育会系と文科系、そのどちらでもないエキストラの3つに分類されていてすごく判りやすかった。

野球部やバレー部等の定番の部活から、聞いたことはないが、なんとなくどんな部活か分かる？ レーシング部やサムライ部等。あとは、ファンシー部？ 頭の中に沢山のヌイグルミが浮かんできた。……ちよつと入ってみたいかも。

想像して頬が緩みそうになる。

……じゃなくて、本当にいろいろあるなあ。全部でどれだけ在る

んだろうか、後で数えてみようかな。

「——って、あれ？ 葵さんは剣道部じゃないんですか？」

リストから剣道部の名前を見つけて、葵さんと出会った時の事を思い出した俺は、葵さんに訊いてみた。

「え？ どうして？」

「え、えと。初めて会った時に、確か剣道着みたいなのを着ていたの。もしかしてそうなのかなあって思ってた……」

「ああ、そういえばそうだったよね。うん。納得、納得」

葵さん aussi 思い出したようで、首を何度も頷かせている。

「私ね、中学まで剣道やってたんだけど、高校に入ったら何か新しい事に挑戦したいって思ってたんだ。でもその時の習慣っていうか、よく大事な日とかにはああやって『よし、やるぞお！』って気合いを入れてたんだあ」

「あ、なんか分かるような気がします」

俺も中学に行ってた頃は、よく似たような事をしていたからな。

「だよねっ。あつ、進くんは何か部活してたの？」

「えっ、あ、えと……」

「うん、うん」

教えて、と期待を含んでいるような目で見つめられる。

そんなに見られると、恥ずかしい。

「えと、その……一応、サッカー部に」

「へえ、そうなんだあ。進くん、運動得意そうだもんねっ」

「いえ、そんな事は……ないです……」

なんか、照れる。

「でも進くん、一応って変な言い方するんだね。高校じゃサッカー部に入らないの？」

「……………」

純粹に疑問を投げかけてくる葵さん。

その言葉が俺の気持ちを揺るがした。

サッカー部……。俺は、みんなと……

——いや、もう決めたんだ。

一瞬、どう答えようか迷ったが、結局さっき決めたことを口にした。

「はい。何か別の事をしてみたくて」

「じゃあ、私と一緒にだねっ」

葵さんが笑う。

「ふふ、そうですね」

……俺のは少しだけ後ろ向きな気持ちが混じってるかもだけど。でも、変わりたいのは本当だから。

「うーん。どれにしようかなあ」

リストを見ながら唸る葵さんは楽しそうだ。

俺も、もう一度リストに目をおとす。

と見ていたら、ふと、目に留まる言葉があった。

《きつとこの先、たくさんの笑顔が君達を待っているだろう》

！　たくさんの笑顔……。

まるで、俺の心が求めているものを見透かしたような言葉だった。何だろう？　何か、何かが俺の体の奥底にある扉を叩いているような、不思議な感覚が体を駆け巡った。

……もしかしたら、ここなら俺を変えてくれるかもしれない。何故だか、そんな気がした。

俺は急いで視線を横にずらして、その紹介文が書かれている部活名を確認する。

「お助け部……」

「何々？　何かあった？」

「あ、その……これ……」

訊いてきた葵さんに、俺はエキストラの下の方に書かれていたそれを、人指し指で示す。

「お助け部？　うんと、『きつとこの先、たくさんの笑顔が君達を待っているだろう』——へえ、なんだか素敵な言葉だねっ」

葵さんがリストを見てそう言った時、再び俺の目は吸い込まれる

ようにその言葉を映していた。

「活動場所は……お助けベアーだって。あはっ、おもしろそう」
書かれている活動場所を見て、葵さんが笑う。

俺はリストから目を逸らさずに想像してみる。

「お助けベアー？ クマが現れて生徒を助けてくれたりするのだから？ それ、逆に怖い気がする。」

「……あのさ、それじゃあ、放課後見に行ってみよっか？」

俺の動かない視線に気づいたからか、葵さんが提案してきた。

「進くん、なんだか気になってるみたいだから」

「えっ、ああ、いやその……良いんですか？ 葵さん、他に見たい部活とかは？」

「良いよ。だって、私もどんな部活か気になるんだもん」

「……そっか。葵さんがそう言うなら、せっかくだし見に行ってみようかな。」

一人だと、もし本当にクマがいたら怖いし。まあそんな事は有り得ないけど、危ないかもだし。それに、一人だとちょっと心細いし。なにより、俺自身が行きたいっ。

「……あのっ、それじゃあ、お願いできますか？」

「うんっ。じゃあ放課後、一緒に見に行こうねっ、進くん」

今日の授業が終わり、放課後になった。

カバンに教科書を仕舞って帰り支度を整える。

「あの、一前くん。また明日、です」

俺より先に支度を済ませた叶井さんが、帰りの挨拶をしてくれた。

「あ、はい。また明日です」

叶井さんは、いつも朝と帰りに声をかけてくれる。

いくら隣の席だからってそんなに気を使わなくてもいいのに。ホント、真面目な良い人だと思う。

「じゃ、行くわよ香苗」

「うん、優希ちゃん」

叶井さんは俺に軽くお辞儀をした後、同じく支度を済ませた綾瀬さんと一緒に教室を出て行った。俺も行こう。

教室を出ると、葵さんが待っていてくれた。

「あつ、進くん。よし、じゃあ行こっか」

「はい」

たくさん部の活があるこの学園には校舎とは別に、部室棟と呼ばれる建物があるみたいだ。

主に文科系の部室がある部室棟は4階建てで、リストをみると、その4階にお助け部の部室もあるらしかった。

「……なんか静かだね」

葵さんが呟いた。

「そうですね。人があまり……というか、いませんね」

部室棟の1階、2階、3階と通ってきたわけだが、どの階にも一年生らしき生徒で賑わっていたように思う。

しかし、この4階に來てみると、他の階とは違って廊下に生徒が1人も見当たらなかった。

本当にここなんだろうか？ 少しぐらい誰かの声がしてもいいだろうに。

不安に感じながら廊下を歩く。

周りを見ると、ストッキング部、フェアリー部、BWH研究会などの何をするのかよく判らない部活名が書かれたプレートが並んでいる。

その中からお助けベアーと書かれたプレートを探して進むと、廊下の一番奥、明らかに他の部屋の扉とは違う、目立って仕方がない扉が視界に入ってきた。

何だあれ？ まさか、いや、そんな……。

「あつ、見てみて進くん。あそこにクマさんがいるよ！」

葵さんが面白いものでも見つけたようにはしゃいだ声を出して、

それを指差した。

その指が示す先には、クマがいた。

扉に絵具で描かれた可愛いクマが、お腹の部分のコルクボードを手に持って、「僕はおたすけベアー、よろしくね」と言っていた。

……いいのか？ 扉にこんなことして。

いや、それよりも……もしかして、ここ、なのか？ ここなんですかつ、クマさん？

「ねね、進くん。もしかして、ここなのかな？ おたすけベアーってクマさんも言ってるし。ここだよねっ！」

扉のクマを見ながら言う葵さんは楽しそうだ。

……やっぱり、ここ、なんだろうな、きっと。部屋の名前が書かれているプレートにも「お助けベアー」って書かれているし、間違いないだろう。

でもなあ、いくら可愛いものが好きな俺でも、さすがにこれはどうかと思うんだが。いやまあ、可愛いんだけど。

「えっと……どうしましょうか？」

「どうするって、進くん入らないの？」

「いやあ、その……はは」

だってなあ、なんか入りづらいし。

「入ってみようよ。おもしろそうだよ。ねっ、ねっ」

入る気満々の葵さんが俺の手を取る。

うう、そんな風にされたら断れないじゃないか。そもそも俺が葵さんを誘ったようなものだし、断る訳にもいかない。

……しょうがない、ちよっとだけ入ってみるか。

「すうー、はあー……よしっ」

俺は一つ深呼吸して、軽くノックをしてから、扉に手を掛けた。

「失礼します。たいけ……んぷっ」

「ようこそーお助け部へー。クマックーマッ」

扉を開けて中に入ろうとしたらいきなり、部屋の中に居た柔らか

い何かに包まれた。

な、何？ 何が？

「んふふっ。ぎゅっ」

訳が判らず混乱していると、柔らかい何かはしつかりと俺を抱きしめてくる。

「ふぁ、ふぁなちて」

放して、と言いたいののに、頭からギュッと抱えられてしまっている為、うまく喋れない。

「くっ！」

俺は抱きしめられながらも、何が何だか分からない状況から逃れようともがき、なんとかその拘束から抜け出して、状況を確認する為に顔を上げ、抱きついてきたモノの姿を見る。

俺を拘束したそれは――クマだった。またしてもクマがいた。

だが、今度のクマは扉に描かれた硬くて冷たい平面なクマとは違って、柔らかくて暖かな立体的なクマだった。

「……着ぐるみ？」

「はい？ 違いますよ。わたしは、おたすけベアーですよ」

俺の呟きにクマがのんびりとした口調で答えた。

えっと、マスコットキャラって事だろうか。

「あのっ、私たち体験入部にきたのですが、中に入れてもらってもいいでしょうか？」

どうすればいいのか判らずおたすけベアーと対峙していると、その後ろで部屋に入れずにいた葵さんが、部屋の外からおたすけベアーに訊ねた。

「はい、もちろんですよ。どうぞ、お入りになってください」

おたすけベアーが丁寧に、手の平を部屋の中に向けて指し示した。俺と葵さんは部屋の中に入る。

部屋の中央にはがっしりとしてそうな机が置いてあり、その両隣にソファが置いてあった。壁際には本棚もある。さらに驚く事に、本棚の向かいには手洗い場までもがあった。

あ、中はわりと普通だ。いや、立派と言ってもいいくらいだ——と一瞬思ったのだが……。

「クマ……」

部屋の奥、上座の方に置かれている机の椅子に、頭に赤いリボンをつけた大きなクマが座っていた。

また着ぐるみだろうか？ でも、それにしても動かないよな。着ぐるみじゃなくて縫いぐるみなのか？ 大きいなあ、抱きつきたいかも。

それによく見ると、本棚の上にも小さなクマの縫いぐるみが3つ飾ってあった。さらにもっとよく見てみると、ソファの下に敷いてあるカーペットまでもがクマ柄だった。

……あははー、ここはクマさんがいっぱいだー。わーいわーい、嬉しいなー。あははははー……。

……何だここは？ クマだらけじゃないかーっ！

何？ もしかしてファンシー部ってやつと一緒に部室なの？ 共同生活なの？ それともクマさんのお家だったり……なのですかーっ？

はあはあ……ぐう、駄目だ、この部屋は危険だ。ここに居ると俺の中の何かが壊れていくような気がする。

葵さんには悪いが、ここは一旦帰った方がいいかも。でもそれとは反対に、もっとこの部屋に居たいという気持ちもあったりする。くうー、俺はいつたい……どうすればいいんだあー！

「ううっ」

「進くん、大丈夫？ 頭痛いの？」

葵さんが頭を押さえて唸る俺を、心配そうに覗き込んできた。

「う、いえ、大丈夫……です」

そうだ、とりあえず落ち着こう。落ち着くんのだ、俺。こういう時は何か別の事を考えよう。

クマを頭の隅っこに追い払う。

——あー、チョコレートが食べたい。できればチョコパフェがい

いなあ。はふ、おいしそう。

チョコパフェを思い浮かべて幸せに浸る。

その間におたすけベアーは椅子に座っている大きな縫いぐるみのところへ移動していた。

「凜ちゃん、お客さんが来ましたよ」

そして誰かに話しかける。

「？」

いったい誰に話しかけてるんだ？

俺は葵さんと顔を見合わせる。

「誰と話してるのかな？」

この部屋に居るのは、俺と葵さんとおたすけベアーだけだと思うのだが。

「凜ちゃん、起きてください。お客様ですよ。朝ですよ」

どうもおたすけベアーはあの縫いぐるみに話しかけているように見える。

今はもう朝どころか、おやつの時間も過ぎちゃってますが……。

もしかして、やっぱりあれも着ぐるみだったのか。

「んあ……はちみつくれたら起きるう……」

寝ぼけたような口調が、もそもそと動いているリボンをつけたクマから聞こえてきた。

「もう凜ちゃんたらっ。すっかりクマさんになっちゃってますね」

「はちみつ」

「んふふっ、本当に凜ちゃんは可愛いんですから」

おたすけベアーがうっとりとした風に手を頬に当てる。

実際は表情が見えないのでうっとりしているのかは判らないが、声の調子からしてそうだろうと思う。

「はちみつ、私も欲しいなあ」

人差し指を唇に当てて、葵さんが物欲しそうに言った。俺も欲しいかも。

「んゝ、ひとまずお茶でも淹れましょうか。お二人とも、そちらに座ってくつろいでいてくださいねゝ」

おたすけベアーはそう言うのと、部屋にある手洗い場の前に立って、そこにある食器棚に並べてあったカップを掴もうと手を伸ばした。

「あ」

俺は次に起こるであろう出来事を予想して、おたすけベアーの元へと急いで駆け出す。

「あらゝ？」

カップを掴もうとしたおたすけベアー。

だが、その指も爪も無い丸い手でうまく掴めるはずもなく、カップは零れ落ちる。

俺は必死に手を伸ばす。

しかし、急に動いたからか、俺の足はもつれ、バランスを崩してしまう。

「くっ」

それでもしっかりとカップの動きを目で追いかけて、落下地点に向けて手を差し出す。

大丈夫だ、間に合う。

手にカップの固い感触が伝わる。

よし、セーフ……。

「危ないっ！」

「っ！」

葵さんの声が聞こえたと思ったら、次の瞬間、肩に衝撃が走った。

「っあ！」

「な、何事だ！」

大きな音に反応して、眠っていたクマが椅子から立ち上がり、辺りを見回しているのが視界の端に見えた気がした。

「進くん！」

葵さんが駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか！ すみません、わたしの不注意で……すぐに診せ

てください」

おたすけベアーが、壁にぶつけた俺の肩の様子を見ようと屈んでくる。

「ついえ、ちょっとぶつけただけですから。大丈夫です」

それよりカップは……あった。

壁にぶつかった際に手からこぼれてしまったカップは、俺の足元に転がっていた。

ふう、割れなくて良かった。

カップの無事を確認して立ち上がろうとする俺の手を、おたすけベアーはそのやわらかい両手で優しく包みこんできた。

「ダメです、ちゃんと診せてください！ わたしの所為でこんな……もし腫れてでもいたら……」

「いえ、平気で——」

「ダメですっ！」

おたすけベアーが俺に詰め寄って来る。着ぐるみの向こうの表情が伝わってくるような気がした。

「……分かりました」

本当に大丈夫なんだけどな、そこまで必死な声で言われたら断れない。ここで断って心配させるよりも、今診てもらって安心してもらった方が、俺としても気持ちやすっきりするだろうからな。

「では、失礼しますね」

おたすけベアーが俺の制服の肩を捲ろうとして手を置いた。

「……あ、あら？」

うまく捲れない。

「あのっ、それ脱いだ方が……」

葵さんがもつともなアドバイスをおたすけベアーに渡す。

「え？ ……あっ。そうでしたね、わたし、おたすけベアーになってたんでした。すみません、すぐに脱ぎますので」

着ぐるみ着てたのを忘れてたのか。さっきカップを落としたばかりなのに……それだけクマになりきっていたということか。それと

も、着ぐるみを着ているのを忘れるくらい心配してくれたのか。まあ両方っぽいけど。

「あら？ 手が……」

おたすけベアーは両手を背中に回して前屈みになりながら、一生懸命に何かと格闘し始めた。

「えっと……これ、ですか？」

「あ、はい。それです、それです」

葵さんがおたすけベアーの後ろに回って訊くと、おたすけベアーが頭を振って答えた。

葵さんがしゃがんだと思ったら、おたすけベアーのフカフカの体が床に落ちた。代わりにその下から蒼鯨学園の女子制服が現れる。

「んっしょっ」

さらにおたすけベアーだった女生徒は、残された頭をとって、かぶりを振った。

柔らかなような長い髪がふわふわと波打つ。

大人びた雰囲気のおっとりとした女の人がそこに居た。

「ありがとうございます、手伝ってもらっちゃいました」

「あ、い、いえっ」

その人は葵さんに頭を下げると俺に近づいてきた。

「すみません、お待たせしてしまっ。では、今度こそ……」

肩に手が添えられる。それと同時に、すぐ目の前に女の人の顔が寄せられた。

「っ」

フローラルミントの香りが鼻を擽る。

「……腫れてはいないようですね。痛みますか？」

「い、いえっ、全然！ 全然平気ですっ！」

緊張してしまっと思わず声が上ずってしまっ。

「そうですか、良かったです。でも念のため保健室に行った方が良くもですな」

女の人はホッと胸に手を当てて安心した溜め息を吐くと、ふんわ

りと微笑んだ。

「……ふにゃあ」

その微笑みを真正面から受けた俺は、顔から火が出そうな代わりに、口から変な声を出して横に倒れた。

「進くんっ？」

「あ、あら〜？ 大丈夫ですか〜？ やっぱり痛みが……」

俺を心配してくれる二つの声を、両腕を顔の前に持ってきて遮る。
「っ〜」

自分の心臓の音がうるさい。体の中で馬が跳ね回っているようだ。どうしてこんなに落ち着かない気持ちになってるんだ？ 胸が苦しいような、恥ずかしいような、とにかく落ち着かない気分だ。

葵さんの暖かい笑顔とはまた違う魅力がその微笑みにはあった。

……ふにゅう〜ん。

「さすがだな、水鳥。どうやらお前の微笑みでイチコロみたいだぞ。まったく、罪づくりな女だな」

「凜ちゃん？ いつの間に起きたんですか〜？」

「ん、ああ。そりゃ起きるだろう、あんな音がしたらな」

床で悶えている俺の傍から、声が降りかかってきた。

「おい君、とりあえず落ち着け。彼女が困っているぞ？」

「か、彼女っ！」

葵さんの戸惑ったような声がした。

「ほら、まずは立て。それから一度深呼吸だ」

俺は両脇をグイッと抱えられて、なんとか起き上がる。

「はあうう〜」

「さあ吸って、それから一度止めて、ゆっくりと息を吐くんだ。やってみろ」

脇を抱えられたまま、言われた通りに深呼吸をする。

「すうー、はあー……すうー、はあー……」

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

「は、はい……」

「そうか」

ゆっくりと放される。

おかげでなんとか動悸が治まってきた。

くっ、微笑まれただけでこんなになるなんて、クジラにも勝る破壊力だ。確かにこの微笑みなら誰かを救えるのかもしれない。おたすけベアーの中の人、恐るべし……。

「ところで君達一年生のようだが、うちに体験入部に来たのか？」

リボンをつけたクマが訊いてきた。

あ、あれ、いつの間に？ さっきまであそこに……。

さっきまでクマが眠っていたはずの机の方を見る。

——居ない。じゃあ今俺を抱え起こしてくれたのは、このクマだったのか。

「はい。おもしろそうな部活だなんて思ってた来ました」

葵さんがクマに答える。

「ふむ、そうか。……いや、すまないな。ここ数日、遅くまで色々な企画を考えていたのだが……その所為か、授業が終わって着替えた後、落ち着いた途端急に眠くなってな」

「凜ちゃん、張り切ってたからね」

「ああ。だが、まさか本当に人が来るとは思ってたがな」

「凜ちゃんの頑張りが通じたんですよ。きっと」

クマとおっとりした女の人が仲良さそうに会話をしている。

「ともあれ、歓迎するぞ、君たち！ 我がお助け部によくぞ来た！」

「お助け部によろこそ〜です〜」

と、二人？ がこちらに向けて笑顔で言った。……クマの表情は変わらなかったが。

「「あ……はい！」」

なんだか嬉しくなって、俺と葵さんは顔を見合わせ笑い合い、声を揃えて言った。

「——と言いたところなのだが。実は最後の仕上げがまだ残っていてな。……すまないがまた明日、日を改めてから来てくれないか

？」

「え……？」

「すまないな……」

申し訳なさそうに千藤先輩が謝る。

「あ、いえ……そっかあ、それなら仕方ないですよ。また明日来よう、進くん」

「はい、そうですね。……あの、それじゃ明日楽しみにしていますね」

「ああ、待っているぞ」

二人にそう答えて、俺は葵さんと一緒に部室を出た。

「かわいい二人でしたね」

「ああ、そうだな」

進と葵を見送った後の部室で、床に落ちたままだったカップを拾いながら言った水鳥に、頭に赤いリボンをつけたクマの着グルミを着ている凧が答える。

「……やっぱり、凧ちゃんは優しいですね」

水鳥が拾い終えたカップを棚に戻しながら言う。

「ん？ 何がだ？」

「……最後の仕上げ、なんて言いましたけど、あれ嘘ですよ？
だって……」

沈んだ声で言いかけて、水鳥は俯く。

「んん？ おかしいな、まだ何か残っていた気がしたんだが……どうやら、寝ぼけているみたいだな」

「凧ちゃん……」

「あー、まあ何だ。仕方がないだろう、急に眠気が襲ってきたんだ。さすがのあたしでもアレに抗う事はできん」

腕を組んで、照れ隠しをするように、凧はそっぽを向く。

「……ありがとうございます、凜ちゃん……そうですね、凜ちゃんはこの日のために何日も前から頑張っていましたから」

自分と、自分の失敗の所為で怪我をさせてしまった一年生を氣遣ってくれた凜の気持ちに応えるように、水鳥はいつもの調子に戻る。「ふっ、お前も手伝ってくれたからな。いや、しかしまさか本当に人が来るとはな、驚いた」

「でもこれですぐやりがいも出てきたというものですよ、凜ちゃん」

「ああ、まったくその通りだ。……でもそうだな、ただ1日待たせるのもなんだからな、せっかくだからもう一つ何か考えてみるか。手伝ってくれるな、水鳥」

「はい、もちろんです」

楽しみにしていると云ってくれた二人の一年生の為に、凜と水鳥は動き出す。

「あ、その前に一ついいですか」

「ん？　なんだ？」

「いえ、凜ちゃん、クマさんのままだな〜っと思ひまして」

「おお、そういえばそうだったな」

水鳥に言われて気づいたららしい凜は、頭に赤いリボンのついたクマを脱ぎ捨てる。

「……ふう、すっかり汗をかいてしまったぞ。こうゆうのは傍から見ると楽しいものだが、実際に着てみると案外大変なんだな」

頭を振って、頬に張り付いた髪を汗と一緒に払う。

腰まで伸ばした艶やかな黒髪がサラサラと流れた。

「はい、凜ちゃん」

「おお、すまないな水鳥」

水鳥が、部屋に置いてある冷蔵庫から出して、コップに入れてきた冷たいイチゴ牛乳を凜に手渡す。

「……ふう、生き返るな」

「うふふっ、凜ちゃんオジサンみたいですよ」

イチゴ牛乳を一気に飲み干して息を吐く凜を見て、水鳥が笑う。

「よし、では始めるか！」

「はいっ」

「ではそうだな……」

ガララッ、っと扉の開く音がした。

「ん？」

見ると、お助けベアーと書かれたプレートの下、部屋の入口に少女が立っていた。

肩のあたりで切り揃えられた白い髪。その後ろの辺りに、小さな赤い鈴が付いた葉っぱの髪飾りを左右に一つずつ付けていた。

その髪飾りが少女の髪の色と相まって、雪ウサギを思わせる。

「……」

少女は部屋の中を見つめたまま動かない。

中に入ろうかどうか、迷っているようだった。

「お助け部へようこそ。体験入部の方ですか？」

コクリ。

水鳥が訊くと、少女が小さく頷いた。

「わぁ、やりましたよ凜ちゃん。本日三人目のお客様です」

ポンと手の平を合わせて、水鳥は喜びを表す。

「それでは、どうぞ中へ……と言いたいところなのですが……

…実はまだ準備が終わっていないくて……せつかくですけど、ま

た明日来て頂けませんか？」

喜びを表した明るい声から、少し沈んだ声に変わって水鳥が言う。

「……」

少女は少し目を伏せて落ち込んだかのように見えたが、それから目線を上げ、二人を見てまた小さく頷いた。

「すまないな、せつかく来てくれたのに……」

謝る凜に、少女は首を横に振って、

「……また、明日」

そう呟き二人に背を向け、少女はお助け部の部室を後にした。

＊＊＊

「進くん行こー」

よっぽどお助け部に行くのを楽しみにしていたのだろうか。放課後になると、俺が教室を出る前に葵さんが呼びにきた。

「あ、はい。今……」

俺は急いで机の中の教科書をカバンに詰めて、席を立つ。

「あ、一前くん」

隣の叶井さんが声をかけてきた。

「あ、その……また明日です」

「はいっ。また明日です」

俺も放課後を楽しみにしていたのか、いつもよりも元気に挨拶を返す。

教室を出て、葵さんと昨日行ったお助け部の部室——お助けベアーに向かう。

「いったいどんな事をするのかな？ うーん楽しみだねっ」

「くすっ。はいっ」

葵さんと、どんな事をするのかな、と二人で予想しながら歩く。部室棟4階、その一番奥に、昨日も見えた絵具で描かれた可愛らしいクマの扉が見えた。

クマの鼻をノックする。

「はーい」

部室の中から声がした。

了解を得て扉を開けようとする俺の頭に、昨日の事が思い起こされる。

……一応用心しておこうかな。

横にずれて入口の正面に立たないようにしてから、一度葵さんを見る。

「？」

「一応離れておいた方が……」

「？ ……ああ、そっか。大丈夫だよ進くん、そんなに心配しなくても」

葵さんが笑う。

「そ、そうですか？」

「大丈夫だよっ。あ、じゃあ私が開けてもいいかな？」

俺は、小さく二回頷いて葵さんに答える。

「よし、じゃあ開けるね？」

葵さんが迷いなく扉を横にスライドさせた。

俺は身構える。

……………何も起こらなかった。

「失礼します。約束通り来ましたーっ！」

葵さんが先に元気良く部室に入っていく。安全を確認した俺も続いて入る。

「まあ、来てくれたんですね。お待ちしていました」

「おお、待っていたぞ二人とも」

昨日聞いた二つの声が、俺と葵さんを迎えてくれる。

今日は着ぐるみを着ていないんだな。

「はい。楽しみにしてました」

「ふふ、そうか。それは嬉しいな」

葵さんが言うと、腰まである長い黒髪をした女の人小さく笑った。

「あ……」

綺麗だ……。いや、それ以上に……かっこいい……。

「ん？ どうした？」

その人と目が合った。

「あ、いい、いえっ。……あ、あの、もしかして昨日のリボンをつけた？」

「ん、ああ。そういえば昨日は顔も見せてなかったんだっただ」

その人は立ち上り、いや元々立ってはいいたのだが、こちらに向かって一歩前に出た時、急に壇上に上がったみたいはその人の存在感

が増した気がした。

「あたしは《千藤 凜》、二年だ。このお助け部の部長をやっている。よろしく頼む」

「わたしの名前は《御園 水鳥》と申します。学年は凜ちゃんと同じで二年生です。どうかよろしくお願いしますね」

千藤先輩は毅然とした、でもどこか温もりを感じる態度で。御園先輩はゆったりと、まるで気分が安らいでいくような声で、二人の先輩が名を名乗る。

「私は貴峰 葵ですっ！ よろしくお願いします！」

「あ、えと、一前 進です。よろしくお願いします」

「うむ。よろしくな、二人とも」

「はい、よろしくです」

俺と葵さんが揃って頭を下げると、先輩達が律儀に返してくれた。

……良かった、良い人達みたいだな。結局昨日はよく分んなかったからな、なんか安心した。

「あの、それでどんな事をするんですか？ もう楽しみで……」

「ああ、それならもう少し待ってくれないか？ もう一人来るはずなんだ」

待ちきれない様子の葵さんが訊くと、千藤先輩が答えた。

もう一人？

まあそうだよな。俺達の他にこの部活に興味を持った人がいても、別におかしくはない。

どんな人なんだろうと考えていたその時、ガラッと音を立てて部室の扉が開いた。

「あ、お待ちしていましたよ。さあ、どうぞ中へ」
御園先輩が扉を開けた人に声をかける。

「……」

扉を開けた女の子は、扉を閉め、白い髪を揺らして、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

あれ？ この女の子、あの時の……。

「よしっ、これで全員そろったな。ではさっそく——」

「はぴあちゃん！」

千藤先輩の声を遮って、葵さんが叫んだ。

「……」

女の子は驚いたようにジッと葵さんを見つめている。

「はぴあちゃんだよな？ 私だよっ、葵だよっ！」

女の子の肩を掴んで葵さんが必死に呼びかける。

「覚えてるよねっ？ 小さい頃よく一緒におままごとしたり、浴衣を着て二人で商店街のお祭りに行ったり、神社の林で日が暮れるまで夢中になって遊んだりしたよねっ？」

「……」

女の子は少し言葉を躊躇ったように見えたが、

「……葵……」

小さな唇を動かして葵さんの名前を呟いた。

「……うっ！ う、う、はぴあちゃん！」

葵さんが瞳に光るものを浮かべながら、女の子に抱きつく。

「どうして、どうしてあの時黙って……」

「……」

「……でもそっか、戻ってきたんだね、この街に。だったら笑わなきゃね。……おかえり、はぴあちゃん」

「……ただいま、葵」

「えへへっ」

葵さんと女の子の間に温かな空気が流れる。

……葵さん、嬉しそうだな。

「……なんだかよく分からないが、良かったな」

そんな二人に、千藤先輩が思いやりの言葉を送った。

「……あの、ところで、お二人はお知り合いみたいですけど？」
御園先輩が状況を見守る三人を代表して、二人の女の子に遠慮がちに訊ねる。

「あ、えっと。ぐすっ……私とはぴあちゃん、小さい頃、よく一緒

に遊んでた友達で……でも、あの日、はぴあちゃん引越しちゃって、それで……」

瞳から溢れた涙を拭いながら、幼い頃の事を思い出しながら、懸命に、葵さんは言葉を繋げる。

「……………」

そんな葵さんを見つめている女の子の細い指に、僅かに力が込められたように見えた。

「ふむ。つまりは幼馴染みという事か」

「感動の再会……という訳ですね」

状況を理解した先輩達が納得、と頷く。

「ん？ でも……」

千藤先輩がふと思ったように口を開いた。

「今まで校内で見かけたりはしなかったのか？ 同じ一年なわけだろう？」

「はい……今日まで一度も……」

葵さんが俯く。

千藤先輩は女の子の方を見る。

「……どうやって会ったらいいのか、分からなかった……ずっと……」

そうできなかったことを悔しそうに、女の子は言った。

ずっと……。

そうか、だから入学式の日も神社の林で……。きっとあの時も葵さんに会おうとしてあの場所に居たんだろう。

「でもこうしてまた出会えたのですから、もう迷う事はありません！ ですよう」

「ふふっ、その通りだ。せっかく会えたんだ、もっと喜ぶべきだとあたしは思うぞ？」

「……………」

女の子が葵さんの方に真っ直ぐ向き直る。

「……葵」

「っっ、はぴあちゃんっ！」

葵さんが再び女の子に抱きついた。

さっきと違うのは、葵さんが涙ではなく、笑顔を浮かべているところ。女の子が葵さんの背中に手を回しているところだった。

微笑ましい光景だと思った。

二人を見ていると、俺まで嬉しくなってくる。自然と頬が緩んだ。

「……よし！ では、感動の再会を祝って、あたしと水鳥から、君達に楽しい時間をプレゼントしようではないか！」

高らかに千藤先輩が声を上げる。

「これから君達には、学園で困っている人の手助けをしてきてもらう！」

「手助け、ですか？」

「ああ、そうだ。ここに一枚のメモがある」

そう言って千藤先輩は、制服の胸ポケットから、手帳ぐらいの大きさの小さな紙を取り出す。

「このメモに書かれている人の所へ行き、その人の悩みや頼みを解決してもらう。そして、そのミッションをクリアしたら、その人からこれと同じようなメモが入った封筒をもらってくれ。そうしたらそこに書かれているミッションをクリアして、またその人からメモをもらう。そうして九つのミッションを全てクリアし、これを合わせて、合計十枚のメモを持ってこの部室に戻ってくること。これがあたしと水鳥が考えた、君たちへの贈り物だ！」

ビシッ、っと左手を腰に当て、メモを持った右手を俺達に向けて突き出す千藤先輩。心なしか「決まった」みたいな表情をしているように思う。

——ふむ。要は、行き先の書かれたメモをバトンにしたりレームたいなものだろうか。もっと言えば、宝探しゲームみたいなもの、か？

……パチパチパチッ。手の鳴るような音。

御園先輩が千藤先輩に拍手を送っていた。

パチパチパチッ。葵さんと女の子も手を鳴らす。真似て、俺も控えめに手を叩く。

「おおっ。まさか拍手をもらえるとは……よ、よせ、照れるじゃないか」

なんか意外だ。千藤先輩が頬を赤らめてそっぽを向いた。

俺がさっき感じた千藤先輩の第一印象は、カッコいい人——だったが、今頬を赤らめて照れている千藤先輩は、凄く可愛かった。

「ほ、ほらっ。持って行け」

照れた千藤先輩から、俺はメモを渡される。

「いいか？ ちゃんと十枚全部持ってくるんだぞ。九枚じゃないかな？ 分かったな！ よし……では行ってこい！」

「頑張ってきてくださいね」

二人の先輩に見送られて俺達は、与えられた任務を遂行する為に部室の外に出た。

「ミッションかぁ、なんだかわくわくするねっ。進くん、それなんて書いてあるの？」

「あ、えっとですね」

お助け部の部室を出てすぐ、葵さんが訊いてきた。俺は千藤先輩から渡されたメモを見せる。

「んーと、『まずは部室棟3階にあるMA部へ行くといい』だって葵さんがメモに書かれていた文を読み上げる。

「3階ってこの下だね？ 早く行ってみようよ」

「あ……」

ふふ、ホント楽しそうだなあ。

「……………」

「……あの」

俺は、楽しそうに駆け出して行った葵さんを目で追っていた女の

子に声をかける。

女の子が俺を見てくる。

「あの時は、おかげで遅刻せずに済みました。本当に、ありがとうございます。学園で会えたら、もう一度ちゃんとお礼を言おうって、ずっと思ってた……」

あの時、入学式の日に俺を助けてくれたもう一人の女の子。

教室移動の時とかに、会えるかな、と探していたりしたのだが、結局見かけることはなかった。

だからやっと会えたこの機会に、どうしても、改めてありがとうと伝えたかった。

「……」

女の子が、ジッと俺を見つめてくる。

……もしかして、俺の事覚えてなかったりするのかな。

まあ、ちよつと道を尋ねられたくらいだろうし、覚えて無くても不思議じゃないか。

でもどうしよう。俺としては、良くも悪くも、この街に来てからの初めての思い出だったんだけどな。

「……あの時、ちゃんと聞いたから……だから、もういい」

忘れられていると思い落ち込みかけていた俺の耳に、女の子の声が届けられた。

……ああ、良かったあ、覚えていてくれたんだ。嬉しさでホッとする。

「いえ、それでも、もう一度言いたかったんです。だから……それに――」

「？」

「あの時は、名前を聞いていませんでしたから。俺、一前 進って言います」

「……《天野 はぴあ》」

「その……よろしくです、天野さん」

「……ん」

天野さん……うん、大事な人の名前だからな、聞けて良かった。ちゃんと伝えられた嬉しさに、気持ち弾む。

「はぴあちゃん、進くん！ 早く行こうよ！」

3階に続く階段の前で葵さんが呼んでいる。

「……行きましょうか」

「……ん」

俺の声に、天野さんはコクンと頷いた。

「ここだねっ」

部室棟3階。MA部とプレートに記された部屋の前で、先に着いた葵さんが足を止める。

俺と天野さんも少し駆け足になって追いつく。

MA部……ここでいったい何をするんだろうか？

「失礼しまーすっ」

「えっ、あ、待って……」

俺が心構えを済ます前に葵さんが扉を開けた。

「へい、らっしゃい！ ご注文は？」

「ふえっ？ あ、あの……」

いきなりの出迎えの言葉に、葵さんが戸惑う。

でも、それも仕方がないと思う。

学園の部活で、部屋に入っただけいきなりお寿司屋さんみたいな事を言われたら、誰だってそうなるだろう。俺だって戸惑っている。俺の隣に居る天野さんも、小首を傾げてきよとした表情で部屋の中を見ていた。

「……あっ、ワイワイ、つい気合い入れ過ぎて癖が出ちゃった」

「はあ……えっと……」

「いやあ、家寿司屋やっててな。さっきも体験入部に来た一年を驚かせてしまったんだが……どうもな……」

そうやって俺達を出迎えてくれた女の人は、紫のヘアバンドを巻いた頭を掻いて苦笑いを浮かべた。

「……で、あんたらも体験入部に来たんだろ？　だったらそこに座って待っててくれ」

その人は俺達の左側——廊下に面した壁際に配置されていた複数のパイプ椅子を指差した。

そこには数人の生徒が座っていた。何かの順番を待っているようだ。

「あっ、違うんです。私たち体験入部に来たんじゃなくて、その……」

「ん？　なんだ、違うのか？」

「はい。その、お助け部の——」

「ん、ああ、なるほどな。千藤から話は聞いている。そういう事なら、こっちに来てくれ」

お助け部と聞いた途端に理解したらしい。

女の人は部屋の中、入口から見て左に三つ、右に二つ用意された、合計五つあるカーテンで仕切られた空間の一つ、左の奥のところへ入って行く。

俺達も女の人に続いてその中に入る。

「じゃまず一人、そこに座って。一人ずつやってくから順番は関係ないよ」

「あ、じゃあ私からでいいかなっ？」

葵さんが訊いてきて、俺と天野さんは頷く。

「えへへっ」

俺と天野さんの了解を得て、葵さんが部屋の中央に設置されていた椅子に座った。

首を動かして周りを見える。

周りはカーテンで囲まれて独立した空間となっている。

正面は壁になっており、その前に、脚のついた持ち運びができる少し大きめの姿見が置いてあった。

葵さんが座った椅子の横には机があり、その上にブラシや筆？

だろうか、俺にはよく分からない物がたくさん置かれていた。

女の人がその中の一つを手取る。

「あの〜？」

「ん？ なんだい？」

「あの、これから何をするんですか？」

俺は、女の人に訊いてみた。

「何って……メイクだけど」

「メイク？」

「そう。だってここは、メイクアップアーティスト部。略して、MA部だからな。あつ、ちなみに部長ね」

自分を指差して、女の方はニツと笑った。

メイクアップアーティスト。なるほど、MAってそういうことだったんだな。俺の頭の中では、マジカルアドベンチャーとかモニュメントアソートメント等、俺の知っているゲーム名が浮かんでいた。

ということは、机の上に置かれているのは全部メイクの道具ってことか、凄いな。メイクの道具ってこんなにあるんだなあ。全く知らなかった。

「えへへっ。私、お化粧ってまだあんまりしたことなくて。楽しんだなあ」

「そうかい？ なら……いっちゃ気合い入れていきますかあ！」
そう言った直後、MA部部長の手がもの凄いスピードで動かされた。

何だこのスピードは！ 通常の二倍、いや三倍か？ 何をしているかさっぱり判らない。……や、普通がどのぐらいのスピードか知らないけど……。でも、これは明らかに速過ぎるだろうっ！

「はいよっ、いっちゃ上がり！」

MA部部長の手が止まる。クロスさせた両手には筆のような道具が握られていた。

「どうだい？ ちょっと鏡を見てみてよ。気に入ったかな？」

いつの間にか目を閉じていた葵さんが目を開けて、目の前にある姿見で自分の姿を確認する。

「わぁ、これ私？　すごい、すごい！」

「ふふっ、気に入ってもらえたようで嬉しいよ。今回は薄めにしてみたけど、あんた素材が良いからな、その方がいいだろうと思って。こうして、ちょっとするだけでも違うだろ？」

「はいっ、びつくりしました。わぁ、ありがとうございますっ！」

葵さんのお札を受け取ると、MA部部长はいったん筆のような道具を机の上に戻す。

「わぁ、えへへっ」

姿見に映って喜んでいる葵さんは、メイクをする前の葵さんと比べて、より明るく、素敵に見えた。

「じゃ、次どうぞ」

MA部部长に促される。

「あ、えっと……」

俺が天野さんに、お先にどうぞ、と手の平で椅子を示すと、天野さんは小さく頷いて椅子に座る。

「初めて……」

小さく握った両手を膝の上にのせて座っている天野さんは、表情は変えないが、なんだかわくわくしているみたいと思う。

「じゃ、始めるよ」

道具を手にしたMA部部长の手が、再び凄いスピードで動かされる。

目を凝らして手の動きを追おうとしたが、やっぱり早過ぎてよく判らなかった。

「はいよっ、もういっちゃ上がりっど。どうだい、気に入ったかい？」

姿見を見た天野さんが、MA部部长にコクコクと首を縦に動かして、気に入ったという事を伝えた。

「そうかい、良かった。あんたには、その大きな瞳をより可愛らしく魅せるようにしてみた」

確かに。目の悪い俺がそんなに近くで見なくてもはつきりと分かる程に、天野さんの瞳が吸い込まれそうになるくらいにその魅力を増していた。

……凄いな。これがメイクの力。

俺はMA部部长を見る。

その凄さを見せてくれたこの人、まさにアーティストと呼ぶに相応しい人だと思う。

「んじゃ、最後はあんただな」

「え、あ、俺はいいです。男ですし……」

凄いと感心はしたものの、やっぱり男が着飾るというのには抵抗があるからな。俺は首と手を横に振って断る。

「何言ってる。男だろうが女だろうが、メイクとは人を磨くためのものだ。綺麗になるのに性別は関係ない！ つべこべ言わずにそこに座れ」

「あっ……」

MA部部长に肩を掴まれ、俺は有無を言う間もなく椅子に座らされる。

「あ、あの、俺ホントに……」

「いいからっ、任せておけて。すぐ終わるからさ、そのままジツとしてな」

そう言って、MA部部长はスプレーを俺の髪全体に吹きかける。冷たい。

「あっ、あのっ……」

「いいからっ！」

……うう、怒られてしまった……。

髪を持ち上げ裏側もスプレーでしっかりと濡らした後、タオルを使って頭を拭いてくれる。髪を乾かしたら今度は手に何かクリームみたいなものをつけて、MA部部长は座らせた俺の後ろに回って、その手を俺の目の前に持ってくる。

「っ」

手が目の前に迫ってきて、俺は反射的にギュッと目を瞑った。

前髪が持ち上げられる感触がした。同時に、冷たい感触も。そしてそれは、そのまま頭を撫でるように後ろへ。さらに流れるように横へ。頭全体に広がっていく。

さっきのクリームみたいなのを塗っているのか？ 頭を洗っているわけじゃなさそうだけど……？

「よし、まずは後ろから」

MA部部長の手――指が、櫛のように俺の後ろ髪を梳いているのが判る。

何度かそれを繰り返した後、指が離される。続いて、そのまま後ろ髪を優しく指で啄ばまれるような感覚。それが終わると、次は頭のとっぺん、耳辺りの髪を右左、と同じように指で啄ばまれるような感覚がした。

「最後に仕上げのスプレーっと……よしっ、終わりだ。もう目を開けてもいいぞ」

指が離れたと思ったら、MA部部長の声がした。

俺はゆっくりと目を開けて、恐る恐る姿見を見てみる。

「……っ！」

俺は姿見に映る自分を見て、そのあまりの恥ずかしさに背中を丸め、顔を腕で覆い隠す。

「あんたの、結構癖のある髪の毛みたいだったからね。一度全体にワックスを塗ってから、前と後ろを立たせて、横を少しだけ弄ってみただけど……気に入らなかったか？」

「う、いえ。そんなことは、ない、です……」

そう。別に気に入らないとかじゃない。せっかくしてくれたんだから、そんなことは思わない。ただ――

少しだけ腕から顔を出して、もう一度姿見を覗く。

そこにいる俺は、いつもの目にかかるほど長い前髪が上げられ、広い額と細い眼が露わになっていた。さっきまで髪の毛全体が平べったく寝ていたのに、今は頑張って起きようとしているみたいに立

っている。

今までこんな風にしたことないから、そこにいる俺が、まるで俺じゃないみたいに思えて、こんなオシャレな自分が恥ずかしくて、ただ、なんとなく受け入れられずにいる。

「わぁ、進くん、その髪型似合ってるよ！」

姿見に映る葵さんが俺を見て言ってくれた。恥ずかしい……。

「だろう！ 前髪で目がちょっと隠れてたからさ、思い切って上げてみたんだけど、それだけでもさっきまでと大分印象が違うだろ？」

MA部部長は自分のメイクが褒められて、嬉しそうに言う。

確かに、俺も高校生になったんだし、オシャレの一つもした方がいいのかな、とは思った事があるにはある。でも、外見だけ変わっても中身が変わらなければ意味は無いと思うし、自分でしてみようとは思えなかった。せっかくしてくれただけど、やっぱり俺はさっきまでの地味な俺が良いと思う……ってか、ワックスって床を磨いたりする物じゃないのか？ 頭に塗っても大丈夫なんだろうか？ それとも、それとはまた別の物なのかな、感触が違ったし。

とはいえ、元に戻してくれ、なんて言うつもりはなかった。ちょっとだけ……嬉しいかもだし。

「その、俺、オシャレって今まで興味なかったんですが、こうしてみただけで違うものなんです。ありがとうございます」

「いや、そう思ってくれただけで、MA部部長としては嬉しい限りだよ」

椅子から立ち上がって頭を下げた俺に、MA部部長は笑ってそう言った。

「さてと、はいこれ」

机の上に道具とは別に除けてあった封筒を取り、それをMA部部長は葵さんに渡す。

「千藤から、終わったら渡してくれって言われてたんだ。確かに渡したからな」

皆で封筒を見る。

確かこの封筒の中に次のミッションが書かれたメモが入っているんだよな。でも――

「あの、これって悩みや頼まれ事をきいた後に貰えって言われたんですけど、俺達まだ何も……?」

「うん? それならもうしてもらったよ。『アタシにメイクをさせる事』、これが頼みだ。だから、受け取れ」

そうか、そういう事なら。

「やったね、はぴちゃん、進くん! これで一つ目クリアだねっ」
葵さんが封筒を曲げないように天野さんの手を握って喜びを分かち合っている。

「はは、まあ、なんだ。千藤のやつ、この日の為に色々してたみたいだからさ、あいつの為にも楽しんでやってくれ」

「はい、そのつもりですっ!」

元氣よく葵さんが答える。

「! ……そうか、わざわざ言うまでもなかったか。ふふ……あいつには世話になったからな、ちょっと気にしてたんだ。でも、そうしてくれると千藤のやつも甲斐があったというわけだ」

大切な友達を想うような表情でMA部部长は微笑んだ。

その顔を見て俺は、そんな風に想える人がいる事を、羨ましく思った。

「よーし、それじゃあさっそく次に行ってみよー! 部長さん、ありがとうございました!」

「あ……!」

天野さんの手を引っ張って、葵さんは駆け足でこの空間から出て行く。

「え、あ……」

「はは、置いてかれたねっ」

「う……あの、部長さん。メイク、ありがとうございました。あの、それでは失礼します」

「ああ、気が向いたらまた来なよ。その時は、もっと色々してやる

からさ」

「はい！　ありがとうございます」

MA部部長に一礼してから、俺は葵さん達を追いかけた。

MA部の部室を出ると、葵さんと天野さんが俺を待っていてくれた。

「じゃあ、開けるね？」

俺が来た事を確認すると、葵さんがMA部部長に貰ったばかりの封筒を開けた。

「じゃーん、それでは次のミッションを発表したいと思いまーす！
えーと、次は『TVゲーム愛好会へ行け』、だそうです！」

葵さん、ノリノリだな。

「部室がある場所は、部室棟2階だって。下の階だね、行こう！」

「はい」

「……ん」

次の目的地、TVゲーム愛好会の部室を探す為、俺達は階段を下りて行く。

「やったね進くん、二つ目クリアだよっ」

今しがたTVゲーム愛好会の人達から貰った封筒を手に、葵さんが言った。

「はい。でも、すみません。なんか俺一人で楽しんじゃって……」

「そんなことないよ。やり方とかはよく解んなかったけど……でも、見るだけでもおもしろかったよ。進くん、TVゲーム上手なんだねっ」

「いや、そんな……あれはまぐれというか、たまたま上手くいっただけで……時間切れが無ければ危なかったです」

最後の、あと3秒もあつたら逆転されていただろうな。ホント、ギリギリだった……。

もし今の勝負に負けていたら、どうなっていたんだろうか？　勝

つたらって言うていたし、もしかしたら勝てるまでずっと……？
そう考えると、勝てて良かったなあ、と心から思う。

「次は『メイドクラブへ行って、少しお休みです』って書いてあるよ」

俺が静かに安堵の溜め息を吐いている間に葵さんが封筒の封を切り、中に入っていたメモを取り出して次のミッションを読み上げた。
メイド？　メイドって、あのお金持ちの人の家に居たりしてお手伝いなんかをしてるイメージの、あのメイドさんの事だろうか？
……ちよつと気になるかも。

「メイドって、お手伝いさんのメイドさんかなあ？　私メイドさんって見た事無いから楽しみだなあ」

俺もです、葵さん。まあ、普通に暮らしていると大抵の人は見た事が無いんじゃないだろうか。普段、学園以外では買い物か気が向いた時くらいにしか外に出ないからな、よく分からないけど……。

「……ある……」

「え？」

「見た事……ある」

「そうなの？　はぴあちゃん、メイドさん見た事あるの？」
力強く頷く天野さん。

凄い、こんな近くにメイドさんを見た事ある人がいるなんて……。あっさりと俺の狭い常識が覆されてしまった。

「どこでどこでっ？」

「……昨日、帰る時に玄関で、『ご主人様、メイドクラブはどうですか？』……って言うてた」

「本当、はぴあちゃん。凄いよ、それ！　この学園、本当にメイドさんがいるんだね！」

瞳を輝かせて好奇心を表す葵さん。

昨日？　まったく気がつかなかった。でも、玄関に居たんなら気づくはずだよ……帰りに葵さんに「ダメだよ、診てもらうだけ診てもらおう」って言われて、保健室に寄って行ったからか？　葵さ

んも気づいてなかったみたいだし。

「よし、じゃあ早く行こっ。えーっと、場所は……」

「……この下……って言ってた……はず」

場所を調べようとした葵さんに、天野さんが答える。

「この下ってことは……部屋棟1階だねっ。よし、行こう」

葵さんを先頭に三人で階段を下りる、と廊下に行列ができていた。
なんだ、これ？　なんでこんなに人が並んでるんだ？

ざっと見て二十人くらい？　の1年生らしき男子生徒達が行列を作っていた。

「わぁ、なんかみんな並んでるね。人気がある部活なのかな？」

「……たぶん、ここ」

天野さんが列の先、どこから繋がっているのかを指で示す。

列を辿って天野さんの指先を見ると、そこにはメイドさんが居た。

「あっ、メイドさんだ。本当にメイドさんがいるよ！　私ちよっとお話ししてくるね！」

メイドさんを見た喜びで、葵さんは駆けだして行く。

なんか、遊園地でマスコットに風船を貰いに行く子供みたいだな、
と思ったのは俺だけの内緒だ。

葵さんとメイドさんが話し始めた。するとメイドさんがこちらを
向いて微笑んだ。葵さんが戻ってくる。

「あのね、あのねっ。今メイドさんが私の事、お嬢様って呼んだんだよ！　もう、びっくりしたよ」

戻ってきた葵さんは興奮した様子で、今のメイドさんとのやり取りを俺と天野さんに説明する。

「それでね、お助け部の体験入部でって言ったら、『はい、お待ちしておりましたよ。あちらの方々もですね？　それでは、特別席に御案内致しますので、どうぞお入り下さい』だって。だから行こっ」

メイドさんの真似をした葵さんが天野さんの手を引いて、部屋の入り口で微笑みながら俺達を待っていてくれるメイドさんの所へ向かう。

「ほくら、進くん早くっ」

「あ、はい」

「では、御案内しますね。こちらです」

メイドさんが部屋の中へ俺達を案内してくれる。

「ちよっと！ 次はアッチらの番ですよ？ ちゃんと順番は守ってもらわないと」

メイドさんに案内され、部屋に入ろうとした俺達に、先に並んでいた二人組が当然の如く不満の声を投げかけてきた。

「あ、えっと……」

二人組に答えようとする俺の前にさり気なく移動したメイドさんが言う。

「申し訳御座いません。この方々には、オーナーから『お見えになったら、すぐにお通しするように』と、特別な許可が出ておられますので……」

「特別って……そんなのヒイキなんじゃ」

「……申し訳御座いません。……その代わりと言ってはなんですが……これを」

そう言って、メイドさんがポッケから取り出したのは、小さな飴玉だった。

「それは、幸せの飴玉です。私はいつも授業の合間にその飴玉を舐めています。すると不思議な事に、授業中に先生にあてられる事が無くなったではありませんか！ もちろんそれだけではありません。その他にも探し物が見つかったり、気になっていた人と偶然ぶつかったりします。さらに、その翌日その人に告白なんかもされちゃったり……はさすがにしなかったですけど……ですけど、幸せになれる事間違いないなんですよ！ ちなみに、オーナーのお気に入りでもあります」

「「はあ……？」」

メイドさんお気に入りの飴玉を、鳩が豆鉄砲を食らったような顔で受け取る二人組。

「さ、どうぞお入り下さいませ」

「えっと……」

二人組に見えないようにウインクしてみせるメイドさんに、いいんだろうか？　と思ったが、結局俺は二人組に頭を下げて、先に部屋に入らせてもらうことにした。

「やあ、いらっしゃい。僕はこのメイドクラブのオーナー、^{すらば}守等羽アガサ。君達がお助け部の体験入部で来た子達だね？　凜と水鳥から聞いて来てくれるのを待ち詫びていたよ」

メイドさんに促されて特別席というのに案内してもらった俺達の所に――美人と言っても過言ではないだろう――綺麗な人がやってきて、自己紹介と共に素敵な笑顔で俺達を迎えてくれた。

最初は執事さんみたいな服を着ていたから男の人かと思ったが、よく見ると女の人みたいだ。その……膨らんでるし。こういう人を中性的というのだろうか。よくあるゲームのキャラみたいにファンクラブとかあったりしそうだな……なんて、本当にあったら見てみたいかも。

「では、まずはこれを……」

ずっとテーブルの上に一枚の封筒が置かれる。

「これって……？」

「うん。凜と水鳥から預かった、君達への贈り物さ。……この封筒からは、二人の想いが籠められているのを感じたよ。君達には、二人の想いに応えてやってほしい。それが僕からのお願いだよ。……どうかな？　僕のお願い、聞いてくれるかな？」

とても優しい顔で優しく言葉を紡ぐ守等羽さん。

「はい！　もちろんです！」

葵さんがはっきりと答える。

俺と天野さんも葵さんと同じ気持ちだと、守等羽さんを見てしっかりと頷く。

「ありがとう、君達が優しそうな子達で良かった……！　では、ゆつくりとしていってくれ。何かあればそのベルを鳴らしてくれれ

ば、すぐに駆けつけるからね。遠慮無く呼んでくれ。それでは、君達に憩いの一時を……」

守等羽さんが俺達に向かって一礼して、自分の仕事に戻って行く。「お待たせ致しました。こちらは、オーナーからのサービスです。どうぞ、お召し上がりください」

入れ替わりに、いつの間にか居なくなっていたメイドさんが、カップに入った飲み物と苺のショートケーキを運んできてくれた。それを、葵さん、天野さん、俺、それぞれの前に手慣れた手つきで置いてくれる。

「あ、ありがとうございます！ わぁ、美味しそう。さっそく頂いてもいいですか？」

「ええ、もちろん。飲み物はお熱いですので、火傷しないようお気を付けてくださいね」

メイドさんの注意を聞いて、ゆっくりとカップを口に運ぶ葵さん。「美味しい……！ これ、すごく美味しいです！」

一口飲んだ葵さんが、驚いたように感想を口にした。

「ふふ、喜んで頂けたようで何よりです。それは当店自慢の『メイドさん印のミルクティー』で御座います。そしてそちらのケーキは、『甘い物はお好きですか、御主人様？ はい、あーんしてください。by いちごケーキ？』となっております。どちらもオーナー自ら作られた、真心の籠った人気メニューなんですよ」

そう説明してくれたメイドさんの品名を言う時の口調と声色の豹変ぶりに驚いて、俺はメイドさんを見上げる。

「どうかされましたか？」

「あ、いえ……えと、本当にいいんですか？ こんな美味しそうな物を頂いて……」

「はい。どうか遠慮なさらずにお召し上がりになってください」
やんわりと微笑むメイドさん。

「あ、その、ありがとうございます。あの、では頂きます」

俺はケーキと一緒にセットされたフォークを手にとって、上に乗

っている苺を——と、そこで一つの視線に気がついた。

「……………」

天野さんがこちらをジッと見ていた。正確には、俺の手にしたフォークに刺さっている苺を見ていた。

「……………」

「……あの、もしよかったら、どうぞ」

「……いいの？」

「はい」

苺付きのフォークを、持つところを天野さんの方に向けて、差し出す。

「……ありがとう」

「いえ」

天野さんの小さな手がフォークを掴む。俺の手と一緒に。

「えっ、あの……」

フォークを掴んだ天野さんは、そのまま俺の手と一緒に自分の方へクイツと引き寄せ、小さな口を小さく開けて、苺をパクリ。

「……ん、おいしい」

苺をしっかりと味わった天野さんは、手を離す。

天野さんに引っ張られた為僅かに椅子から腰を浮かせた俺は、天野さんの予想外の行動にそのままの姿勢で固まっていた。天野さんに差し出したつもりフォークは俺の手に握られている。

「あらまあ」

「あゝいいなあ、はぴあちゃん。私もイチゴ欲しいなあ」

メイドさんの驚いているような笑っているようなそんな声と、葵さんの羨ましそうな声がした。

天野さんは少し考えるような素振りを見せた後、自分のフォークで自分に配られたケーキの苺を取り、葵さんに差し出した。

「え？ いいよお、今のは冗談だから。それは、はぴあちゃんの分」
葵さんが言うと、ふるふると首を横に振る天野さん。

「……いいの、はぴあちゃん？」

「ん」

「ありがとうっ！ はぴあちゃん、だ〜いすき！」
椅子から立ち、葵さんが天野さんに抱きついた。

「っ、葵……！」

「えへへ」

「うふふ、仲がよろしいんですね」

そんな二人の様子を見て、メイドさんが未だ空気椅子状態の俺に訊いてきた。

「え？ あ、はい。……そうですね。とても、羨ましいです」

仲の好い二人を見つめ、俺は思う。俺にもこんな風に笑える友達が欲しい、と。

「……貴方も、ですよ」

「俺も？」

「はい。少なくとも、私にはそう見えますよ」

ニッコリと俺に微笑みかけるメイドさん。

そうだろうか？ もしそうなら、凄く嬉しいな……！

「あ〜ん。あむ……ん〜、このイチゴ、甘くて美味しいね、はぴあちゃん」

天野さんから貰った苺を頬張った葵さんが、幸せそうに笑っている。

「くすっ」

メイドさんに励まされたからか、笑っている葵さんを見たら、自然と口元が綻んできた。

「？ どうしたの進くん？ もしかして、私の顔にクリーム付いたりする？」

「ああ、いえ、そうじゃなくて……葵さん、凄く美味しそうに食べるなあって思っ」

「うん！ だってこのイチゴ、凄く美味しいんだもん！」

そう、無邪気に満面の笑顔で言う葵さんは……凄く可愛かった。

「はい、進くんの分」

葵さんが残っている自分の分の苺をフォークに乗せて、俺に差し出してくる。

「え？ あ、いや、俺はいいですよ、そんな。ほら、ケーキにも苺が入っていますし。それに、その……そんなに美味しそうに食べる葵さんを見てたら、きつと苺も葵さんに食べてもらった方が嬉しいと思いますし……」

「だからだよ。このイチゴ、本当に美味しいから。だから進くんにも食べてほしいな。それに……進くんからはぴあちゃん、はぴあちゃんから私、私から進くん——ほら、こうすればみんなで一個ずつだよ」

その純粋な言葉に、俺の心は引き出される。

——本当に不思議だな、葵さんは。葵さんと居ると、自分を取り戻せた気がしてくる。

「……ふふ、そうですね。それじゃ、俺も頂きますね」

「うんうん。やっぱり美味しいものはみんなで食べた方がいいよね。それじゃあ……はい、進くん、あくん」

「ぶっ！」

思わず吹き出してしまった。

「なな、何言ってるんですか、葵さん！ あ、あくんって……そんな恥ずかしい事、できるわけじゃないですか！」

「え、でも進くん、さっきはぴあちゃんにしてたよね？」

「いや、あれは……」

天野さんを見る。

「？」

天野さんは小首を傾げて、俺と葵さんのやり取りを静かに見ている。

「いや、あの、さっきのはそんなつもりじゃなくて」

「はぴあちゃん、恥ずかしかった？」

「……おいしかった」

葵さんに訊かれた天野さんは、首を小さく振って、微妙にずれて

いる答えを返してくれた。

「ほら。だから、はい。あーんして、進くん」

「っっっ！」

そんなの、できるわけ……だいたい、周りに人だっているし。ってか、なんだか見られている気がする。

この特別席というのは部屋の中心に用意されていた。その周りを適度な距離を保って、それぞれが快適に過ごせるようにと気を配られた配置で、他のテーブルが置かれている。

つまり、この席は他のどの席からもよく見える——どうしても視界に入ってしまう場所という事になる。

さらによくよく考えてみれば、この部屋でメイドクラブの人達以外の女生徒が居る場所でもある事に、今気がついた。痛いぐらいの視線が俺に向けられている事にも……。

「あれ、1―Cの貴峰さんだよな？ 一緒に居る奴、誰だ？」

「さあ？ でも、もしアイツがあの子を食べたら……！」

「ああ……！」

「絶対に、許さねえ……！」

まだ入学して間もないのに、葵さん有名なんだなあ……とか、のんきな事を思っていたらどうなるんだろう、とか思っていたら、胃が痛くなってきた。

「くすっ。どうなさるんですか？ 彼女に食べさせてもらって、天国と地獄の両方を味わうのか。それとも、彼女の申し出を断ってこのピンチを乗り切るのか。ふふ、見物ですね」

テーブルを見つめていた俺に、メイドさんが耳元で囁いてきた。

……このメイドさん、意外とこういう状況が好きらしい。これは絶対、お祭りを楽しんでいる人の目だ。

……はあ、仕方ないか。俺はまだ湯気が出ているカップを掴んで、口に持っていく。

「熱っ！」

「だ、大丈夫、進くん？」

苺が乗ったフォークをお皿に置いて、葵さんが心配してくれる。

「え、ええ。大丈夫です。すみません。その、実は俺、凄いい猫舌なんです」

「そうなの？」

「はい。熱いものは熱いうちに食べるのが一番美味しい。そう分かってはいるのですが……ラーメンやカレーなんかも、いつも冷めてからしか食べられないんです」

「そうなんだ……進くんかわいそう……」

普通の人なら、今俺が飲んだくらいの温度なんて何とも無いんだろうけど。でも俺の場合、最低でも後10分くらいは冷めるのを待たないと、とてもじゃないが口にする事なんてできない。実際、まだ一口——も飲んでないな。まだ半口しか飲んでないのに、もう俺の舌はヒリヒリしてしまっている。

「だから、すみません。苺美味しそうなんですけど、多分今食べても味が判らないと思うんです。でもそれだと、せっかく頂いたケーキが勿体無いので、俺の代わりに葵さんと天野さんで食べてもらえませんか？」

ヒリヒリした舌でうまく話せたかは分からないが、そう言ったつもりで、二人にケーキが乗ったお皿を差し出す。

「でも……」

「いいですから。オーナーさんには悪いですけど……残してしまうのはもっと悪いですし……」

「……うん、分かったよ。それじゃあ、進くんのケーキ、もらうね？ はぴあちゃん、半分こしよっ」

遠慮しながらも受け取ってくれた葵さんは、ケーキが均等になるように苦戦しながら、フォークを使って半分に切り分けていく。

「ふふ、御見事です。良い演技でした」

コトツとテーブルの上に水の入った透明なコップを置いて、囁いてくるメイドさん。

またいつの間に……。

「演技じゃないですよ。本当に猫舌なんです、俺。今まで、伸びたラーメンしか食べた事ないですから……」

「そう、ですか……それは失礼しました。どうぞ、ミネラルウォーターです。飲んでください」

そう言いながらも、こうしてすぐに対応してくれたって事は、メイドさんも本気で演技だとは思っていなかったという事だろう。

「はは、ありがとうございます」

メイドさんが持ってきてくれた水で火傷した舌を癒す。しっかりと冷えているおかげで、この分だとすぐに火傷は治まりそうだ。メイドさんの気遣いに感謝です。

「はぴあちゃん、あ〜ん……どう、美味しい？」

「……おいしい」

……ふふっ。まあとりあえずは少しの間、こうして仲の好い二人の様子を眺めながら舌と一緒に癒される事にしようかな。

「もう行くのかい？」

「はい。お茶とケーキ、美味しかったです。その上、お土産まで貰っちゃって……ありがとうございます」

「ふふ、いいよ、お礼なんて。君達の素敵な笑顔を見られただけで、僕は幸せな気持ちになれたからね。こちらこそ、君達にお礼を言わせてもらうよ。ありがとう。凜と水鳥にも、また何かあったら何時でも力になるよ、と伝えておいてほしい。それじゃ、君達がまた来てくれるのを、最高のおもてなしを用意して待っているよ」

お茶とケーキをご馳走になった俺達は、ベルを鳴らして守等羽さんとメイドさんに感謝の言葉を伝え、二人に見送ってもらって部屋を出た。

「美味しかったね〜」

葵さんの言葉に天野さんが頷く。

メイドクラブの部屋を出て、部室棟を出た俺達は玄関で靴を変え、

次に向かったのはグラウンドだった。

『さて、メイドさんに癒されたところで次は運動だ。いざ、女子ソフトボール部へ』

メイドクラブで守等羽さんに貰った封筒には、こう書かれていた。グラウンドでは野球部やサッカー部が、他の部と同じように体験入部を行っていた。楽しそうにボールを追いかけている姿は、見ていて羨ましかった。

「あ、あれかな？」

その一角、お揃いの空色のユニフォームを着て、体験入部に來たらしい体操服を着た一年生達とキャッチボールをしているソフトボール部らしき人達を、葵さんが発見した。

俺は葵さんの視線を辿って見てみたが、この距離からだとも男子か女子か、俺には判別が難しい。

俺達は近づいて、その中からキャプテンらしき人を探す。

「あのっ、ここ、女子ソフトボール部ですよね？」

キャプテンらしき人に葵さんが尋ねる。

「ん？ ああ、そうだけど……一年生か？ もう体験入部は始まっているぜ。ほら、そこにクラブがあるから——」

「あ、えっと、違うんです。私たち、お助け部の——」

「何だと！」

お助け部と聞いた瞬間、キャプテンらしき人の目つきが変わった。

「え？ あの……？」

「フッフ、そうか……ならば、このアタシと勝負しろお！」

「ふえ？」

「へ？ あ、あの……？」

「……？」

いきなりそう宣言されたので、葵さん、俺、天野さんの三人は、それぞれの表現で驚きを表してみせた。

「バットならあそこだ。さあ、早く準備しろ」

「え、いや、あの？」

「つべこべ言うな！ 男だろ！」

キャプテンらしき人は挑戦的な瞳で俺達を見ている。

いや、俺はそうかもしれないが……。

「挑戦者が来た！ 景、準備してくれ！」

その声に、ユニフォームを着て一年生とキャッチボールをしていた一人の女の人が、「ちよつとごめんね」と相手の女の子に断つて、なにやら準備を始める。

俺達は何がなんだか解らずに、ただ、三人で顔を見合わせていた。そうこうしているうちに、「なんだかおもしろそうだな」と自分の体験入部を中断させてやってきた人達の注目を集める中、俺達はなんだかよく解らないまま『勝負』とやらをする事になった。

「はい、これ使って」

キャッチャー用のマスクとプロテクターを着けた景と呼ばれた女の人に金属製のバットを渡された俺は、白線で引かれた四角いバッターボックスに立つことになった。

「あの〜？ 勝負って、もしかして……」

「アタシの球……打てるものなら、打ってみろっ！」

いいーっ！ やっぱりそういう展開なのですかぁー！

マウンドに立ったキャプテンらしき人が遠心力を利用し弧を描いた腕をしならせ、その指先で放たれたボールが回転しながら、空気を切り裂いて迫ってきた。

「くっ」

俺は急いでバットを構えて、ボール目掛けて振り抜く。

ズバン！

キャッチャーが構えたミットに、ボールが吸い込まれる重たい音が響いた。

速っ！

小学生の頃、何度も友達で集まって皆で野球をした事がある。ソフトボールは野球に比べてホームベースからマウンドまでの距離が短いという事も知っていたけど、それでも今の球は俺が体験してき

たどのボールとも違っていた。投げ方が違うとか小学生の頃の話でしょ、とかじゃなくて、なんか手元で伸びてくるというか、まったく打てる気がしなかった。

キャッチャーから返されたボールを受け取ったキャプテンらしき人が、俺を見て「どうだっ!」と自信の笑みを浮かべている。

俺は、バットを構える。

「へっ、いくぜ」

笑みを浮かべたまま、ピッチャーが投球モーションに入った。体をめいいっぱい使って、体重の乗ったボールが投げられる。

俺は向かってきたボールにバットを振る。

「っ……!」

しかし、聞こえてきたのは、空を切る音だけだった。

「へへ、あと一球!」

キャッチャーからボールを受け取って、俺から三つ目のストライクを奪おうと、マウンドの土に右足を踏み出して構え始めるピッチャー。俺はバットを持つ手に僅かな力を込める。

マウンドを踏み鳴らしてピッチャーがボールを放つ。ボールの白い軌跡が目映る。

これは……高い、か? いやでもやっぱり……いいや、もう振ってみよう!

前二つのストライクから、ボールが描く軌跡をイメージして思い切ってバットを振る。瞬間、手元に迫る白い軌跡が速度を上げた。

バットの先にボールの感触。その感触がバットを伝って俺の両腕を震わす。

「ふっ……!」

踏み込んだ足に体重を移動させる。体重を乗せた勢いで腰を回転させ、その回転を利用して腕ごと体を捻らせる。

「なっ?」

ガン!

左斜め後方、暗くなっても練習できるようにとグラウンドを照ら

す役割が与えられている証明——その3メートル程下の柱部分に、俺の振り抜いたバットが跳ね返したボールが、弾丸となって激突した。

「……おいおい。なんであんなところにボールが飛んで行くんだよ……冗談だろ……？」

キャプテンらしき人が飛んでいったボールの行方を見つめて、果然と呟いた。

？ 何をそんなに驚いているんだ？ ただのファールだと思うけど……何かおかしかったか？

「……くっ、まあいい！ 次で最後だ！」

俺が疑問に思っているうちに、ピッチャーが投球モーションに入った。

ピッチャーからボールが投げられる。俺はボールを目で追いかけ、バットを振る。

空気が流れる音と、少し遅れてミットに納まるボールの音が、後ろから聞こえてきた。

マウンドでキャプテンらしき人がどこか釈然としない表情で、三個目のストライクを取られてバッターボックスを出て行く俺を睨みつけていた。

「えっと……すみません。その、打てませんでした」

アウトになった俺は、近くで観ていた葵さんと天野さんの所に近づいて、声をかけた。

「しょうがないよ。相手のボール速かったもん」

葵さんが慰めてくれる。

「じゃあ、次は……どうしよっか？ はぴあちゃん、やってみる？」

「……ん」
俺が右手で持っているバットを見つめていた天野さんが、葵さんに頷く。

俺は持っているバットを天野さんに手渡す。

しかし、バットが予想していたよりも重かったのか、バットを受

け取った天野さんの手が震える。

「あ……重くない、ですか？」

「……大丈夫」

自分の身長の上半分以上もあるバットを、両手で抱えるようにバスターボックスに運ぶ天野さん。心配だ。

「あの、やっぱり止めた方が……」

「大丈夫」

きっぱりと言い切って、天野さんは打席に立つ。

「あ、葵さんっ」

「うん。大丈夫だよ、進くん。私と同じで、ああ見えてはぴあちゃん、意外と頑固なところがあるから」

「いや、あの、そうじゃなくてですね……」

バスターボックスに立った天野さんが、重たそうにバットを構える。

「ああ……」

「ふふっ。進くん、なんだかはぴあちゃんのお父さんみたい」

「お父さんっ？ な、何言ってるんですかつ、もうっ！」

バットの重みで震えている天野さんを見てあたふたする俺を、葵さんが笑う。

「……おい、本当に大丈夫なのか？」

打席に立った天野さんを見て心配になったのだろう。マウンドでキャプテンらしき人が天野さんに訊ねる。

天野さんはバットを構えたまま、頷いた。

「つたく……怪我しても知らないぜ？」

ピッチャーが一球目を投げた。キャッチャーがボールを受け取る。天野さんはボールの速さに、目を大きくして驚いているようだ。た。

キャッチャーがピッチャーにボールを投げ渡す。

それをピッチャーが受け取って、投げる動作に移る。

ピッチャーが発射したボールがキャッチャーミットに到着する。

間をおいて、天野さんのバットがゆっくりと振られる。ボールが辿ってきた道をバットが線を引いた。

天野さん……。

天野さんがバットを構え直して、ピッチャーを見つめる。その懸命な姿勢は「さあ、こい！」と言っているようにも見えた。

「頑張ってー！」

「もう少し早めに振るといいよー」

天野さんを見て何か感じたものがあつたのだろう。周りに集まつた人達から、天野さんに温かな声援が送られる。

「はぴあちゃん。思いつきり、だよっ！」

葵さんも天野さんにエールを送る。

皆の声に、天野さんは力強く頷いてみせた。

「……行くぜ」

ピッチャーが投球モーションに入る。

「んなっ！」

腕を回転させ、指先からボールが離れる直前、突然ピッチャーの体勢が崩れた。

何だ急に？ 足でも滑つたんだろうか？ そんな風には見えなかったけど。

ピッチャーから天野さんに視線を移す。

「あ……！」

天野さんはバットを振っていた。まだボールが投げられてもいないのに、だ。

そう、ウサギとカメラで言うならば、カメ。天野さんのバットはカメの歩みの如く速さで振られていた。

「くっ、しまった……！」

天野さんの予想外の行動に気を取られた所為でタイミングを崩されたピッチャーの指先から、力の抜けたボールが飛び出す。

天野さんが振ったバットは、ヒッティングよりはバントに近かった。そのバットの歩みに合わせるように、ボールが弧を描いて飛ん

できた。

キン。金属を叩いたかのような甲高い音がグラウンドに響く。バットに当たったボールが空に舞い上がった。

「オーライ」

キャッチャーがマスクを取って立ち上がり、ホームベースの後ろに上がったボールの落下地点に移動する。

それから両手を挙げて、ゆっくりとミットを構え、ゆるやかに落ちてくるボールをキャッチャーミットに納めた。

ピッチャーが、打ち取った天野さんをどこか納得しない様子で見つめていたが、それとは別に、ホッとしたようでもあった。

葵さんと近くで天野さんを見守っていた俺も、マウンドのピッチャーと同じように胸を撫で下ろす。怪我しなくて良かったあ……。

天野さんはボールが納まったキャッチャーミットを見つめていたが、おそらくルールを知らないのだろう——やがて、再びバットを構え出した。

「あ、はぴあちゃん！ こっちだよー！」

葵さんが呼び掛けると、天野さんが名残惜しそうにピッチャーとキャッチャーを交互に見つめた後、バットを抱えてゆっくりとこちらに戻ってくる。

「惜しかったね、はぴあちゃん。でも、バットに当てるなんて凄かったよ！」

「……………」

天野さんは照れた様子で葵さんから視線を逸らした。その視線と目が合う。

「あ。えと……怪我、しなくて良かったです」

俺も「凄かったです」と言いたかったけど、葵さんに先に言われてしまったので、少し迷った末にその言葉が出てきた。

「ふふっ。進くんね、はぴあちゃんの事心配してたんだよ。怪我しないかな、ボールが当たったらどうしよう、って。我が子を見守るお父さん、って感じだったんだよ」

「ちよっ……！ 葵さん！」

「あはは、進くん照れてる」

「っっっ！」

顔が、灯りに近づき過ぎたみたいに熱くなる。

そんな俺を見て天野さんは、

「……大丈夫って言ったから」

ほんの少しだけ微笑んで、そう言った。

「っ」

俺は照れ隠しに何もない後ろを勢いよく振り返って、右の人差し指で頬を掻く。

「ふふ。よし、次は私の番だねっ！ 頑張ってくるから、二人共見ててね」

葵さんは天野さんからバットをもらって、バッターボックスに駆けて行く。

「お前で最後だな。言っとくが、手加減はしないぜ？」

「はい。お願いします」

バッターボックスに立った葵さんに確認の声をかけたピッチャーは、後ろ手にボールを持って構え出す。第一球目が投げられた。

「……！」

キャッチャーミットがボールを包む。

葵さんはバットを振らなかった。だけどその代わりに、ボールをジッと観察するように見送ったみたいに思えた。

「へっ、ボールを見極めようだったって無駄だぜ」

キャッチャーからボールを投げ渡されたピッチャーが、足で土を均しながら言う。

「アタシの球は、そう簡単には……打てないぜっ！」

ピッチャーは投球モーションに入ると同時に、言葉を、気合とボールと共に弾き出した。

「……やあっ！」

葵さんが掛け声を上げてバットを振る。芯に響く音がした。

「！」

ピッチャーが咄嗟に、グラブを空に向けて差し出した。ピッチャーの頭上を、差し出されたグラブの先を、しかし、弾き返されたボールはライナー気味に放物線を描いて越えて行く。

周りから、包み込むような歓声が沸いた。

凄い……！ あの速い球を、あんなにあっさり……！

「や、やったあ！ やったよ。はぴあちゃん、進くん！」

その歓声に包まれた葵さんは、バットを置いて、両手を広げ、笑顔で走ってくる。

俺と天野さんは一度顔を見合わせた後、葵さんを迎えようとして、抱きつかれた。

「あ、あお……っ！」

「えへへ……ねえ、どうだった？ 私、頑張ったんだよ」

「や、そりゃもちろん、すごー」

「凄かった」

うくっ、また先に言われてしまった……。

「ホント？ えへへ、嬉しい……！」

心から嬉しそうだ。葵さんは天野さんをギュッと抱きしめる。

ひとまず俺は解放されたみたいだった。けど、なんだろ……なんか、寂しい。

俺は寂しさを紛らわす為、マウンドに顔を向ける。

「……」

ピッチャーがマウンドで、自分を飛び越えて行ったボールを見つめて立ち尽くしていた。キャッチャーが駆けよる。

スポーツをしている者にとって、勝ち負けとは必然的にそこにあるものだ。スポーツをしていない人だって、負けたいと思うよりは勝ちたいと思うだろう。先程俺はいきなりの『勝負』にも関わらず、打ちたいと思った。二つ目のミッションでのTVゲーム愛好会とのゲーム対決でもそうだった。

今、悔しそうにボールを映している瞳は、「負けた」と思ってい

るのだろうか。

でも、俺は思う。本当の意味で、勝負に勝ち負けは存在しない。あるのは「もっと上手になりたい!」という、喜びと悔しさの、二つの気持ち。

例え「負けた」と思っても、そんなものは、努力し続ける事で「負け」なんて言葉は無くなる、と。少なくとも、そこから――自分の勝負から背中を向けない限りは。

だから俺は、いいなと思う。こんなちょっとした勝負でも拘れる、あの真っ直ぐな背中を……。

「……………」

「進くん!」

「ふえっ? うわっ」

背中に軽い衝撃。ふわりと腕を掴まれる。どうやら葵さんに捕まったようだ。

「っ! な、なんですか?」

捕まえられた腕を、照れと反射の原理で振り払って、葵さんを見る。

「まだ進くんから聞いてないから」

「え? ああ。えと、その……かっこよかったですよ」

「むう……」

俺の言葉に反応した葵さんが、可愛らしく頬を膨らませた。

「進くん、ひどいよ」

「ええっ、ひどいって……」

「私、ちょっとショックだよー……」

葵さんが俯いて言う。

え、あれ? いやいやいや、ちよっ、俺、何もしてないですよ。

「……してないですよね?」、と天野さんに目で助けを求める。

「……ひどい……かも」

天野さんっ? 今、かもって言った。言いましたかっ?

こっちの意図は伝わったみたいだけど、その言い方だと、何がひ

どいのかは天野さんも分かっていなさそうだった。

とはいえ、俺も考えてみたけどさっぱり意味が分からない。仕方ないので、葵さん本人に訊こうとして――

「あの」

声がかかった。キャッチャーマスクを取った、景さんがそこに居た。

「これ」

景さんが、どこか遠慮したようなおずおずといった微笑で、葵さんに封筒を手渡す。ここに来る前に入れた三つの封筒と同じやつだ。先輩達が用意したメモが中に入っているのだろう。

「恵が、『アタシはもっと上を目指す！ だから、次は打たせない！ 奴にもそう伝えておけ！』……だって。ごめんね。あの子、口悪いから」

「あ、いえ……」

「でも凄いな。まさか、あの子が打たれるなんて思わなかった」

友達を想う寂しげな表情。その表情に、俺達は言葉を詰まらせる。「気にしないで。あの子滅多に打たれる事ないから、ちょっと打たれ弱いところがあるだけなの。去年も一度だけ、こんな風に打たれちゃった事があるから、その所為もあるかもだけど……でもね、あの子には、こうやって悔しさを感じる方がプラスなの。だから、えと……ありがとね」

「それじゃ……」、と景さんはピッチャーの――恵さんの許へと戻って行く。

周りに集まっていた人達も、自分たちの部活へと散って行く。

「良い人だね、あの人……ちよっと、羨ましいな……」

「葵さん……?」

「……」

「……ううん、なんでもない。さ、次行こっ！ ねっ!」

「あっ……」

どこか物憂げな表情で何かを呟いたと思った葵さんは、誤魔化す

ように、俺と天野さんの手を強引に引っ張って駆け出した。

——結局、何がひどいのかは分からなかった。

女子ソフトボール部でメモを手に入れた俺達は、そのままの勢いで五つ目、六つ目、七・八とミッションをクリアして行った。

途中恥ずかしい事をしてしまったけど……まあ、それもなんとか治まってきた。

「次で最後だね。進くん、もう大丈夫？」

「あはは、もう全然、全然平気ですよっ」

ぎこちなく笑みを浮かべながら、心配してくれた葵さんに「大丈夫です」とアピールしてみせる。

「そ、そう？　なら良いんだけど……」

「あはは……色々すみません……」

「う、ううんっ！　いいよ、そんなのは。全然気にしてないからっ」
「はは……」

落ち着いてきたと思ったけど、やっぱりまだ恥ずかしさが残ってるみたいだ。俺は視線をやや低めにして、葵さんと天野さんの顔なるべく見ないように廊下を歩く。ってか、見れせんっ。

「……着いた」

校舎1階の一番奥、廊下の突き当たりで封の開いた封筒を持っている天野さんが呟いた。

目の前にある扉の上には、家庭科室と書かれたプレートが掲げている。

俺達の最後のミッションは、『家庭部でへあるもの』を作っているらしい。

あるものって何だろう？　と天野さんがミッションメモを読み上げた時に思ったが、それもこの扉の向こうに答えがあるのなら、まあ、もう考える必要もない訳で——俺達は扉を開けて、家庭科室に

踏み込んだ。

「あ、もうすぐ終了ですよ。急いでくだ——って、一前くんじやないですかあ」

「あ、先生」

教室に入ってきた俺達に声をかけてきたのは、俺のクラス——1—Dの担任である美子先生だった。そういえば家庭科の先生なんだよな。選択科目である家庭科の授業は受けた事ないから忘れてた。

「どうしたんですかあ？　もしかして先生に会いに来てくれたんですかあ？　うふふ、もうっ一前くんったら、可愛いところがあるんですね。先生嬉しくなっちゃいます」

いえ、そういう訳では……と心で言う。だって、なんか本当に嬉しそうだし……。

「ところで——」

ちらちらと、俺の隣に居る葵さんと天野さんを見て、

「そちらの可愛いお二人は、もしかして一前くんの、か、彼女ですかっ？」

美子先生が歌うように——最後だけ真剣に——訊いてきた。

「ふえっ！　や、あの、か、かの——」

「ち、違いますよ。俺に彼女なんていません。二人はお助け部の体験入部で一緒になった、その……と、友達ですっ」

戸惑う葵さんに代わって、照れながらではあるが俺が答える。

「そうなんですかあ？　残念ですう」

な、何がですかっ？　と心の中で美子先生に突っ込む。

美子先生は、新しいおもちゃを見つけたけど買って貰えなかった子供のようになつてガッカリした態度を見せた後、何やら怪しげなメモ帳を胸ポケットから取り出して、「一前くんはフリー、っと」とか何とかを呟きながら、ペンギンさんのマスコットが付いたボールペンを走らせた。……絶対からかうつもりだったな、これは。

「……はむう……？　お助け部？　んんう、何か忘れているようなく……？」

人差し指を唇の端に当て、小首を左右に傾げながら、美子先生は大事な何かを思い出そうと唸っている。

「んう……？ ……あ……っ！ 忘れてましたあ……！」

そうですよ、お助け部ですよ！ りんりんとみどみどによりしくお願いされていたのでしたあ……！ あああっ、どうしましようっ。教師が可愛い教え子との大事な約束を忘れるなんて……！ ……ああっ、もう駄目ですうっ。先生は……先生は教師として失格ですう……！」

何かを思い出して叫んだと思ったら、美子先生は床にペタンと座っていきなり泣き出してしまった。

「あ、あの、先生っ？」

「ふええ……ん。……ひくっ、りんりんとみどみどが、せっかく、せっかく私を頼ってくれたのに……なんで、なんで私はいつもこう……ふええ……ん」

突然の泣き声に教室中がざわめく。

うくっ、こんな時はどうしたら……？

「あ、あのっ、一前くんっ」

おろおろしていた俺の耳に、聞いた事のある声が届く。

「ふえっ？ え、あ……か、叶井さんっ？」

見ると、そこに——おそらく家庭部の体験入部に来ていたのだらう——白と水色が可愛いらしい、素朴な感じのエプロンを着けた叶井さんが立っていた。

あ……エプロン、似合ってるなあ。家庭的な女の子って感じだ……って、そんな場合じゃないな。

「あの、いったいどうしたんですか？」

「あの、それが……先生が誰かとの約束を忘れてたとかで……それで、えと……」

訊いてきた叶井さんに上手く説明できずに口ごもる。

ああっもう。どうして俺はこう説明が下手なんだ……。これじゃ、伝わら——

「――分かりました。それじゃあ、まずは先生を落ち着かせないと」
あれだけで俺の言いたい事が伝わったようだ。叶井さん、なんだ
か頼もしい。

「あのっ、先生、落ち着いてください。……どうしたんですか？」
泣き止まない子供をあやすかのように、目線を同じに優しく先生
に尋ねる叶井さん。

「うっく。そ、それが……せ、先生、ひっく。えぐ、大事な約束を
わす、忘れて……えぐ……お、お願い、されたのに。忘れて……ぐ
すっ」

「大事な約束……ですか？」

「……はい。ぐす。先生、りんりんとみどみに、ひっく、『よろ
しく頼む』って、言われてたのに……封筒だって、ひう、預かって
たのに……うっ、すっかり忘れてて……。ふわぁーん、こんな
じゃ、教師失格ですうっ！」

叶井さんはハンカチをエプロンのポケットから取り出して、泣き
止まない先生の涙を、そっと拭ってあげる。葵さんと天野さんも、
叶井さんと一緒に先生をなだめている。

……りんりんとみどみど？ それに封筒を預かったって……多分、
先輩達の事だよな？

「――あの、先生」

「えぐ……はい、一前くん」

泣いているのに生徒を指名するかの如く名前を呼ぶのは、先生と
しての性なのだろうか。

「あ、えっと。りんりんとみどみどって、お助け部の千藤先輩と御
園先輩のことですよ？ あ、俺達、そのお助け部の体験入部で
来たのですが……」

「……ふえ？」

美子先生は頭の上に視えない疑問符を浮かべて、涙で濡らした瞳
で俺を見上げてくる。

さっきも、ちらっと「お助け部の体験入部で」と言ったのだが

……やっぱりこの反応を見ると、さっきは俺をからかう事に意識を集中していた所為か、「お助け部」の部分は聞こえていなかったようだ。

「えっと……だからその、泣かなくても大丈夫だと思いますよ」

できるだけ優しく、子供の頭をそつと撫でるような言い方を心がけて、美子先生に笑いかける。

「あ……」

すると、先生は何かに気付いたみたいで、もじもじと恥ずかしそうに身をよじった。

……失礼だとは思うけど。美子先生の、教師っぽくない小さな女の子みたいなのそんな仕草は、俺を優しい気持ちにさせてくれた。

「あー、えーとと……こ、こほん。そ、そうなんですかあ。な、なあんだ、そうだったんですね。昨日来なかったのも、先生が忘れていたのかと思っちゃいましたあ。なあんだ……もうっ、驚かせないで下さいよお」

人差し指で涙を拭いながら「てへっ」っと笑って、美子先生が立ち上がる。

もう大丈夫そうだと、先生をなだめていた叶井さん達が安心した微笑みを浮かべる。周りで心配そうに見ていた生徒達も、叶井さん達と同じように穏やかな笑みを先生に向けていた。

家庭科室が和やかな雰囲気包まれる。――ふう、良かった。

「でもでも、そうゆう事でしたら、もう準備はばっちりですよお。――はいっ、じゃじゃん！ これを使ってえ、みくんなどおいしいケーキを作ってくださいねっ。そうすればあこの封筒を、プレゼントフォーミーですす！」

「……あの、先生。フォーユーじゃ……」

「っっ！ そ、そうともいうですっ。さ、さすがは一前くん、ナイスツッコミですす！」

グッと右の親指を立ててウインクする美子先生。……俺、英語苦手なんだけど。先生もそうなんだろうか？

「と、とにかくつ、先生がおいしいと思えるものを作ってください。こう見えて先生は甘いものにはうるさいので、先生をうーんと唸らせるくらいに、頑張ってくださいね」

こうして、最後のミッション『おいしいケーキで美子先生を唸らせる』が開始した。

先程のミッションで肝心のケーキの作り方が分からず困っていた俺達の元に現れた、頼りになる助っ人――叶井さんのおかげで、無事美子先生を唸らせる事に成功した俺達は、先生からご褒美として最後の封筒を貰って、お助け部の部室――お助けベアーへ戻ってきた。

「お、戻ったか。意外と早かったな」

「お疲れ様です」。はい、冷たいイチゴ牛乳です。飲んでください」

「あ、ありがとうございます」

御園先輩から俺達に、コップに入ったイチゴ牛乳が配られる。上座に置かれている机にはすでに飲みかけのが置いてあった。そこに千藤先輩が腰を下ろす。

「あ、そうだ。これ、お土産につて貰いました」

「そうなんですか、嬉しいですよ。では、せっかくなので一緒にいただきます」

メイドクラブで貰ったお土産の箱を葵さんから受け取った御園先輩は、中に入っていた5個のシュークリームをそれぞれに配られたイチゴ牛乳の横に並べる。

「おお、すまんな。ふむ、美味そうだ……と味わうのは後にしましょう。さて、ではさっそくですまないが、証を見せてもらおうか」

御園先輩が配ってくれたイチゴ牛乳を飲んで一息吐いた俺達に、御園先輩からシュークリームを受け取った千藤先輩が言った。

千藤先輩の言葉に、俺、葵さん、天野さんは、三人で顔を見合わせて頷く。俺達の代表としてこれまでのミッションで集めたメモを預かっていた葵さんが、ポケットから全てのメモを取り出して、千藤先輩に一枚一枚見えるように手の平で広げ持つ。

メモを確認した千藤先輩は、御園先輩を見て何やら合図を送る。合図を受けて御園先輩は微笑むと、部室を出て行った。どこに行くんだろう？

「……御苦労だったな。これで、我がお助け部の体験入部は無事終了——ではないっ！」

組んでいた手を離し、机をバンと叩いて立ち上がり、大きく左腕を仰いで言った千藤先輩の声に力が入る。

「もう気付いているとは思うが、それぞれメモの裏には一文字ずつ文字が書かれているはずだ。もちろん、ただ書いた訳ではない。これにはちゃんと意味がある。それが何か分かるか？」

それは俺も考えていた。始めのメモを葵さんが読んでいる時に、その裏に一文字だけ書かれているのに気付いた時は、「何だろう？」と思ったが、次のメモの裏にも、その次のメモの裏にも一文字ずつ書かれていた。それで、もしかして暗号か何かだろうかと思って考えてみた結果——

「——えっと。組み合わせると一つの言葉になる、ですか？」

「……………」

「え、あれ？」

あっさりと答えてしまった俺に、「面白くない奴め……」と視線で千藤先輩が訴えてくる。

「へえー、そうだったんだあ。私、全然気付かなかったよー。凄いな、進くん」

「う……い、いえ……」

無邪気な笑顔で俺を褒めてくれる葵さん。千藤先輩の視線が無ければ素直に喜んでいただろうけど……。うぐ、気まずい。

「ふう……まあ、なんだ。そう簡単に答えられてしまうとな、正直

こちらとしては……面白くないだろうがーっ!」

確かにそうかもしれないですけどおー! と思ったのも束の間。叫んだ先輩の目からビームが発せられ、俺に直撃——したような錯覚に襲われて、俺は守るように頭を抱えた。

「……ふっ。なんて、冗談だ。よく分かったな、褒めてやるぞ」

「え、あ、えと。あ、ありがとうございます?」

目からビームを出したと思ったら——いや、俺の勝手な錯覚なんだけど——急に優しい顔を向けてくる千藤先輩に戸惑いながら、俺は何故かお礼を言っていた。

「ふふ。それでは、もう説明も要らないだろうが……あたしから、君達に最後のミッションを与えようではないか。察しの通り、メモに書かれている一文字一文字を組み合わせて一つの言葉を作ってほしい。制限時間は3分だ。用意はいいな? では——」

「えっ、そんないきなり……」

「——スタートだ!」

千藤先輩が振り上げた手を垂直に下ろす。慌てて俺達は集まり、ソファ前の机を借りて、その上に葵さんの持っているメモを一枚ずつ広げて確認する。

最初に千藤先輩から貰ったのが『お』。次がMA部の『こ』。それから順に、『す』『ぶ』『た』『へ』『そ』『う』『け』『よ』、と書かれている。

「うーん……? 起こす、豚……酢豚? へ、へそ? うーん、なんだろ?」

そんな風にメモの問題を解こうと頭を悩ませる葵さんがなんだか可笑しくて、俺は葵さんに話しかける。

「くすっ……別に順番通りにする必要は無いと思いますよ。こういうのはパズルみたいに色々組み替えてみると、面白いんですよ」

「あ! そっかあ。そうだよねっ。あはは、私、順番通りにしか考えてなかったよ」

「ふふ。俺も、始めてこういうゲームをした時はそうでした」

「あ、そうなんだ。じゃあ別に私だけじゃないんだね。ちょっと安心」

そんな会話を葵さんとしながら隣を見る。

「……………」

真剣な顔で天野さんがメモを見つめている——俺も考えよう……とは言っても、こういうのはちょっと苦手なんだよなあ。

どんな問題かは分かるけど、肝心の答えが分からない。メニューを見て料理がいっぱいあるけど、食べたいものが中々見つからない。みたい。……あの時から俺は、いつも迷ってばかりだ……。

——って、なんでこう余計な事ばかり考えるかな、俺は。真面目に考えよう。うーん……う、す、ぶ、た——薄豚よ、そこへ置け？

……違うな。そこ——そこ助よ、歌へ……おぶ！　とか？　そんな訳ないか。というか絶対無いな、これは。

はあ、本当に真面目に考えているのかと疑われるようなものしか思い浮かばない自分の頭が悲しいよ……。

「うーん……ダメ。全然分からないよ……」

葵さんが肩を落として息を吐いた。

「——残り1分だ」

と、そこで千藤先輩が壁に掛けてある鳩時計を見つめて言う。葵さんが吐いたばかりの息を呑み込んだ。

……このままなんだかよく分からない言葉を片っ端から思いつくだけじゃ間に合わないな、当り前かもだけど。ここは、考え方を変えてみた方がいいかもしれない。

そもそも考えてみれば、これは体験入部の為に先輩達が考えたもの。だとしたら、俺が思いついたような、何が何だか分からないような言葉は、まず、答えとしてはありえない。答えになる可能性がある言葉。体験入部に関係した——先輩達が、俺達に贈りたいと思う言葉……。

——……………成程。昨日の、先輩達の温かな笑顔が浮かんできた。「……………ん、分かった……」

俺が答えを見つけたのとはほぼ同時、ずっとメモを見つめて考えていた天野さんが顔を上げた。

「ホント、はぴあちゃん！」

訊いてきた葵さんに、確信を持って天野さんは頷く。

「ほう？　では、さっそく見せてもらおうか」

もう一度頷いて、天野さんは広げてあったメモを集め、千藤先輩が立っている前の机に置く。そして、答えを示すべくメモを並べていく。俺と葵さんは、そんな天野さんの隣で見守る。

「……ん」

天野さんの手が止まり、俺も見つけた答えと同じ、一つの言葉が完成した。

「あ……そっか……うんっ！」

パズルを組み合わせて出来上がった答えを見て、葵さんが納得した風に頷いた。

天野さんが横二列に並べたメモを、千藤先輩側から見た場合、上の列の左から順に、『お』『た』『す』『け』『ぶ』『へ』、下の列は、『よ』『う』『こ』『そ』となる。つまり――

葵さんが俺を見ってくる。俺は頷く。こちらを見上げていた天野さんとも顔を見合わせて、頷き合う。そして、

「――『お助け部へ　ようこそ』」

俺達は千藤先輩に向かって、三人の声を合わせた。

「……ふっ、正解だ。良く頑張ったな。最後までやり遂げてくれた事、礼を言うぞ。ありがとう」

千藤先輩が、俺達に気持ちの籠った微笑みをくれる。

「……楽しかった」

「うんっ！　凄く楽しかったです！」

「……俺も、です。色んな人達と話せたりして、色んな事ができて、ゲーム感覚で学園を回れて、楽しかったです」

「そうか。そう言って貰えて、嬉しいよ。ありがとう」

心に温かな風が吹いたかのように、自然と皆の顔が綻ぶ。

「——ん……？ 何だ、あれは？ おい、あれを見ろ！ 何かおか
しなものが……！」

——と。突然、後ろを振り返った千藤先輩が、よく晴れた窓の外
を指差して叫んだ。

おかしなもの？ 何だ？

俺達は窓に近づき、千藤先輩の指が示す先を見た。しかし、特に
これといったものは見当たらない。俺は制服のポケットから眼鏡ケ
ースを取り出して、眼鏡を掛ける。そうしてから、もう一度窓の外
をよく見てみる。が、やはり何か変わったものがあるようには見え
なかった。

「ほら、あそこだ。あの——」

パーン！ 大きな弾ける音が鳴った。

「っ！」

背中の方から聞こえてきた音に、ビクッと体を震わせながら、俺
は振り返る。

頭に何か落ちてきたと思ったら、柔らかい感触に顔を包まれた。

「んぐ」

「クママ。うふふ、驚かせてしまいましたね、すみません」。
ですが、どうか許してくださいね」

「まふ、むぐ」

こ、このふわふわは、昨日の……むぐ、ふく——ふはっ。

何とか顔を横に向けて、息苦しさを解除する。

「はっはっは。大成功だな、水鳥！ どうだ、ビックリしただろう
？」

驚いている三人の一年生（捕まっている俺含む）を見て、千藤先
輩が見事悪戯に成功した子供みたいな笑みを作った。

「違いますよ。今のわたしは、お助けベアーですよ」

「おお、そうだな。すまんすまん。いやあ、しかし、こうも見事に
驚いてくれるとは……君達は純粹なんだな。だがあたしは、そんな
君達が大好きだぞ！」

胸を張って、親指をグツと立てて言う千藤先輩にどう反応しているか分からず、葵さんと天野さんは、驚いた表情のまま目をぱくりさせている。昨日に続いておたすけベアーに変身した御園先輩に捕まってしまった俺は、とりあえず放してもらってから、おたすけベアーの手にクラッカーがあるのを見て、さっき頭に落ちてきた何か――クラッカーのテープを取る事にした。

「うふふ。びっくりしましたクマ？」

「凄く、びっくりしました」

「……びっくり」

丸っこい両手を合わせて可愛らしく訊いてきたお助けベアーに、葵さんと天野さんの二人がまだ驚いている口調で答えた。俺も二人に同じだ。いや、もしかしたらそれ以上かも。

や、もう本気でビックリしたから。ただの村人だった少年がいきなり王様に呼び出されて、「そなたこそ伝説の勇者じゃー!」とか言われて、魔王を倒す旅に出る、くらいにビックリしたからね。もう、飛び上っちゃいましたからねっ!

「いや、このまま終わらせるのも何か味気無いと思ってな。まあ、可愛い後輩へのちょっとした悪戯心というやつだ」

そう言って、悪戯っぽく笑う千藤先輩。

……まったく。最初はかっこいいって思ったのに、褒められて赤くなったり、こうして無邪気に笑ったり……不思議な人だな、この人は。もっと色んな面を見てみたくなる。

「まあ何だ……あたし達から君達に、最後に贈らせてほしい言葉があるのだが、いいか？」

千藤先輩が真っ直ぐな瞳で俺達を見つめて言う。

「……ありがとう。きつとこの先、たくさんの笑顔が君達を待っているだろう」

あ……この言葉……。

千藤先輩の笑顔が、リストで見た時よりもこの言葉を何倍にもして、俺の心に響かせる。

——俺は、俺は変わる。ここでも、きっと……！

そんな強い想いが、俺の心をいっぱいに満たした。

「では、これにてお助け部体験入部を終了する。困った事があったら、いつでも此処に相談しに来るといい。あたし達に任せれば、どんな難題だってズバツと解決、だからな！ ……きっと！」

最後の「きっと」の部分のおかげで、自信があるのか無いのか不安な台詞になってしまったけど、胸の前で拳をグツと握り締めている千藤先輩の姿は、頼もしく思えた。なによりその真っ直ぐな意思を宿した瞳が、確かに輝いていた。

「うふふ、お任せ下さいです。クマッ」

両腕を、力強く？ 折り曲げて頼もしげに言ったおたすけベアーの表情は——残念ながら見えなかった。
？

二歩目 変われるキツカケ……なのかなあと思う（後書き）

えと、色々省略する事になった各部活の内容ですが、ちゃんと手元に存在します（短いものやら長いものやら）。

中には10ページ書くのに1ヵ月かけたものもあったり（どれだけ書くの遅いんだよ（@|@））

なので、もし読みたいという方がおられましたら一声頂けると嬉しいです（^^）

あーでも、読みたい方なんていないかもだし……やっぱり、もったいないから時間のある時にでも載せてみようかと思っています。

——最後まで読んでくださった方、貴重なお時間を削ってまで読んで頂いてありがとうございますm（――）m

また続きとして最終話とエピローグを載せてみようと思っていますので、そちらもよろしくです。

体験入部2つ目 TVゲーム愛好会（前書き）

これが噂の？ 書くのに1ヵ月以上かかってしまった、体験入部2つ目 TVゲーム愛好会でのお話です。
話数にすると2、2くらい？

えと、ページ制限と「まさかこんなに長くなるとは……」、と僕の予想外の真面目さを見つけてしまった為本編からぬいたものになります。

初期に書いた為、同じ言葉が続いたりして、うまく動きがイメージできないかと思いますが、そこは許してください。

あ、ちなみに出てくるゲームは僕が小さい頃にハマったゲームだったりします。

何か分かる人いるかな？

ヒント・ハードはN64が2作とGCで1作、後GBAでもあったかな？（GBAはやってないから忘れたw） そういえばDSでも出てた気も……（～o～）

体験入部2つ目 TVゲーム愛好会

「今からきくみたちには、ぼくたちとこのゲームで対戦してもらう」

TVゲーム愛好会のメンバーの一人、ガッシリというよりズッシリとした体の人が、ゲーム機が接続されているTVを指さして、部屋に入ってきた俺達に言った。

「これは……！」

「きししっ、その顔、このゲームを知っているみたいだねえ」

電源が入っているTVには、俺が小学校の頃に夢中になった、たくさんある様々なパーツの中から、基本となるボディ、メインウェポンのガン、サブウェポンのボムとポット、機動力となるレッグ、の5種類を組み合わせて自分だけのロボットを作って戦う、アクションゲームの画面が映されていた。懐かしい。

「今ぼくたちはこのゲームにハマっていてね。でもぼくたちだけだとお互いの癖とかが判ってきてちよっと退屈してきてね。だから他の人とも戦ってみたかったとこだったんだよ」

「そしたら丁度、あの千藤 凜殿が拙者達にお願いに来たのでござる」

「お助け部の体験入部に来た一年生と遊んでやってくれてね。きししっ」

お互いの言葉を繋げるように話す、TVゲーム愛好会の人達。

さすがにTVゲーム愛好会というだけあってうまくコンボを決めたな。この人達、できる……！

「勝負のルールは簡単、勝ち抜き戦でどうでござるかな？」

「勝ち抜き戦？」

「そう。例えば、きくみたちの内二人が負けても、残った一人がぼくたち全員に勝利すればいい、というわけだ。もしもきくみたちが勝ったなら、この封筒をあげるよ。まあ、ぼくたちはそう簡単

に負けてあげるつもりはないけどね。ぷくつく」

TVゲーム愛好会の人達は揃って余裕の笑みを浮かべた。

……この自信、相当やり込んでるみたいだな。

「はぴあちゃん、TVゲームってしたことある？」

「……無い」

「うーん、だよー。実は私もなんだ」

俺の後ろで葵さんと天野さんがそう話している。

まあ、二人は女の子だしな。ゲームをしたことが無くても別におかしくはない。だがそうなることやはりここは――

「……あの、俺が最初でいいですか？」

「え？ うん、別に私は構わないけど……でも進くん、TVゲームってしたことあるの？」

「はい。これでもゲームは好きなんです」

「そうなんだー。進くんってそういうのあまりしなさそうだと思ってたよー」

「そうですか？」

「うん。だって進くん真面目そうなんだもん」

そうなのか、葵さんからはそんな風に見えてたんだ俺って……。ちよっと嬉しいかも。

「きししっ、きみが相手？ なら、僕ちんからいかせてもらうよ」

長い髪で目を隠した男の人がゲームのコントローラーを持ってTVの前の椅子に座る。

「さ、これに座るといいでござるよ」

「え、あ、ありがとうございます」

爽やかなちよんまげの人が俺に椅子を出してくれる。ありがたく俺はその椅子を使わせてもらうことにした。床に置いてあるコントローラーを手に取る。

「説明書、読むかい？」

「いえ、このゲーム好きだったので、多分覚えていと思います」

「きししっ、いいねえその自信。負けて言い訳しても僕ちん知らない

いよ？」

「はは、まあ、頑張ります。あ、もうちょっと前に出てもいいですか？ 目が悪いので」

椅子を少し前にずらして座り直す。

その間に相手が画面を操作し、タイトル画面から対戦モードに切り替わる。

俺と相手はお互いにパーツを組み合わせて自分のスタイルに合わせたロボットをカスタマイズする。

えーと……たしか……？ ん、これでよし。

「準備ができたようだねえ。それじゃ、始めようじゃないかっ」

「ファイトだよ、進くん！」

「はい。頑張ってみます」

お互いに準備を終えたところで、さっそくゲーム開始だ。

カウントダウンが始まり、数字が0になると共に、バトルフィールド中央のカプセルからお互いにカスタマイズしたロボットが射出される。俺は着地と同時にロボットを障害物の陰に移動させる。

陰に隠れたところで、夢中になっていたあの頃を思い出しながら、一通りボタンを押してやり方を確認してみる。くうく、懐かしいなあこの感じ……！

「きしっ、来ないならこっちから行くよっ」

「……！」

相手のロボットがこちらに近づいてくる。っ速いな、スピードタIPPか。

近づいてきた相手がガンを撃ってくる。すぐさま空中ダッシュで距離を置く。

「ステルスダッシュ……！ それはダッシュしている間、相手のガンを無効化できるからねえ。君、そのボディの特性解ってるじゃないか。きししっ」

まあ、これはよく使っていたからな。理由は色が青色だからってだけだったけど。

「なら、これでどうだい？」

と、今度はポットとボムを撃ってきた。

瞬間、俺はステルスダッシュで相手との距離を一気に縮め、相手の正面に躍り出た。

ボムを使って動きの止まった相手のロボットに、至近距離でのガンをおみまいする。

「きしっ……！」

ガンの直撃を食らった相手はその場にダウンした。その間に俺は再び相手から距離を置く。相手の撃ったポットとボムが何も無いところで爆発した。

よし、うまくいった。

俺の選んだガンは、威力は大きいが射程が短いタイプだ。だから相手にいかにして近づけるかがポイントになる。どのゲームでも、大抵スピードタイプは一度動きを止めてから再びスピードをだすのに少しの時間が必要だからな。たしか、このゲームもそうだったはずだし、結構覚えているものだな。

「な、中々やるじゃないかっ。でも、まだ勝負は始まったばかり……ここからは本気でいかせてもらうよ。きししししっ」

立ち上がった相手は、障害物の間を速い足を活かしてちょこまかと駆けてくる。

俺は壁を利用して相手との距離を整えながら、一度に四つまで出せるポットを四つ、一つずつバラバラの方向にバラ撒きながら走る。ホーミング機能が付いたポットの一つが相手に向かっていく。が、相手はそのスピードで難なく避かず。避けされたポットは意味もなく爆発した。

そこへすかさずボムを相手の予測移動ポイントへ向けて放つ。

「きししっ、僕ちゃんの足の前ではそんなもの……！」

それも避わした相手が、足を止めた俺の後ろに回り込む。

さっき爆発したポットの代わりを放つ。それをジャンプで避けた相手は、そのまま空中ダッシュで俺の横に並び、ガンを発射。しか

し、相手のガンは俺を捉えなかった。

ガンを撃つ為に相手の空中ダッシュが途切れた一瞬、その瞬間を見計らって俺は指を動かしていた。

相手が俺に並んだと同時に短いジャンプ、すぐさま空中ダッシュに移行させる。

ステルスダッシュで相手のガンをすり透り抜け、トライアングルの軌跡を描きながら後ろに回り込んだ。

「き……！」

察知した相手は空中ダッシュで逃げようとするが、間に合わない。俺は空中で無防備になった相手に、止めのガンを叩き込んだ。

「き、きしーっ！　そ、そんな……この僕ちゃんが、負け……」

相手は信じられないといった風に、勝敗のついたゲーム画面を見つめている。

「ほう、カゲタが敗れるとは……ぷくっ、おもしろい」

「カゲタ殿、しっかりするでござる」

長い髪を垂らしてすっかり落ち込んでしまった男の人を、ちょんまげの人が支えて立たせる。そのまま空いている場所に静かに座らせる。

うっ……そんなに落ち込まれると、胸が痛い。

「……次は、拙者がお相手するでござるよ」

気まづくなった部屋の中で、ちょんまげの人が戦で友を失った侍のような、静かな闘気を纏って、床に敷いてあった座布団に正座で座る。

真剣な表情でパーツを選んでいくちょんまげの人。俺の方はこのままで、相手を待つ。

相手の準備が終わり、対戦開始のカウントダウンが始まる。

「カゲタの仇、とらせてもらうでござるっ！」

カプセルから二つのロボットが射出されたと同時にちょんまげの人が叫んだ。

「……………」

なんか、やりづらいな……。

でも、戦場で散って逝った友を想い闘うその心意気。その気持ちを踏み躪らない為にも、俺も全力で迎え撃つ……！

「……拙者の負け……完敗でござる……」

「早っ！」

つい口から飛び出した言葉を、もう遅いと知りつつ口を押さえて呑み込む。

ええっ、いくらなんでも早過ぎるでしょ。だってこれ、まだ始まってから1分も経ってないよね……？ いいの、こんな……ええっ……。

予想外の弱さに言葉が見つからず、コントローラーを握っている手から力が抜けた。

「すまぬカゲタ。お主の無念、晴らす事が出来なかった……だが、拙者は力の限り、己の信念を貫いたつもりでござる。どうか許してくれ、カゲタ……げふっ……」

ちよんまげの人は、先程座らせた髪の毛の長い男の人の隣に腰掛け、静かに語り終えると、天井を見上げてその場に崩れ落ちた。

「……ゴザロウ、よくやった。後はこのぼく々に任せて、お前達は休んでいるといい」

ズッシリとした体の人が、敗れた二人の肩に手を置いて、優しく言葉をかけた。

「ぐすっ……良いお話だね、はぴあちゃん」

「……ん……」

葵さん達を見ると、二人は涙目だった。

ええっ、泣くところなんですか、今の……？
なんだろうな。なんかもう、誰かに替わってほしい。

「中々やるようだね。しかし、カゲタとゴザロウの尊い犠牲のおかげで、きくみのプレイスタイルは把握させてもらった。すなわち、もうきくみに勝目は無くなったという訳だよ。ぷくっく」

俺の前に立ったズッシリとした体の人が挑発的な口調で言った。

「……………」

ふふ。なんだかそんな風に言われると、無性に負けたくなくなるじゃないかっ。

俺のコントローラーを握る手に力が込める。

「ぷくっ、いい眼だ……それじゃ、始めるよ」

俺の方は変わらずそのまま、相手の準備が終わるのを待つ。準備が終わった相手が対戦開始のボタンを押す。そしてカウントダウンの合図が終わり、カプセルから飛び出たロボットがバトルフィールドに着地する。

着地した瞬間、俺は早々に仕掛けた。

ステルスダッシュで一気に相手に近づき、先制のガンを撃つ。

「いきなり仕掛けてきたね。でも……！」

相手のロボットが紅く光り、体当たりを仕掛けてきた。

「っ！」

こちらのガンをもともしない相手のタックルを食らった俺のロボットは、勢いよく弾き飛ばされてダウンする。

「ぷくっく、やはりな」

「！」

「きくみのプレイスタイルは把握したと言っただろう。ステルスダッシュで相手に近づき、威力の高いマグナムガンでアタック。さっきのバトルを見ていると、あまりボムとポットを使っていなかったからね。つまり、きくみは射程の短いガンを当てる為に、必ずぼくに近づいてくるって訳だよ。それに、どうやらきくみはタックルのことを忘れていたようだったからね。思い出させてあげたんだよ。ぷくっく」

くっ……たしかにそんなのもあったな。すっかり忘れていた。

タックルはこのゲームにおける切り札ともいうべき攻撃だ。耐久力の低いボディなら一度タックルを受けただけでも、HPの三分の一は楽に削られる。その上、機体が紅く光っている間中は一時的に無敵になり、どんな攻撃をも無効化する事が出来る。

しかし、当然デメリットもある。タックルを使った後は隙が大きく、相手に中らなければ僅かな時間操作を受け付けなくなる。その為、当時の俺はあまり使っていなかった記憶がある。

「……………」

ダウンしていた俺のロボットがヨロリと起き上がって、障害物の上に立ってこちらを見下ろしている相手のロボットを睨みつけた。数秒、両者は対峙したまま睨み合う。

「ぶくつく、どうしたんだい？　もしかして、怖気づいたのかな？」
「……………」

その言葉を合図に俺はボムを放つ。

相手は障害物の上から飛び降り、そのまま身を隠す。障害物に遮られて爆風は相手には届かない。

俺は走る。走りながら、こんな時はどうしていたかと、記憶を探って……駄目だ、思い出せない。

ならば、と考える。

今の俺の装備でできる事は――ボムは一発ずつで続けては撃てない。ポットは一度に四個まで出せるけど、ガンは連射が利かない。ステルスダッシュは着地するまでに三回。タックルは……今の俺じやうまく使えるか不安があるな。

となると、やはりガンを決め手にするしかない訳だが。さっきみたいに単純に突っ込むだけじゃ通用しないだろうし。まずは相手の動きを止めて、そのうえでタックルをどうするかを考えないといけない。

「やって……みるか」

このまま考えていても、制限時間がきてしまったら、判定で残ったHPが多い方の勝ちになる。相手はまだ無傷、とにかく攻撃あるのみだ。

ポットを二つ、右と左に逆方向へ放つ。少し間を空けてポットが相手に近づいた頃を狙い、ボムを相手の僅か左に撃つ。

相手は右に短くジャンプして避かず。そこに向かって走り、残りの

ポットを正面に放つ。

相手はもう一度短くジャンプし、ポットを一つ出して、空中ダッシュで斜め後ろへ下がった。

相手の出したポットはすぐに爆発するタイプらしく、その爆風で前が遮られる。俺は仕方なく左へ走る方向を変えてボムを撃つ。そしてすぐにジャンプして、ステルスダッシュで相手に近づく。さっき俺が放ったポットが全て爆発した。

「あまいっ！」

近づいた俺に対して、着地ばかりの相手はすぐさまジャンプ、ダッシュで向かってきた。

「っ」

すれ違いざまにガンを撃たれる。

俺はとっさに三回目のステルスダッシュを別方向へ変え、相手から距離をとった。俺を透り抜けた相手のガンからは鋭い電流が迸っていた。

「ふん、よく避わしたね」

ズッシリとした体の人が鼻を鳴らして言った。

はあっ、危なかった……。あれはたしか、スタンガンだったか？ 掠っただけで動きを封じられる嫌な武器だったはず。なるほど、タックルと組み合わせれば、食らったが最後起き上がることはできないだろう、凶悪なコンボだ。

……厳しいな……。どうやら本当に、前の二人との対戦でこちらの動きを研究されてしまったみたいだ。

下唇を噛み締める。

「もう降参かい？ 動きが止まったようだけど？」

もう勝ち目はない、諦めろ。と言っているかのように相手が言葉を投げかけてきた。

「……………」

俺は何も答えず、がむしゃらに自分のロボットを動かした。

フィールドをステルスダッシュで飛び回る。

「ぷくっ、ヤケクソだね」

鼻で笑って、相手が次々とポット——一つ爆発してはまた放つ——を繰り出してきた。

俺は相手のポットに中たらないよう注意しながら、時折ボムを撃つ。相手は少し横に移動するだけでそれを避した。

これを何度か繰り返すと、今度はポットを一つ織り交ぜてボムを撃つ。

「無駄だよ」

相手が壁と障害物で囲まれた場所に移動する。

……ここだ！

この瞬間、俺は勝負をかけた。

ポットを二つ右方向へ放つと同時にステルスダッシュを一回。相手との距離を少し縮めてボムを撃つ。撃つたらずぐにL字にステルスダッシュ、着地したところで四個目のポットを放つ。最初にボムと一緒に放った一つ目のポットが相手に迫る。

相手は後ろに軽くジャンプし、迫ってきたポットを右にダッシュして避かず。ポットが爆発する。

そこへ二つ同時に放ったポットが相手の進路を塞ぐように回り込んでいた。

「むっ」

相手がに向かってダッシュで切り返した。相手に届かずに二つの爆風がフィールドに空しく漂う。

フィールド中央の着地する前の相手に、ステルスダッシュで迫る。相手がガンを構え、撃つ。だけど、それは俺には中らない。相手のガンは俺を透り抜ける。

着地した相手は間を置かずに振り返り、後ろに回り込んだ俺に素早くタックルの体勢をとろうとする。——でも、遅かった。

そこへ、俺が放った最後の四個目のポットが、相手の左斜め後ろ、障害物の陰から姿を現した。

ポットがターゲット目掛けて突進。吹き荒ぶ爆風が相手に襲い掛つ

た。

「ぬなあっ！」

相手が吹き飛ぶ。

その先、爆風で吹き飛ばされた相手が向かう先には、紅い光りを纏った青色の機体。

「しまっ」

「お返し、です」

紅い閃光が向かってくる相手を二度貫いた。

「ぬぷっああ！」

弾き飛ばされた相手が壁に激突し、ダウンする。

よしっ！ 心の中でガッツポーズ。

ふう……なんとかうまくいったな。作戦っていう程のものじゃないけど、大成功だ。

まだ起き上がらない相手に向かって俺は思う。ヤケクソなんかじゃないよ、と。

別に俺は何も考えずにコントローラーを動かしていたわけじゃない。フィールドをあちこち落ち着きなく動き回る事で、相手を油断させると同時に混乱させる。そして、ポットやボムを使って相手を壁際に誘導し、相手の行き場を減らし逃げ道を限定させる事。これが俺の狙いだった。

さっき「降参かい？」と聞かれた時、昔このゲームを始めてした時の事が頭に浮かんできた。

よく一緒に遊んでいたアイツに、よくこれをやられて悔しがっていた思い出がある。その時の自分の姿を思い浮かべると、自然と頬が緩んできた。

「ぶ、う……ふん、たしかに今のは中々だったね。でもまだぼくの方がきくみのHPを上回っている。うまくいったからって、笑っている余裕があるのかな？ ぷくっく」

確かに。相手のロボットは防御力が高いのか、まだ四分の三くらいはHPが残っている。

起き上がった相手がボムとポットを連発しながらこちらに向かってきた。

俺は障害物を盾にして相手の攻撃を避け、そのまま身を隠したままポットを左右に一つずつ放つ。

相手が直線的なダッシュで俺が隠れている障害物の上を飛び越そうとする。

俺はポットを置いて後ろにジャンプし、ボムを今隠れていた場所に撃つ。

ボムとポット、二つの爆風に進路を遮られた相手は後ろにインターン。その隙に俺はボムを相手のさらに後ろに向かって撃つ。後ろに下がった相手に左右からポットが迫る。

「ちっ」

小さく舌打ちした相手は、もう一つダッシュで後退する。

「……焦り過ぎですよ」

下がった相手に空中で、さっき撃ったボムがドンピシャのタイミングで衝突した。

「あ……」

落下する相手の下にステルスダッシュで潜り込み、ガンを撃つ。僅かに浮き上がった間に一步移動し、落ちてくる相手に今度はタックル。

「ああ……」

画面で倒れ込むロボットと同調するように、相手が力無い声を漏らした。

これだけやってやっと、という気持ちがあるが、ともかく、この時点で相手のHPは俺を下回った。画面上隅に表示されている時間は、残り40秒を切っている。

となれば、後は無理に攻める必要もない。タイムアップまでひたすら逃げ回る事にしよう。

相手と真逆の位置、最も相手から離れたポイントに移動して、相手の出方を待つ。だけど――

「…………あれ、仕掛けてこない？」

相手は起き上がったまま、その場から動こうとしない。

どうしたんだ？　もう30秒も時間は残っていない。勝ちにくるのならもう攻めてくるしかないだろうに…………？

画面から目を逸らして横を見る。

「…………！」

横を見たことで、何故相手が動かないのか？　その疑問が消えた。だが、それと同時にまた、新たな疑問も生まれることになった。

相手は目を閉じていた。

作戦でも立てているのか、気の知れた人でも声をかける事を躊躇われるほどの空気が、彼から醸し出されていた。

俺は乾いてきた喉を、唾を呑んで潤した。

駄目だ、まだ気は抜けない…………！

視線を画面に戻す。タイムアップまで、残り18秒を切っていた。緊迫した空気が瞬きを許さない。一秒一秒が長く感じる。

まだか？　いつ動く？　何をしてくる？　早く、早くしてくれ…………！

コントローラーを持つ手が汗ばむ。

「…………まだだ…………」

「…………っ！」

横から聞こえた声に、体が震える。

「まだ勝負は終わっちゃいない！」

相手のロボットがダッシュで突進——いや、猛進してきた。

「く…………」

その迫力に圧されて、俺はステルスダッシュで右に逃げる。

それを読んでいたかのように、相手が進路上にボムを撃ってきた。避わす為に方向転換する。

後ろに切り返してボムを避わした俺に、近づいてきた相手がポットを放ってきた。

爆風の波を、左斜め前方にステルスダッシュで避わす。

着地してすぐ、ここからステルスダッシュで離れようとジャンプするが、そこにも相手がポットを放ってきて進路を塞がれる。相手がすぐ側まで迫ってくる。

(だったら……!)

ジャンプしたまま空中で漂っていた俺は、着地せずに、迫ってきた相手にステルスダッシュで向かっていく。

すれ違いざまにガンを撃とうと、コントローラーのボタンを押す。だが、それも読まれていたのか、俺のガンが撃たれる前に、相手がボムを撃っていた。

「な!」

相手の撃ったボムが、相手ごと巻き込んで、俺のロボットを上へ向かって吹き飛ばした。

まさか、自分ごと……くっ……。

コントローラーを操作するが、気絶しているかの様に俺のロボットはただゆっくりと落下してくるだけだった。

一緒に爆発を食らったはずなのに、相手はダメージは受けたものの、僅かに仰け反っただけで、その場に立っていた。

「もらったあ!」

相手のロボットが紅く光りだす。

駄目だ、やられる……!

落ちてくる俺のロボットが相手に突き飛ばされる映像が頭に浮かんだ。

そう思った瞬間、体が硬直し、しかし目だけは吸い込まれる様に画面を映していた。視界には俺のロボットがフィールドに横たわった姿と、それに迫る紅く光った相手のロボットの姿。それと、画面上隅に並ぶ0の文字が――

相手のタックルが決まるか決まらないか、寸前のところで、相手がその動きを止めた。

――タイムアップ。

「ぬあああっ!」

相手が勢いよく椅子から飛び上がり、コントローラーを放り出して叫んだ。

放り出されたコントローラーが床に落ちる。

勝っ……た？

画面では俺のロボットが勝利ポーズを決めていた。

「はは……やったあ……ふあ」

体から入っていた力が抜ける。

なんとか、ギリギリだけど……俺の勝ちだ。ふふ、結構忘れてないものだな、昔の事って……まあ、昔っていつても、4、5年前くらいだけど。

俺も持っているコントローラーを床に置いて、椅子から立ち上がる。

「二人共いいバトルでござった。拙者、見ていて胸が熱くなってきたでござるよ」

「きししっ、僕ちんなんか体が震えて止まらないよ」

「それは武者震いというやつでござるな。二人の戦いを見て、カゲタの中の熱き心に火が点いたのでござるよ」

「きしっ」

いつの間にか立ち直っていたちよんまげの人と長い髪で目を隠した男の人が、少し離れた後ろに立っていた。

「……ズッシー……負けて悔しい気持ちは察するが、約束は約束でござるよ」

「……ああ、分かっているとも」

ズッシリとした人が、沢山のソフトや攻略本で乱雑している机の上から、一冊の攻略本を手に取り、その本に挟んであった1枚の封筒を抜き取った。

「受け取るといい。約束の勝者の証だ」

まるで、長い間争ってきたライバルと決着を付けるべく、力の限り戦った末に敗れ、ついにその力を認めた戦士の様に、封筒を渡してくれた。

「……ありがとうございます」

封筒を俺に渡したズッシリとした人は、そのまま封筒を渡した手で、握手を求めてきた。

「……………!」

俺と相手は互いの健闘を言葉ではなく心で称えあって、ガッシリと握手を交わす。

「くうっ! これぞ男同士の友情! 拙者、感動でござるう〜!」
ちよんまげの人は拳を握って熱い涙を流していた。

「僕ちんとも……してくれる、かな?」

長い髪で目を隠した男の人が少し照れながら、すっ、と控えめに手を差し出してきた。

「はい」

差し出された手に手を差し出して、握って応える。

「……………私のハンカチ……すん……もう、涙でビショビショになっちゃったよお……ぐすん」

「……………ぐすっ……………ん……………」

葵さんと天野さんの二人は、目から涙を零していた……涙もろいんだな、二人共。なんで泣いてるのかは……まあ、ちよつとだけなら解らなくもない……かも。

「あの……これ……」

俺は二人に近づいて、泣きやんでくれるかな、と思い、封筒を差し出した。

「えっと……つ、次に行きましょうか」

「あ……うん!」

「……………」

二人の顔を見ずにちよつと下の方を向いて言った俺に、葵さんが封筒を受け取り、天野さんは頷いてくれた。

「もう行くのでござるか? 最後に拙者ともう一勝負どうでござるうか?」

「せっかくですけど、今は……また今度機会があったら、その時に

でも、また勝負してくれますか？」

「機会があったらなどと言わず、いつでも来るといい。いや、いつそこに入部すればいい。そうすれば毎日好きな時に好きなだけ対戦できるぞ？」

「あ、それいいかもね。そしたら、今度は僕ちんの得意なゲームを教えてあげるよ」

「はは……」

それも楽しいかもしれないな。と思いつつ、俺がゲームをしている間退屈だっただろう二人をこれ以上待たせるのも悪いからな。今はやっぱり、お助け部の体験入部を楽しむ事に専念しよう。

「あの、それじゃ、楽しかったです。また、よかったら対戦してください」

「もちろんでござる。拙者達、お主と再び相まみえるのを心待ちにしているでござるよ」

そう言っで見送ってくれたTVゲーム愛好会の人達にお辞儀をして、俺は葵さんと天野さんと一緒にTVゲーム愛好会の部室を出た。

体験入部2つ目 TVゲーム愛好会（後書き）

自分で言うのもなんですが、キャラが好きですW

体験入部ラストまでのお話 バレー部へ5つ目〈&演劇部へ6つ目〉(前書き)

タイトルの通りです。

ページ数の為、最後の部分が本編と変わってたりします(こっちが最初に書いたメインで、7つ目と8つ目の部活名が明らかに！ なっていたはず……たしか)。

短いので、ちょっとした合間に読んでみてください(＃＾・＾＃)

体験入部ラストまでのお話 バレー部へ5つ目<&演劇部へ6つ目<

次のミッションが記されているメモを見て、俺達が向かったのはバレー部だった。

バレー部の活動場所である第1体育館に着いた俺達は、またしても勝負を挑まれる事になった。

ルールは簡単。先に4ポイント先取した方の勝ち、だそうだ。

何故に4？ と聞いてみたところ、「4番はエースの証。昔からそうと決まっておろう」と言われたので、「何の4番ですかっ!」と思わず突っ込みたくなる衝動に駆られたが、なんとか堪えられた。目立つ真似はしたくないからな。

勝負をするにあたって、元々のコートに小さな三角コーンを置いて小さめのコートを作り、その中で3対3のミニゲームを行う事になった。

しかしながら、俺はバレーボールを小学校の子供会でした事があるくらいで、ルールなんかはよく解らない。葵さんも天野さんも、どうやら体育の授業でした事があるだけみたいだった。

「頑張ろうね、はぴあちゃん」

「ん」

元気な葵さんに、天野さんは小さく頷く。二人共やる気満々だ。

もうコートに入って軽く準備体操をしている。俺もコートに入って適当な位置につく。

そこでふと気付いた事があった。さっきは説明無しでいきなりだったし、自分の番が終わっても天野さんの心配などでそこまで気にしなかったけど、こういうのはやっぱり言っておいた方がいいだろう。両腕を大きく回している二人に声を掛ける。

「あの」

「ん？ どうしたの進くん？」

「あ、いえ。その、ちょっと気になったものですから……」

「？」

俺の主語を抜かした言い方に、葵さんは首を傾げる。やっぱり言いにくいけど、気付いたからにはちゃんと言った方がいいか。決意して口を開く。

「その……大丈夫なんですか？ ス、スカートで……」
なんとか言えた。

「え？ ……ああ、うん。大丈夫だよ。ほら」

葵さんはそう言っていていきなりスカートの裾を持ち上げた。

「ぶっ！ なっ、葵さんっ！」

俺は素早く顔を逸らす。

「ふふっ、そんなに心配しなくても大丈夫だよー。ほら、見てみて」
「見……！ む、無理です！ できません！ 何言ってるんですかっ！」

「もう、だから大丈夫だってばー。……進くんって照れ屋さんなんだねっ」

「ち、違いますっ。そんなんじゃないやありません！」

「あはは、進くんかわいいー」

「っっっ！」

とうとう耐えきれなくなっただけ葵さんから完全に背中を向ける。俺男なのに。かわいいって……まあ、ちょっとだけ嬉しいかもだけど……。

「……スパッツ」

「へ？」

天野さんが背中を向けた俺の制服の袖をクイッと引っ張って、呟くように言った。

俺はおそろおそろ振り返って視線を葵さんの方へ戻す。……うん、確かにスパッツだ。

「ねっ？ これなら見えても平気だよっ」

葵さんが摘まんでいたスカートの裾を離すと、紺色のスパッツがスカートの中に隠れた。

「……まったく、驚かせないでください。まったくもう……」

「ふふっ。うん、びっくりさせてごめんね、進くん」

「ま、まったくです」

「ふふっ」

真っ赤になってそっぽを向いた俺に、葵さんは笑みを漏らす。

「……」

クイっ。もう一度天野さんが俺の制服の袖を引っ張ってきた。「

あ、はい。何ですか？」と、天野さんを見る。

「……穿いてない……」

「え？」

「どうすればいい？」

制服の袖を掴んだまま、身長差で自然と見上げる形になる天野さんが上目づかいで聞いてきた。

えっと……それはつまりその、そういう事、だよな。……うーん、どうすればいいって聞かれても、俺、スパッツなんて持ってないし。誰かに借りるにしても……いや、そもそもスパッツは借りられる物なんだろうか？　かと言って、このまま始めたら天野さんのが、その、見えちゃう……かもだし。うーん、どうしよう……？

「あーっと……」

「……」

うう、お願いですから、そんなに見つめないで。

うーん、うーん——あ、そうだ！

天野さんの熱視線を受けながら考えていると、一つの考えが浮かんできた。

「あ、あの。ちょっとだけ離してくれますか」

俺の制服の袖を掴んでいた天野さんに手を離してもらおうよう声を掛けると、俺はブレザーを脱いで天野さんに差し出す。

「？」

「あの、これ。腰に巻いてみたらどうかなって思ってた……その、逆に動きにくいかもですけど……」

それでも、見えてしまうよりは良いだろうと考えた結果だ。それに、運動するなら上着は脱いだ方が動きやすいし、丁度良いとも思ったからだ。

「……汚れるかも」

「それなら気にしませんよ。ここは体育館ですし、そんなには汚れないでしょうし。もし汚れたとしても、パパッと掃えば大丈夫ですよ」

「……ありがとう」

ブレザーを差し出した俺に天野さんは軽く頭を下げると、受け取ったブレザーを腰に巻こうとして、手が止まった。どう巻けばいいのか悩んでいる様子だ。

「はぴあちゃん、巻いてあげる。貸してみて」

悩んでいる天野さんに、葵さんが手を差し延べる。その様子は仲の良い姉妹みたいだ。

「これでよし！ はぴあちゃん、きつくない？」

「ん、大丈夫」

腰にブレザーを巻いて、ちょっとした防壁を身に付けた天野さんが位置につく。葵さんも天野さんの右隣りに位置づく。俺は二人の後ろに位置をとった。上から見ると逆三角形の形に見えるだろう。

「ふむ、準備はできたようじゃな。では、始めるとするか」

バレー部キャプテンの声を合図に、3対3のバレーボール対決の幕が上がった。

葵さんの手を見る。その手には、「色々と勉強になった。礼を言うぞ。ささ、これを持っていくがよい」とバレー部キャプテンから渡された封筒が握られていた。

俺は、そんな葵さんに若干の尊敬を込めて、数分前の感想を伝える事にした。

「葵さんって、運動得意なんですね。俺なんて、ほとんど見てるだけでした」

「そ、そうかな？ そんな事ないと思うけど……。えへへ、なんか

照れちゃうよ」

葵さんの頬っぺたがさくらんぼみたいに紅くなる。

葵さんは謙遜しているが、実際、誰が観ても葵さんは大活躍だったと思うだろう。

素早くボールの落下点に回り込む反応の良さ。腕を上手く使って勢いを吸収し、味方に繋げるボールタッチ。的確に相手の隙を衝いたスパイク。どれをとっても相手のバレー部員と同等か、それ以上だったように思う。

運動が苦手そうな天野さんも、小さい身体ながらに一生懸命頑張っていた。

それに比べて俺なんか、飛んできたボールに咄嗟に足が出て審判をしていたバレー部員に注意を受けたり、上手くトスを上げられなかったりで全然役に立てなかった。唯一俺ができた事と言えば、ボールの下を拳で思いつ切り打ち上げて、空気抵抗を利用してボールを揺らして落とすという天井サーブくらいだった。

まあ、サッカー以外のスポーツなんて触れた程度しかした事ないからな。仕方ないと言えば仕方ないはずだ、うん。……でも、葵さんも天野さんも、俺と似たようなものなんだよな。そう考えると、やっぱり葵さんは運動神経が良いのだと思う。俺が悪いだけなのかもしれないけど……軽く凹む。

「あ、次。次はどこかなー？」

照れ隠しのつもりなのだろう。葵さんはワザとらしく言うと、封筒の封を切って、入っていたメモを取り出した。

☆☆☆

第3体育館のステージ裏。同じ体育館を使っている他の部活——新体操部やチアリーディング部——に配慮して幕が下ろされている場所で、演劇部が演技の練習していた。その他に、舞台裏で筋トレや発声練習をしている人もいる。体験入部に来ている一年生達は皆

小さな台本——と言っても、薄い数ページ程度のもの——を手にとって、集まっていた。なにやら担当する役を決めているみたいだ。

「楽しかったねー」

「だねー」

その一年生達の中から、いくつかのグループが台本を手にはステージを出て行った。もう既に演劇部の体験入部を終えて帰るところらしい。渡された台本は記念に貰えるようだ。

「はあい、来てくれてありがとうございます。これ君達の方だよ。体験が終わったら、それえ、今日の思い出として家に持って帰って、大事にしてくれると嬉しいなあ」

演劇部のポツチャリした優しそうな男の人が、新しく来た俺達を見つけて台本を渡してくれる。

「あ、ありがとうございます。あの、私達お助け部の体験入部でここに来たんですけど、何をしたらいいでしょうか？」

「ああ、君達か。うん、御園さんから話は聞いてるよ。他の部を廻ってお願いを聞いているんだよね。とても彼女達——お助け部らしい体験入部だよ。ううん、きっと彼女達にしか出来ないんじゃないかな。とても素晴らしいとぼくは思うよ。話を聞いてすぐOKしちゃったあ」

男の人は心からそう思っている笑顔で先輩達の事を話してくれた。他の部でも思ったけど、先輩達はいろんな人達に慕われているみたいだ。さっきのバレー部でも、「あやつらには世話になったから。う。これくらいの事ならおやすい御用じゃ。それに、まだまだ未熟な我らには多様な経験が必要故、これも精進よ」とキャプテンの人が言っていた。

もしかしたら先輩達は、お助け部として沢山の人達の為に学園中を奔走していたのかもしれない。自分の事で精一杯で、誰かにして貰うばかりの俺には、想像する事も出来ないくらいに……。

「——って、ごめんごめん、話が逸れちゃったねえ。君達もお、他の体験入部に来た子達と同じように、その台本に書いてある役を各

々決めてから、決めた自分の役になりきって台詞を喋ってもらおう。
それだけだよお」

「わぁ、なんかおもしろそう！ さっそく役を決めようよっ」

葵さんが台本を開いて、天野さんに「はぴあちゃんは何やりたい？」と尋ねる。俺も台本を開いてどんな役があるのかチェックする。
赤ずきん・お婆さん・オオカミ——ふむ。どうやら『赤ずきん』のお話らしい。童話は絵本でしか読んだ事がないから、こうして文字だけで見るとちょっと新鮮な気持ちになる。

「ロツミ——オッ！」

「ジュリエエ——ット！」

「もう離さない！」そんなイメージが浮かんでくるような声がしたので台本から顔を上げると、男同士で——あくまで男同士で、まるで、愛し合う二人がするような熱い抱擁を交わしている光景が目に入った。

……どうやら、台本にはいくつか種類があるらしい。あれは——まあ聞いただけで分かるな。

「凄いねー、あの二人。迫真の演技だよ」

「うんうん。是非是非、演劇部に欲しいぞお」

葵さんとポツチャリした優しそうな男の人が、抱き合っている二人を見て感心の声を上げた。

いや……まあ……確かに迫力はあるよね。うん、凄く。

「……………」

ん？ 何だ。天野さんが葵さんに向かって両手をいっぱいに広げ出した。葵さんも不思議そうに、そんな天野さんを見つめている。

「……あっおーい……！」

両手を広げた天野さんが、おそらく——今までよりも僅かに声量が上がったような気がする——大きな声で、葵さんの名前を呼んだ。
……えっと、天野さん？

天野さんのあまりにも突拍子の無い行動に可愛さを覚えつつも、俺は首を傾げてしまう。多分あそこで抱き合っている二人の真似な

ぐミサイルになって宇宙の彼方まで飛んで行きたい。それでそのまま宇宙に輝く一粒の星になりたい。さらにできれば赤い彗星と呼ばれてみたいいいー！

恥ずかしさが衝動となって、俺は駆け出した。そして――
シャーッ。

ステージの赤いカーテンを引っ張り出して、姿を隠すべく、くるくるとカーテンに包まった。

「ふわぁーん」

カーテンに包まった姿で、俺は男らしくない情けない声を上げた。
「う、えぐ……」

「き、気にしないで進くん。あ、あれは……そう、演技だったんだよね……？　だ、だったら気にする事ないよ。みんな分かってるから、ね。ほら、ど、どんまい！」

葵さんが、恥ずかしさのあまり泣き出してしまった俺を懸命に励ましてくれる。

「う、うう……」

恥ずかしさと情けなさが混ざり合い、それらはより深い羞恥となつて、体育館を飛び出して廊下の階段で体育座りになったまま顔を上げる事が出来ない俺を支配する。

「……どんまい」

天野さんの小さな手が、そっと俺の頭を撫でた。

ううー、天野さん……それ、追い打ちです……。

まだしばらく、俺は恥ずかしさを忘れられそうになかった。

☆☆☆

なんとか泣き止んだ俺は、半ば自棄になって次のミッション、司書部の『図書室で本の整理』、科学部の『化学実験室でカエル（体験入部で使う解剖実験の）の管理と、準備室の掃除』の二つをクリアしたところで、ようやく落ち着きを取り戻した。

体験入部ラストまでのお話 バレー部へ5つ目〈&演劇部へ6つ目〉（後書き）

このお話の後、家庭部へと続きます。

にしても、7つ目でやっとお助け部らしいミッションが出来た気が……まあ、あまり深く気にしないでくださいw

一緒にアップしたTVゲーム愛好会編もよろしくです（＾Ｏ＾）／
エピソードも忘れずに読んでくれたら嬉しい。

三歩目 変わる為に出来る事（前書き）

三話目です（＊＾―＾＊）

えと、なんと言いますか、出だしでこんな事言っちゃ駄目なんですけど、途中で投げ出されると悲しいので、先に言っておこうと思います。

この三歩目は非常にバランスが悪いです。

所々に無理やり感があると思われます。読みにくいかもしれません。無理にページ数に収めたのもおかしいところを創ってしまいました（@―@）

ですが、それでも僕の伝えたい事を読み取って頂けたら、これに勝る事はありません。

最後にエピローグを用意しております。

出来る事なら、そちらの方も読んで頂けたらと思っています。

それでは、最後までお付き合いくださる事、お願い申し上げますで

すm（―）m

三歩目 変わる為に出来る事

「お、来たな」

お助けベア―と書かれたプレートの下で扉を開けた俺達に、部室の中から声がかけられた。

「はい。もう放課後が待ち遠しくて、走って来ちゃいました」

お日様の光を浴びた向日葵のような髪を青いリボンで後ろに纏めた女の子――葵さんが、言葉通りの満面の笑顔を浮かべながら、部屋の中からかけられた声に元気良く返事する。

「……ん、楽しみにしてた」

その葵さんの隣で、昨日一緒にお助け部の体験入部をした小さな女の子――天野さんも、部屋の中に居る人物に言葉を返した。

天野さんは入学式の日に迷ってしまった俺を助けてくれたもう一人の女の子。学園で会えたら改めてお礼を言おうと思っていたけど、昨日やっと言えて嬉しかった。なにより、葵さんの小さい頃に引越してしまった友達だったみたいで、再開した時の葵さんの凄く嬉しそうな表情は、しばらく俺の胸に残りそうだ。

俺達に声をかけたこの部屋の主――お助け部の部長である千藤先輩は、上座に位置する部長席の前に立っていた。

「ふふ、そうか」

「皆さんが来てくれて、凄く嬉しいです」

葵さんの元気な返事と天野さんの言葉に、嬉しそうに千藤先輩が微笑む。その隣で御園先輩も柔らかな微笑みで俺達を迎えてくれた。

「あの、これ……」

葵さんが持っていた入部届けを先輩達に差し出す。天野さんも俺も、葵さんと同じように入部届けを先輩達に差し出した。

「……本当にいいのか？　もしかしたら、退屈かも知れないぞ？」

そう言う口とは別に、千藤先輩の目は「そんなことはさせないけどな」と自信満々に見える。

「はいっ、絶対に大丈夫です！」

葵さんが俺達を代表して先輩達に答えてくれた。

「ふふっ、そうか」

俺達が差し出した入部届けを千藤先輩はそっと受け取って、御園先輩と微笑みを交わす。

「――うむ！ では改めて自己紹介というわけではないか。あたしはお助け部部长、千藤 凜。よろしく頼む！」

「御園 水鳥と言います」。みなさんとたくさん仲良くなりたいですっ。これから、よろしくお願いしますね」

「はい、よろしくお願いしますっ！」

「えと、こちらこそ、よろしくお願いします！」

「……よろしく、お願いします」

先輩達の優しい笑顔に、俺達は新しい事に対する期待に満ちた声で応えた。

――たった今入部届けを出したばかりだけど、こうして改めて先輩達と挨拶をしてみte思った。

これからここで、少しずつでもいい、たくさん笑えるようになればたら良いな、と。

「よし！ では早速、新・お助け部の記念すべき最初の活動を開始する！」

部長席の前に立って千藤先輩が大きく口を開くと、凜とした声が部室内に広がった。その声に皆が耳を傾ける。

「これから皆には、学園の各階にある掲示板の横にへコレ」を設置してきてもらいたい」

そう言って部長席の後ろに回り込んだ千藤先輩が机の下から取り出したのは、四角い箱だった。

「コレはへお助け箱」と言ってな。あたしと水鳥が開発した、お助け部の活動を支える為の重要アイテムなのだ！」

「重要アイテム……！ なんだかすごそうだね、はぴあちゃん」
「ん」

重要アイテムという言葉の響きに、わくわくといった感じの葵さんに天野さんも頷く。

「ふっふっふ、そうだろうそうだろう。なにせ、重要アイテムだからな」

重要のところを強調して、もう一度千藤先輩が言った。

「このお助け箱はですね、学園の皆さんに困っている事や悩んでいる事などを、こちらに用意した用紙に書いて頂いて箱に入れてもらおうというものなんですよ」

千藤先輩の隣に移動した御園先輩が、胸の辺りに用紙を掲げて説明してくれる。

「その通りだ、水鳥。その紙を昼休みや放課後など時間のある時に回収して、お助け部の活動目的である、〈困っている人の力になる〉というわけだ」

……ふむ、なるほど。確かに掲示板の横なら人目にもつくだろうし、各階に設置することでたくさんの人にお助け部の存在をより近くに感じてもらえる。それに箱には鍵が付いているみたいだし、人に言いづらい事でも誰かの悪戯で見られるという心配も無さそうだ。「――というわけで、さっそく行動開始だ！」

そう言った千藤先輩からはお助け箱を、御園先輩からは穴を通して紐で括られたハガキ大の用紙（厚さからして50枚程度の薄い束）を渡される。

「よし、皆持ったな。それじゃあ行くぞ」

「あ、凜ちゃん」

御園先輩が歩きだそうとした千藤先輩を呼び止める。

「ん？　なんだ水鳥」

「誰が残っていなくても大丈夫でしょうか？」

「ん、そうだな。もしかしたら、誰かが来るかもしれんしな。ふむ

……では、すまないが残ってくれるか水鳥」

「はい、お留守番は任せてください！」

御園先輩が腕を折り曲げて、安心できる声で留守を預かってくれ

た。

「うむ、では行ってくる」

「行ってきますね、御園先輩っ」

「……行ってきます」

「あ、えと……行ってきます、です」

「はい、行ってらっしゃい」

手を振る御園先輩に見送られて部室を出た俺達は、お助け箱と用紙を抱えて部室棟を歩く。

「お助け部って、千藤先輩と御園先輩二人だけなんですか？」

昨日体験入部が終わった後に、メイドクラブで貰ったお土産のケーキを食べながらお助け部について先輩達から聞いた事とは別に、葵さんが前を歩く千藤先輩に訊ねる。

「ああ、そうだ。お助け部はあたしと水鳥が去年創った部活だからな」

「そうなんですか？ 自分達で新しく部活を創るなんて、凄いですね」

「いや、そうでもないぞ。この学園はわりと何でもアリだからな。申請書を出しさえすれば、誰でもどんな部活でもオーケーだそうだよ。まあ、そのおかげでよく分からない部活も多いんだけどな」

そう言って、千藤先輩は笑う。

まあ確かにリストを見てもよく分からないやつが多かったな。思い出しながら俺は思う。

「……あの、千藤先輩はどうしてお助け部を創ろうと思ったんですか？」

葵さんと先輩の話聞いていた俺は、ふと、何となくそう思ったので訊いてみた。

「そうだな……んーまあ何だ。それについては、いつか機会があっ

たら……な」

訊いてはいけない事だったのだろうか？ 千藤先輩は前を向いたまま言いづらそうに言葉を嚥んだ。

「ああそうだ、あたしの事は凜でいいぞ。その方が早く仲良くなれる気がするからな」

誤魔化すように先輩が振り返って、後ろを歩く俺達新人部員3人に笑いかける。

その聞いた事のある言葉に、俺は葵さんを見た。葵さんも俺の方を見ていた。

「ん？ どうした？」

「ああ、いえ……その、葵さんと初めて会った時にも同じ事を言われたので……」

「ほう、そうなのか。なら丁度いい、これからはお互い名前で呼び合うようにしよう。もちろん水鳥の事もだ。きつと喜ぶだろうからな」

先輩が提案すると、俺を見ていた葵さんが何故か微笑んだ。

っ……！ その微笑みを見た瞬間、急に恥ずかしくなって俺は葵さんから目を逸らす。

「……」

と、今度は天野さんと目が合ってしまった。俺は照れながら慌てて窓の外に目をやった。

今日の空も澄み渡るほどの青色だった。

最後の階段を下りて部室棟から出る。そのまま真っ直ぐ校舎に続く道を歩いて行く。

少し歩いたら校舎に着いた。玄関を通過って、まずは1階の掲示板に向かう。

「よし、この机にまず一つだな」

掲示板の前にはパイプ足の机が一つ置かれていた。その机の上に凜先輩がお助け箱と用紙を置く。

「今日の昼休みに用意しておいた。他の階も同じように机があるか

らその上に置いてくれ。ああ、ちゃんと教師の許可は得ているから安心してくれていいぞ」

先輩の威厳を魅せつけてくれる微笑みを、凜先輩は俺達に向ける。準備が良いな。さすがに『先輩』は伊達じゃないという事か……！

「じゃこの調子で次に行くか」

2階に上がり、1階と同じように置かれていた机の上に、今度は天野さんがお助け箱と用紙を置く。3階に上がって葵さん。4階の机には俺が。それぞれ抱えていたお助け箱と用紙を置いた。

「よし、これでお助け箱の設置は完了だな。部室に戻るか」

「あ、おかえりなさいー皆さん。最初のお仕事はどうでしたかー？」

「無事終わりましたっ」

お助け部としての初めての活動を終えて部室に戻ってきた俺達。

水鳥先輩の質問に、元氣いっぱい葵さんが答えた。

「うふふ、お疲れさまですー。では凜ちゃん……」

水鳥先輩が凜先輩を見る。

「ああ。という訳で、明日から本格的に活動開始だ！ 皆、気合を入れていくぞ！」

「はいー！ えいえいおー！ ですー」

「おー！」 「……おー……！」

「お、おー……！」

凜先輩が勢いよく腕を突き上げる。水鳥先輩、葵さんと天野さんも手を挙げる。仕方なく、恥ずかしがりながら俺も小さく手を挙げた。

「それでは、記念すべき新・お助け部最初のミッションコンプリートを祝して、君達にコレを授けよう！」

ミッションコンプリートって言っても、ただ箱を置きに行っただけの気もするが……。

「見よ、これこそ我がお助け部一員の証。その名も、お助けバッチだっ！」

じゃーん！ と自慢するように、凜先輩が水鳥先輩の用意してくれたバッチを掲げる。

「これさえ付ければあなたもお助け部の一員に。『今なら特別プライス、あなたの笑顔を下さいな』です」

両手を可愛らしく合わせて、水鳥先輩が言う。

……なんか通販の宣伝みたいになってます、水鳥先輩。

「さあ、受け取ってくれ」

凜先輩が俺達新入部員に、一人ずつ順番にバッチを手渡してくれる。

「わあ、ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

「ありがとうございます」

俺達はバッチを受け取る。バッチにはおたすけベアーの顔がプリントされていた。

「はぴあちゃん、つけてあげる」

「ん」

天野さんにバッチを付けてあげる葵さん。

「えへへ。可愛いよ、はぴあちゃん」

「……ん」

葵さんに褒められて、天野さんは頬を赤くして照れる。

うむ、確かに天野さんは可愛い。けど……男の俺が付けたらどうなるんだろう？

「進くんにもつけてあげる」

さすがに似合わないなと思っていると、葵さんがこちらに寄って来た。

「えっ。い、いえっ、俺は遠慮します」

「そんなこと言わずに、ねっ」

「うぐ、いやでもその……」

「はい、バッチ貸して」

「あっ」

そう言って俺からバッチを取り上げる葵さん。

「じっとしててね」

葵さんが俺の胸にバッチを付けようとする。葵さんの髪の毛が俺の肩に触れた。

「っ」

体が硬直する。

う、動けない。それに……恥ずかしい。

「これでよしと。可愛いよ、進くんっ」

褒めてくれる葵さんから視線を逸らして、俺は人差し指で頬を掻く。だから俺は男なのに……。

「ふっ」「うふふ」

俺達と同じバッチを付けた先輩達が、俺達を見て優しく笑っていた。

バッチを貰ってから先輩達と少し活動について話をした後、初日と言う事で今日はこれで解散になった。

先輩達に挨拶してからお助けベアーを出た俺は、葵さんと天野さんと玄関に向かい、靴を履き替えて玄関から出る。

「うー、なんかちょっと緊張してきたよ。私に人助けなんてできるかな……」

「葵さんなら大丈夫だと思いますけど」

実際に困っている俺を助けてくれたからな。

「そ、そうかな。てへへ」

照れた葵さんがはにかむ。

校門に着くと、天野さんが何も言わずに俺達が帰る方向とは逆の方へ歩いて行く。

「あれ？ 確かはぴあちゃんのお家ってこっちじゃなかったっけ？」
一人で歩いて行く天野さんに、幼馴染みの葵さんが訊ねる。

「……用事があるから……」

「そっか、じゃあまた明日だね。ばいばいはぴあちゃん」

振り向いて、手を振る葵さんに頷いた後、天野さんは一瞬だけ俺を見た。

「？」

何だろう……？ ……あつ、もしかして挨拶してないからかな？

俺がそう思って口を開こうとする前に、天野さんは振り返る。そのまま声をかける間もなく歩いて行ってしまった。

あつ……。

「それじゃあ、私達も帰ろっか」

「え、あ……はい」

天野さんを見送っていた葵さんが歩き出す。気になって天野さんの背中を見ていた俺も、振り返って葵さんと一緒に帰り道を歩き出した。

「うーん。さすがにきのう置いたばかりだもんね、まだ一つも無いや」

お昼ご飯を食べた後の昼休み。昨日設置したお助け箱を、数字で0903と番号を合わせ鍵を開けた《見回り当番》の葵さんは、中を確認して呟いた。葵さんの隣で俺も箱を見てみる。空っぽだ。

昨日の話で、《お助け箱の確認は曜日毎に当番》という事になったのだが、葵さんと一緒にお昼を食べる時に話題になった所為か、やっぱり気になって俺も見に来てしまった。

……ふむ。上の何枚かの用紙がズレているから、誰かが興味を持ってはくれたんだろうけど。箱が空っぽって事は、さすがにすぐには書きづらいのかもしれない。

「んー、じゃあ次は1階の方を見に行ってみようよ。もしかしたらはぴあちゃんもそっちに居るかも」

葵さんの考えに俺は頷く。

さっき天野さんも一緒に食べようと葵さんと誘いに1―Aまで行ったのだが、食堂派なのか購買派なのか、もう教室に天野さんは居ないみたいだった。

俺と葵さんは、鍵をかけ直して1階に続く階段を下りる。

「うーん……はぴあちゃん居ないね」

一階にも天野さんは来ていないようだった。まだお昼を食べているのかもしれない。ご飯はのんびり美味しく食べるのが一番だからな。

「それじゃあ、どうしょつか？ このまま私達だけで3階と4階に行ってみる？」

お助け箱の中が空っぽなのを確認し鍵をかけた俺に、葵さんが言う。

「うーん。まあ強制ではないですし、先に見に行くだけ見に行っただ方がいいかもです」

「そう、だね。うん。じゃあ、行こっか」

葵さん、やっぱり天野さんと一緒に居たいのかな。ちょっと寂しそうだ。

天野さん上に居るといいな。そう思いながら、俺は葵さんと階段まで戻る。

「おっ、葵に進ではないか」

「あっ、先輩。こんにちはっ」

「あ、こ、こんにちはです」

「はい。葵さんに進さん、こんにちはです」

2階に上がった階段のところで、3階から降りてきた先輩達とばったり出くわした。

葵さんと一緒に挨拶すると、凜先輩は軽く手を挙げ、水鳥先輩は笑顔を返してくれる。

「もしかして、見てきてくれたのか？」

「あ、はい。けど空っぽでした」

「そうか……いや、あたし達の方もだ」

凜先輩は首を横に振って、何も無かった事を示す。

「えっ、凜先輩見てくれたんですか？　今日は私じゃ……」

「ん、まあそうなんだがな。やっぱり気になってしまっただけで、先にきてしまった。せつかく当番制に決めたというのに、すまないな」

「うふふ、それだけではありませんよ。皆さんは一年生ですから、上級生の居る階にはまだ行きづらいだろう、って凜ちゃんがおっしゃってました」

「んなっ……おい水鳥、それは言わなくても……！」

「そうなんですか？　凜先輩っ、ありがとうございます」

赤くなって水鳥先輩に詰め寄った凜先輩に、葵さんが笑顔でお礼を言う。

「……っ！　あ、ああ。まあ、なんだ、先輩だからな。当然だ」

「うふふ、凜ちゃん真っ赤です」

「う、うるさいぞ」

照れを隠そうと腰に手を当てそっぽを向いた凜先輩は、水鳥先輩に指摘されてさらに赤くなった。

「……ところで、はぴあさんはご一緒では？」

俺達と居ない天野さんを気にして、水鳥先輩が訊いてくる。

「それが教室に行ってみたんですけど居なくて。何か用事があるんだと思います」

「ふむ、そうか。まあ、時間がある時だけでいいからな。君達も毎日見る必要はないぞ」

凜先輩が言う。

「あ、いえ。昨日入部したばかりとはいえ自分達もお助け部の一員ですから……」

胸ポケットに入れてあるお助けバッチを思い浮かべながら、俺は答える。隣で葵さんも頷いてくれた。

「……ふ。君達は真面目なんだな」

「い、いえ。入部したからには、やっぱり、その……」

「うふふ。嬉しいですけど、無理はしなくてもいいですよ。見るだけとはいえ、さすがに毎日は手間でしようから。それに、その為のお当番ですからね」

まあ、確かにそうなんだけど。そう言われると余計にやる気が出てしまうじゃないかっ。

「……ふふっ」

急に凜先輩が笑い出した。どうしたんだろう？

「ああ、いや。去年はあたしと水鳥の二人だけだったからな。なんだか不思議だなと思ったら、ついな」

「……そうですね。私もきつと凜ちゃんと同じ気持ちです。くすぐったいような、嬉しいような、不思議な気持ちです……」

先輩達がどんな気持ちなのかはつきりとは分からないが、なんだろうな……なんだか温かい気持ちが出来てきた。

「……それじゃ、あたし達はそろそろ戻るとするか」

「はい、凜ちゃん。それでは、葵さん、進さん、また放課後に」

「あ、はい」

微笑む凜先輩と手を振る水鳥先輩は階段を上って行った。

「私達はどうしょっか？ 戻ろっか？」

先輩達が見えなくなってから、葵さんが俺に意見を求める。

「そう、ですね。先輩達が見てくれたんなら、もうする事も無いでしょうし。また放課後ですね」

「うん、放課後ならばぴあちゃんも居るだろうしね。戻ろっか」

今日はお助け部で特に何もする事が無く、先輩達とまったり話をするだけで終わった。

活動するの、結構楽しみにしてたんだけど……まあ、皆の話を聞いているだけでも楽しかったからいいか。

昨日と同じように三人一緒に部室を出て、俺達は歩く。

「はぴあちゃん、今日は一緒に帰れる？」

「……今日も用事があるから……」

葵さんが天野さんに訊ねると、天野さんは小さく首を振って断った。

「え……あ、そ、そっか。なら仕方ないね」

「……また明日」

「うんっ。またね、はぴあちゃん」

葵さんにそう言うと、天野さんは去って行く。

「……………」

葵さんがどこか落ち込んだ表情で、もう見えなくなった天野さんの背中を見ていた。

「た、偶々ですよっ。もしかしたらバイトでもしてるのかもしれないませんし……」

「う、うん。そ、そうだよね、偶々だよね。えへへ」

そう、つくった笑顔を葵さんは浮かべる。

「……あ、明日、また明日ですよっ」

俺は、そんな元気の無い笑顔を浮かべる葵さんに、何の根拠もない言葉を掛ける事しか出来なかった。

「今日も相談事は無しか……」

凜先輩が空っぽのお助け箱を見て唸り声を上げる。

「でも、皆さんが困っていないというのは嬉しい事ですよ」

「まあな」

確かに誰も相談事を持ってこないというのは良い事なんだろう。でも、お助け箱を設置してから一週間以上経ったわけだし、そろそろ一つくらいいてもいい頃だと思う。

「ふむ……仕方ない。それならパトロールにでも行くか」

「パトロールですか？」

「うむ。学園で困ってる人を見かけたら、全力でその人の力になる！
なにも待っているだけじゃないという事だ」

パトロールか……うん、それはいいかもしれないな。待っているだけじゃ、その時その瞬間に困っている人がいたら、とても助ける事なんて出来ないだろうし……本当に誰かの力になりたいのなら、自分から動かないとそれを叶える事は、多分……出来ないだろう。

「では早速出発だ」

皆で部室を出て、部室の扉に描かれているおたすけベアーのお腹に、「お出かけ中クマ〜」という紙を張り付ける。そうしてから、部室棟から校舎へと移動を開始する。

お助け箱を置きに行った時と違い、今日は水鳥先輩も一緒だ。これで改めて凜先輩の言っていた、新・お助け部の記念すべき最初の活動という感じがする。

「さて、まずは一通り回ってみるか」

凜先輩を先頭に校舎を歩く。

「あ……は、はぴあちゃん、一緒に頑張ろうね」

「……ん」

葵さんが天野さんに話しかける。

その様子を見て、俺は違和感を覚えた。

何だろう、葵さんの元気がいつもと違う。どこかぎこちないような……まるで照明の灯りが普段より一段落ちたような明るさを感じる。

「はぴあちゃん、今日は……一緒に帰れるかな？」

一瞬どうしようかと言葉をとぎらせた葵さんだが、最後まで言い切る。

「……今日も……」

「あ……そ、そっか……」

首を振られた葵さんが何でも無い風に前を見るが、その言葉と表情は、先程までより明らかに下を向いていた。

……………。

お助け部に入部してからというものの、部活が終わった後、葵さん
はいつも「一緒に帰ろう」と天野さんを誘っている。

今まで離れていた友達が帰って来たんだ、葵さんの嬉しいという
気持ちがよく分かる。

でも……

もう一度落ち込んでいる葵さんを見る。

——やっぱり、一緒に帰れないだけとはいえ、葵さんにとってそ
れは寂しい事なのだろうか。断られた葵さんの表情を見る度にそう
思う。

「みなさ〜ん、どうかされたのですか〜？」

距離が開いてしまった俺達を心配して、水鳥先輩が後ろを振り返
って声をかけてくれる。

「あ……いえ、すみません……」

「葵、どこか調子でも悪いのか？」

駆け寄ってきた凜先輩が、元気の無くなった様子の葵さんを気遣
う。

「い、いえっ。そんなことは……」

少しわざとらしく首を振ってみせる葵さんだが、やはり元気が無
いのが丸分かりだ。

「……そうか。無理はするなよ。何か悩み事があるのなら、いつで
も相談に乗るぞ？」

「あ……ありがとうございます。でも大丈夫ですから……。んと、
パトロールってわくわくしますよね。困ってる人どこかな〜……」

無理やりな笑顔を浮かべ、葵さんは一人先に歩き出す。

「葵さん、どうかされたのでしょうか〜……？」

「……………」

心配そうに呟く水鳥先輩。その呟きを聞いてかは分からないが、
葵さんを見つめる天野さんが小さく唇を囁んだように見えた。

「……………」

葵さんが俯きがちに道を歩く。

「あ……」

話しかけようとする俺の口は、小さく開くだけでそこから声を出す事が出来ない。

俺はそのまま何も話せずに葵さんの隣を歩く。

……俺はどうすればいいんだろう。

葵さんはこっちに来てからの初めての友達だ。こんな、まだ何も取り戻していない、失ったままの俺と一緒に居てくれる。

葵さんと一緒に居ると、例えその時だけだとしても、俺は笑顔になれるような気がする。

葵さんの太陽みたいな温かい笑顔を向けてくれるだけで、俺は嬉しいって思える。

だから、いつも元気な葵さんが落ち込んでいるのを見ると、胸の辺りがチクチクと痛む。

もしかしたら俺は、葵さんの力になりたいのかもしれない。中学の頃、皆が俺を励ましてくれたのと同じように……。

「……きよ、今日も困ってる人居なかったね。ちょっと残念かな。

あ、でもその方がいい事だね、えへへ……」

天野さんと校門で別れてからずっと黙っていた葵さんが、ふいに明るい声を出した。元氣のない笑みを浮かべて。

「……葵さん。その……」

「……………」

「えと……」

まだうまく考えが纏まっておらず、俺の言葉はそこで途切れる。

その所為で、葵さんはまた前を向いて俯いてしまった。

「……………」

「……………」

……何やってるんだ、俺は。葵さんの力になりたいんじゃないのかよ。何か言わないと……。

「あの――」

「……ねえ、進くん。どうしてもはぴあちゃん一緒に帰ってくれないのかな……？」

何か言おうと口を動かす前に、沈んだ声が葵さんの唇から零れた。

「……はぴあちゃん、私の事……嫌いなのかな……」

「……葵さん」

葵さんの瞳に一粒の滴が浮かんできた。

「！　っ違いますよっ！　そんな事……！　だって部活の時は普通に話したり——それに体験入部の時だって、再会したばかりなのにあんなに仲良く——」

「じゃあ、なんでっ！　お家だってこっちのはずなのにっ！　バイトでもしてるのかもしれないけど、それだって……っ！」

「っ！」

突然の葵さんの大きな声に俺は言葉を詰まらせ、僅かに身を仰け反らせてしまう。

自分が大きな声を出した事に驚いたのか、ハッとなった葵さんは口元を押さえて、大きく開かれた瞳で俺を見た。さっき浮かんでいた滴が頬を伝って、葵さんの手を濡らした。

「あ……私……」

葵さんの瞳が大きく揺れる。

「あ……ご、ごめ……っ」

「っ葵さん！」

駆け出す葵さんに、俺はとっさに呼びかける。

だけど、俺の呼びかけを振り切って、葵さんの背中はずっと離れて行く。

「あ……」

伸ばした手を見えなくなった背中に向けたまま、俺はその場に立ち尽くした。

「葵さん……」

アパートの自室に戻ってきた俺は、額を手の甲で押さえながら、床に敷いた布団に寝転がって先程までの事を思い返していた。

「……くっ」

俺は葵さんの力になりたいと思った。なのに……。

人は不安を感じた時、どんな些細な事でもその気持ちを大きくさせる。それがプラスであつてもマイナスであつてもだ。

だから今の葵さんの心は……きっと、苦しさで寂しさで溢れているのだろうと思う。

「……くそ……」

またかよ。また俺はこんな思いをしなくちゃいけないのか。

皆に優しくしてもらっただけしてもらって、自分では何も返す事ができない。

またなのか？ そんな無力な自分を変えたくて、変わりたくてここにきたんじゃないのか？

まだこっちに来て少ししか経ってないかもしれない。俺だって、別にそんなにすぐ変わるなんて思っていなかった。だけど……。

友達の為に力を尽くす事。その想いは——きっと相手の支えになる。自分の弱い心に挫けていた俺を、皆が助けようとしてくれたように。

「……」

考えよう、俺に出来る事を——

「あ、一前くん。お、おはようございます。今日は遅いんですね。いつもは私達の方が後なのに……」

登校時間ギリギリに教室に着いた俺に、叶井さんが挨拶してくれた。

「えっ、ああ、いえ、ちょっと……。その、おはようございます」

「ふん、寝坊でもしたんじゃないの？ そんな眠たそうな眼で、まだ寝てるんじゃない？」

「はは……」

叶井さんとは違う形の挨拶をしてくれた綾瀬さんに苦笑を浮かべて俺は自分の席に着くと、カバンの中から教科書等を取り出して机に仕舞い、空になったカバンを机の横に掛ける。

「はーい、みんなぁ！ 今日も元気ですかぁ？ おっはようございまっす！」

丁度その時、美子先生がいつものように溢れる元気を振る巻いて教室に入ってきた。

「「おっはようございまっす！」」

「ふふっ、みんなの元気な声を聞くと先生も元気が出てきまっす！ という訳で、さっそくHRを始めちゃいますよ」

美子先生は教卓の前に立って出席をとると、今日の予定について話す。

「――はい。それでは、お知らせは以上でっす。みんな、今日の授業も頑張ってくださいね。あ、でもでも、居眠りはいけませんよ。他の先生方に怒られちゃうので気を付けるように」

慌てて人差指を立てて窘めるように言った後、先生は教室を出て行った。クラスメイト達が「はーい」と返事をして、各々授業の準備をし始める。

……えーっと、あれ？ 一時間目はなんだっけ？

クリアファイルに挟んである時間割表を机から出して目をおとす。

「……………」

――葵さん、ちゃんと学園には来てるのだろうか……？

昨日考えてみて特に何か良いアイデアを思いついたわけじゃない。それでも、一緒に登校できたらと思って商店街の噴水の前で待ってみたけど……結局見かけなかった。

先に登校していたという可能性もあるけど、昨日の葵さんの表情を思い出すと、やっぱり一目でいいから朝の中に会っておきたかつ

た。

「——あ、あのっ、一前くんっ」

「ふえ？ あ、はいっ」

時間割をボーッと眺めていた俺は、叶井さんのどこか急かしたような声にハッとなり、顔を上げた。

周りには、俺以外のクラスメイト達が起立していた。

「えっ、あ……」

俺は慌てて椅子を引いて立ち上がる。

——っと、慌てすぎた所為で椅子の後ろ脚が引っ掛かってしまった。

「え、あっ……！ ぐっうっうっ！」

椅子と一緒にバランスを崩した俺は、後ろの席の机に思いっきり後頭部をぶつけて床に倒れてしまう。

「一前くんっ！」

「ちょ、ちよっと……大丈夫なのっ？ 何してるのよアンタ」

「ぐ……うっう」

叶井さんと綾瀬さんが、頭を押さえて痛みを堪えている俺の傍まですべてきてくれた。

「だ……だい……っ」

「そんな……全然大丈夫じゃありませんっ！ 凄い音がしたじゃないですかっ！ すぐ保健室に行かないと……優希ちゃん！」

「……ふう、しょうがないわね——ほら、掴まりなさい」

綾瀬さんと叶井さんが両脇から俺を支えて立たせてくれる。

「っ！ へ、平気……ですから……離し……」

「いいから黙ってなさいっ。ほら行くわよ」

ズキズキする頭をふらつかせ、俺は力無く二人に支えてもらって教室を出る事になった。

すっかり授業が終わってしまった騒がしい教室の扉を潜る。

「一前くんっ！ だ、大丈夫なんですかっ？ もう痛くないですか

っ?」

「えっ……ああ、もう大丈夫です。その、すみませんでした……」

「まったくよ。ビックリさせないでよね」

「はは、すみません……」

ぶつけたところを保健室で診てもらって教室に帰ってきた俺は、
どうやら気にしてくれていたらしい叶井さん達に頭を下げて、席に
座る。

「いつもそんな眠たそうな眼をしてるからよ。……ま、今度からは
気をつけなさいよね」

「……はい。ありがとうございます、綾瀬さん」

「な……べ、別に私は……ふ、ふんっ」

俺がお礼を言うと、綾瀬さんが顔を背けた。もしかして、照れて
いるのだろうか?

「あの、本当にもう大丈夫なんですか……?」

「あ、はい。さっきは、ちよっと考え事をしていただけですので……
……」

「そう、なんですか? でも……」

「もういいじゃない、香苗。本人が大丈夫って言ってるんだし……。
それよりお昼に行きましょう」

「う、うん……でも……」

俺の方を心配そうな眼差しで叶井さんが見てくる。

「本当にもう大丈夫ですから。俺の事は気にせず行ってきてくださ
い」

「ほら行くわよ香苗。早く行かないといい所が無くなっちゃうわよ」
そう言ってもまだ心配そうにしている叶井さんを、綾瀬さ
んが連れて行く。

二人が教室を出て行った後、たんこぶができたところを保健室で
貰ったアイスパックで押さえながら、俺は心の中でもう一度「あり
がとうございます」と、二人に呟いた。

——こうして誰かに心配してもらえるだけで、痛みも辛さも少し

和らいでいくような気がした。

「――それにしても……はぁ」

保健室で少しだけ休むつもりが、半ば強引に寝かされたおかげでもうお昼か。まあ、どうせ痛みで授業に集中できなかったかみだけど。結局何も――

「……葵さん来ないな」

いつもならもうとっくに来てるのに……。保健室から帰ってくる間に入れ違いになったのかな。

「ん……よしっ」

チョコ系のパンが入ったスーパ―の袋と緑茶が入った水筒を手には、俺は席を立つ。

余所のクラスに行くのにはちょっとした抵抗があったが、いつも葵さんに来てもらってるんだ、偶には俺から行かないと悪いからな。自分の教室を出て、1―Cの入口に立った俺は、眼鏡を掛け、教室の中から葵さんの姿を探す。

「……居ないな」

教室の中を隅々まで見渡して見ても、葵さんの姿は見当たらなかった。

……もしかして休んでいるのだろうか？

濡れていた葵さんの瞳が、俺の頭を埋め尽くす。

「……」

俺の声を振り切り、駆けて行った葵さんの背中。

あの後ろ姿は――自分を何かに否定されたと思い込んでしまった背中だった。

そう、まるで少し前までの俺の姿を見ているような……。

「……ちよっと、探して見よう」

「こないだ駅の近くのケーキ屋さんが新装オープンしたみたいなんだけど、良かったら今度一緒に行かない？ お互い部活が休みの日とかにでも」

「うん。優希ちゃんとお出かけ、楽しみ。どんな感じのお店なの？」
結局葵さんは見つからず、適当な場所で一人お昼を食べた俺が教室に戻ってくると、同じく昼食を終えて教室に戻ってきたらしい、綾瀬さんと叶井さんが仲良く会話を楽しんでいた。

そんな二人の話を聞きながら、特に行く処も無い俺は、自分の席に座る。

話をしている二人が一度俺の方を見たが、すぐに話を再開する。

「――でね。そこ、ケーキだけじゃなくて、シュークリームやクレ―プなんかも美味しいらしいのよ。種類も豊富って聞くし……」

「ふふ、そうなんだ。優希ちゃんケーキ好きだもんね。毎日通ったりしちゃいそう」

「さ、さすがに毎日は無理よ。部活もあるし、一人で行ってもつまらないでしょ？ それに、そんな事したら……ふ、太っちゃうじゃない」

「ふふ、そうかも」

窓の外に広がる水色の空を見つめて、俺は考える。

葵さん、やっぱり休みなんだろうか。どこにも居なかったし……。

――葵さんは、俺が久しぶりに『友達』と何気なく言えた大切な存在だ。

まだ出会って一月も経っていないけど、いつも一緒に居るような、自分が素直な自分になれる大切な居場所のような存在。

そんな葵さんに俺が出来る事……いや、そもそも俺なんかにか何か出来るのだろうか？

周りに支えられている事を知らず、知ろうともせず、それに甘えてばかりいた俺に……。

「……………」

「……ちよつと、人が話してる横で何溜め息吐いてるのよ？」

「え？ あ……」

考え込んでいたら知らずに溜め息が出てしまったらしい。綾瀬さんが不機嫌な顔でこちらを睨んでいた。

「どうかしたんですか……？ やっぱり、まだ痛いんじゃない？」
叶井さんが訊いてきた。

「あ、いえ、その……すみません」

いまいち元気が出ず、俺は気弱な答えを二人に返す。
いきなり謝られた事に戸惑い、綾瀬さんと叶井さんは顔を見合わせる。

「……アンタねえ、隣でそんな暗い顔されてると、こっちは気にな
って仕方ないんだけど」

「……すみません」

綾瀬さんのキツイ物言いに、俺は居場所を無くしたかのように席
を立つ。葵さんを通してあの時の事を思い出してしまった所為だろ
うか、そのちょっとした言葉に心が痛んだ。

「優希ちゃん……！」

「……」

二人に頭を下げ、俺はそのまま教室の外へと足を向ける。

「……ちよっと、何勘違いしてるのよ？ 私は話を聞いてあげるっ
て言ってるの」

「……いえ、大丈夫ですから。気にしないでください」

「いいから座りなさいって言ってるの！」

「うわっ！」

歩き出そうとした俺の制服を強引に掴んで、綾瀬さんが俺を無理
やり席に座らせる。

「っ……」

「ったく……今出て行ったところで、戻ってきた時同じ顔してたら
一緒でしょうが！ そんな奴の隣で授業受ける香苗の迷惑も考えな
さいよっ」

「ゆ、優希ちゃん、私は別に……」

「いいから香苗は黙ってなさい。……ほら、早く話なさいよ。少
しくらいなら聞いてあげるから」

「いや、だから大……」

「聞いてあげるって言ってるのっ！」

「……………」

身を乗り出して俺を威圧する綾瀬さんに、「なんでこんな事に……」と思いながらも、俺はさっきとは違う種類の溜め息を一つ零した後、二人に相談に乗ってもらう事にした。

「えと……………」

口を開こうとして、俺は躊躇った。

相談に乗ってもらうとは言ったけど、本当に話してもいいのだろうか？

これは、葵さんと天野さんの二人の問題だ。力になりたいとは思っていても、言ってしまうえば、俺は部外者という事になるのだろう。そんな俺が勝手に他の誰かに言いふらすような真似をしていいとは、到底思えない。

それに、もしかしたら、俺が今話す事で葵さん達が傷付く事になるのかもしれない。そんなのは絶対に嫌だった。

「……………何よ、私達なんかじゃあてにならないって思ってるの？」

「い、いえ、そんな事は……………その、俺の事じゃないですから……………だから、やっぱり……………」

俺は躊躇いがちに二人を見上げた。

「……………そう」

俺が躊躇う理由が伝わったのだろう。

綾瀬さんは少し考えるように眼を閉じた後、こう言葉を続けた。

「……………でも、アンタはその事で悩んでるんでしょ？　つまりアンタの悩みが解決すればその誰かの悩みも解決するって事よね？　だったら安心なさい。アンタから聞いた事は誰にも言わないし、ふざけて適当なアドバイスをする気も無いわ。それに……………さっきも言ったけど、傍でそういう顔してる奴がいると楽しく話も出来ないの。分かったら早く話さない」

「悩み事って、自分の事でも打ち明けにくいものですよね。それが誰かの事なら尚更だと思います……………でも、きっとその誰かは、悩み

に打ち勝つ為の勇気が来てくれるのを待っているのではないでしようか？　だから、その、力になれるのかは分かりませんが、もし良ければ……私達もその勇気の一つにならせてくれませんか？」

「……勇気になる……？」

綾瀬さん、叶井さん……。

なんだろう。二人の言葉が、胸の奥底に響き渡っていく。

「……あ、ありがとうございます……」

だからだろうか、俺は自然と二人にお礼を言っていた。

ホントになんで何だろうか？　涙が溢れてきそうなほどに、その言葉は俺の心に沁みわたった。もしかしたら俺は、感動しているのかも知れないな。

「……ったく、誰かの事じゃなかったの？　なんでアンタがそんな顔してるのよ？」

「はは……自分でもよく分かんないんですけど……なんか……」

やっぱり、あの時の自分と葵さんを重ねてしまっていたのだろうか？　葵さんの頬に伝う涙が見える気がした。

「そ、それでっ、どうしたのよ？」

「……………」

俺は、友達の素敵な、向日葵のような眩い笑顔を思い起こす。

葵さん……俺はあなたの力に――あなたの勇気になりたいと思う。だって、俺は葵さんの友達だから……だから――

「えっ」

放課後。一応葵さんのクラスを覗いてみた後、部活に向かおうと部室棟へ続く道を一人で歩いていたら、ふと数十メートル先、俺の視界にずっと探していた人の姿が入り込んできた。

「葵さんっ」

俺はその姿に向かって駆け出す。

「え……進くん」

眼鏡を掛けて無かったので自信はなかったが、どうやら見間違いじゃなかったみたいだ。葵さんがそこに居た。

「あ……」

「良かった。今日全然姿を見かけなかったので、休みなんじゃないかって思っていました」

「あ、うん……ごめんね」

元氣のない葵さんに、俺は首を振る。

「部活、行きませんか？ 俺も今から行くところなんです」

「……ごめん。今日は、お休みする事にしたんだ……だから……またね」

「え、あの、葵さん？」

「……それじゃあ……進くん、またね」

寂しさを宿した葵さんの瞳が、此処には居たくない、気まずそうに俺の横を駆けて行く。

「あ、葵さんっ……！」

呼びかけるが、葵さんに振り返る気配はない。

「あ……」

……駄目、なのかな……やっぱり俺なんかじゃ誰かの力になる事なんて……。

だんだんと視線が下へと落ちていく。

「……………」

その間に葵さんの足音が遠ざかって行く。

「くっ……」

きつく目を閉じると、もうすっかりと心に焼き付いてしまった葵さんの笑顔が、気持ちを照らしてくれた気がした。

「……そうだ、俺は——」

目を開けた時、俺の足は駆け出していた。

「葵さんっ！」

「えっ、進くん……？」

さっき別れたばかりの俺を、振り返った葵さんが驚いた表情で見つめる。

「進くん、部活はどうしたの……？」

「その、葵さんと、もっとお話したい、なって……」

葵さんに追いついた俺は、乱れた息を整えながら言った。

「だ、駄目ですか？」

「……ううん。そんな事は、ないよ……」

「良かった」

駄目だって言われたらどうしようかと思った。少し安心する。

「……」

「あ、えと……少しゆっくりできる場所ってありますか？」

「えっ、えっと……この近くだとニャンコ公園くらいかな」

「あ、じゃあそこに行きませんか。まだ行った事無いので、どんな所なんですか？」

「うーん、えとね、普通の小さな公園だよ。遊び道具が全部ネコの形をしてるんだ」

「そうなんだ。なんだかのんびりできそうな所ですね。和めそう」

「ふふ」

俺がそう言ったら、葵さんが小さく笑った。

「あ、ここだよ」

葵さんに案内してもらって、俺は大きくニャンコ公園と書かれた横長のネコを通り越し、葵さんと公園の中に入って行く。

「あは、ホントにネコばかりですね」

滑り台、ブランコ、シーソー等の遊具、ベンチやごみ箱まで、ネコでいっぱいだった。

「あ、じゃあとりあえずブランコに座りましょう」

わざわざブランコにせず別にベンチに座っても良かったのだが、

さすがにあのネコベンチには恥ずかしくて座れないと思った。
葵さんと並んでブランコに腰掛ける。

「……………」

「……………」

追いかけてきたのはいいが、何を話そう。

天野さんと葵さんが二人で話をできるように——とは言っても、
いったいどう言えばいいんだろう？ 困った。

「……………」

「あーっと……えーっと………」

……ああもうっ！ 俺は何しに来たんだ。せつかく葵さんが付き合ってくれたのに、このまま黙っていたら葵さんを困らせるだけじゃないかっ！ 何か、でも何て言えば……？

「……あ、あのね」

何て言ったらいいのかとそわそわしている俺を見かねてか、黙ったままの空気に耐えられなくなったのか、葵さんから俺に話しかけてきてくれた。

「この公園ね、小さい頃はぴあちゃんとよく遊びに来てたんだ」

「天野さんと……？」

「うん」

その時の事を懐かしむように、葵さんはゆっくりと話した。

「あの砂場でお城をつくったり、ベンチに座って葉っぱとか集めて作ったお弁当でおままごとをしたり、このブランコでどっちがうまく漕げるか競争したり——」

「……………」

「最初はぴあちゃんブランコ漕げなくて、でも私が教えたらずぐに漕げるようになって……それでね、神社の裏の林に二人で小さなブランコを作ったんだ」

「ブランコ……？」

「うん」

……そうか。きっと葵さんが言っているのは、俺が天野さんと初

めて会った時に、今葵さんがしているような表情で天野さんが座っていた、あのブランコの事なんだろう。

「そのブランコで暗くなるまで遊んで、そしたら、はぴあちゃん私より高く漕げるようになったんだよ」

葵さんが楽しそうに笑う。

——俺は、確信した。今の話を聞いて、この葵さんの素敵なお顔を
を見て、天野さんが葵さんを嫌いになるはずがないと。だから——

「俺、一人だったんです」

「え？」

いきなりの俺の言葉に、葵さんは驚いた表情を見せる。構わずに俺は続ける。

「正確には自分から一人になった、なんですけど」

葵さんの静かな瞳に、俺の言葉はどう映っているのだろうか？

「サッカーをしたのは前に言った事ありましたよね。俺、中学1年の時、大会前の練習試合で怪我しちゃったんです。病院行くと疲労骨折ってやつで、しばらく学校に行けなくなったんです」

「……………」

「友達はいつも心配してくれて、怪我が治ってからずっと気に掛けてもらって……それなのに中々調子が戻らなくて、それが本当に……辛くて、苦しく、て……」

あの時の事を思い出すと胸が締め付けられる。今すぐ泣きたくなくなってくる。

「嫌に、なった。そんな自分が、してもらえばかりで何も応えられない自分から逃げ出した。捨てたんです、全部。友達も、生きがいも——自分自身も」

情けない気持ち。悔しい気持ち。あの時感じた色んな感情が心の中を渦巻き出す。

「進くん……」

でも泣いてなんていられない。俺と同じような思いをしている人がここに居るんだ。

知っている俺だから、俺は同じような自分を二度と見たくない
決めたから！

「少しして、後悔した。俺が本当にしなくちゃいけなかったのは友
達に迷惑をかけたくないと思う事じゃなくて、友達の想いに辛くて
も頑張っただけの事だったんじゃないかって」

そう同じだ。葵さんが今しなくちゃいけない事は、天野さんとき
ちんと向かい合う事。その為に俺が出来る事は、二人が話し合える
キッカケをつくる事。

「葵さんには逃げてほしくない。葵さんには捨ててほしくない！
だって――」

俺の眼に葵さんの薄い色の瞳が映る。

「自信を無くした俺が。誰に対してもちゃんと向き合う事ができな
くなった俺が。葵さんと居る時、自然と本当の自分が出てくるんだ」
葵さんの眼にも俺が映っている。

「葵さんには魅力があります。周りの人達の心を開かせる、とても
素敵な力が。なにより友達を想う優しい気持ち……だから、そん
な葵さんを天野さんが嫌いになるなんて、絶対にないです」

「……進くん」

俺はそこで言葉を閉ざす。葵さんの肩が僅かに震えている気がし
たからだ。

だけど、俺にはもう一つ伝えたい事があった。だから、もう一度
閉ざした口を開く。

「それに――あの日、天野さんは待っていました」

「えっ？」

「あの時、迷子になっていた俺を葵さんは助けてくれました。でも、
その前に天野さんにも助けてもらったんです」

「はぴあちゃんに……？」

葵さんに、俺は頷く。

「林の中の小さなブランコに座っていた天野さんに、『あっちに神
社があるから』って」

「……！」

「そして何か懐かしそうに、『もう少しここにいるから』って」
「え……」

「体験入部の時、天野さん言ってましたよね。『どうやって会った
らいいのか、分からなかった……ずっと……』って。……天野さん
はずっと葵さんの事を大切に想っていたんだと思います、今もずつ
と……」

「あ……はぴ、あちゃん……！」

葵さんの瞳から光るモノが零れ落ちた。

「だから泣かないで……閉じ込められた心の檻を解かすような、そ
んな、葵さんの温かな笑顔を見せてください」

「進、くん……」

葵さんのような笑顔じゃないかもしれない。だけど、俺にできる
精一杯の笑顔で、俺は零れた葵さんの涙をすくった。

「あ……」

小さく眩きを洩らす葵さんに何も言わず、俺はただ微笑み続ける。
きつと、これが俺にできる事なんだと思うから――。

「……進くん……私、ちゃんとはぴあちゃんと話をしてみるよ」

やがて落ち着いた葵さんの瞳は、弱弱しい光から強い意志を宿し
た輝きへと、確かに変わっていた。

「……はい」

その輝きを俺は真っ直ぐに受け止める。

「だって……進くんは勇気を貰ったから……！」

そう言った葵さんの笑顔が凄く眩しくて、その言葉が嬉しくて、
俺はまるで時間が止まったみたいで、その笑顔を瞳に映し続けた。

昨日が過ぎた放課後。

部活が終わってから、葵さんは天野さんに呼びかけた。

「あ、あのね、はぴあちゃん。今日も……用事あるんだよね？ それでね、その用事が終わってからでいいんだけど、少しお話ししたい事があるんだ。だから、良かったら二人で作ったあのブランコの所に来てほしいの……遅くなってもいいから、どうしても私……っ！」

「……………」

「やっぱり……だめ、かな……」

葵さんが、ぎゅっと自分の制服の裾を握った。

天野さんは、考えるように眼を伏せる。

「……分かった」

「あ……ありがとうっ、はぴあちゃん。私待ってるから、だから……」

「……また……後で」

そう言って、天野さんはいつものように俺達とは反対の方へ歩いて行く。

「はぴあちゃん……」

去っていく天野さんの背中を見つめて、決意を固めたように葵さんは静かに頷いた。

その表情を見て、もう大丈夫そうだと俺は安心する。

……俺に出来る事は、もう無いだろう。後はお互いを想う絆が、きつと二人を笑顔にしてくれる。

「あ、あのっ、進くん！」

静かに踵を返し、一人で帰ろうとした俺を、葵さんの声が呼び止めた。

「あの……もし良かったら、一緒に来てほしいの……！」

「？ それは……もう俺には何も――」

断ろうとする俺に、葵さんは首を振る。

「進くんに、見届けて……ほしいから……！」

そう真っ直ぐに俺を見つめてくる葵さんの瞳は、今どんな想いを映しているのだろうか？

「……………」

その真剣な表情は、決して支えを求めているようなものではない。ましてや、失敗する事を恐れているようなものでもない。ただ、自分のありったけの想いが確かに羽ばたいていく処を見ていてほしい、ただそれだけだった。

「……………お願い」

——俺がもし、こんな強さをあの時持っていたなら……

……ふふ、葵さんは強いな。俺なんか必要無かったんじゃないかって思うくらい……。

でも、だからかな。俺は見届けたいと思った。そうする事で、きっと何かが変わる気がしたから——

「……………はい。俺で良かったら」

——俺は葵さんにそう答えた。

夕焼けが林の木々を赤く染めてどれくらいだろうか？ 小さなブランコの前で立ち尽くす、緊張した面持ちの葵さんと俺の元に、土を踏み鳴らす音が聞こえてきた。

「……………」

「はぴあちゃん……………」

天野さんはゆっくりとこちらに歩いてきて、俺達と僅かに距離を開けて立ち止まった。

「来てくれて、ありがとう。はぴあちゃん」

「……………」

天野さんは小さく首を振る。

「あ、あのね、それでお話っていうのは、その……………」

言いかけて、葵さんは口を噤ぐ。

葵さん……………。

葵さんの緊張が傍に居る俺にも伝わってくる。

「……………」

そんな葵さんの言葉を待つように、天野さんはじっと葵さんを見つめている。

よく見れば、天野さんの指先が微かに震えていた。

二つの視線に見守られて、葵さんは一つ大きく息を吐く。そして、意を決したように嚙いだ口を開いた。

「どうして、一緒に帰ってくれないの……？」

「！……………それは……………」

「用事って……………嘘、なんだよね……………」

「……………」

天野さんは、答えない。

……………今葵さんはそう言ったけど、別に調べた訳じゃないのだろう。ただ、天野さんの事を信じているからこそ、想っているからこそ、本当の事を話して欲しいからこそ、〈嘘〉を吐いたのだろう。少なくとも俺はそう思った。

「……………私の事……………嫌い？」

「……………」

「……………あの時も、はぴあちゃんは何も言ってくれなかった……………私こんなだから、しつこいって思われちゃったのかなって……………」

「ちがっ……………」

葵さんの問いかけにとっさに出ようとした言葉を、天野さんは葵さんから視線を逸らし、黙ってぐっと呑み込んだ。その表情からは、どこか悔しそうな、そんな気持ちが窺えるように思う。

「じゃあ、どうして……………」

「……………」

葵さんの真摯な瞳に、天野さんの大きな瞳が揺らぐ。

「はぴあちゃん、私は……………」

「っ！……………」

葵さんの真っ直ぐな視線に耐えきれなくなったのか、その言葉を振り切るように後ろを向いた天野さんは、葵さんから逃げるように

駆け出した。

「待って！ はぴあちゃん、私は――」

葵さんが遠ざかろうとする天野さんに、精一杯の――大切な想いをぶつける。

「私は、はぴあちゃんの事が好き。離れてからも、ずっと……忘れてた事なんて無かった……」

自分の素直な気持ちを言葉にして、葵さんは想いを繋げる。

「だから、またはぴあちゃんに会えて、凄く嬉しかった。だって、はぴあちゃんは……ずっと、今も大好きな、私にとって一番の友達だから……！」

「……っ！」

「たとえ昔みたいになれなくても、その気持ちは変わらないから。だから……っ」

「……あお……い」

葵さんの想いを受け止めたのか、天野さんの小さな背中が、小さく、小さく震える。

そして、今まで抑えてきた気持ちを吐き出すように、葵さんの想いに応えようと振り返った天野さんは、真っ直ぐに葵さんを見て自分の気持ちをぶつける。

「……邪魔、したくなかったから」

「え、邪魔？」

コクンと頷いた天野さんの瞳が、俺と葵さんを交互に映す。

「……葵、凄く楽しそうだったから」

少し寂しそうに天野さんが言った。

「……？ どういう、事だ？ どうやら俺にも原因があるらしいけど……？」

「あの、それってどういう……？」

さすがに気になった俺は、直接天野さんに訊いてみる事にした。

「……トライアングルはドロドロ地獄――そうドラマで言ってた」
真剣な表情で天野さんが答えてくれる。

「?？」

えっと……すみません、天野さん。ますます分からないです。
トライアングル、ドロドロ……いったい何の事なんだ？

いくら頭を悩ませてみても、普段TVを全く観ない俺には、ドラマの事なんてさっぱり分からなかった。

「ち、違うよっ。私達はそんなじゃないよっ」

しかし、そんな俺には分からない難問を解いたらしい。葵さんが夕焼けに負けないくらい顔を真っ赤にしながら否定の声を上げた。

「私と進くんは友達だよっ。そんな……こ、恋……」

火が出そうなくらいに赤くなった葵さんの声は最後の方になると、だんだん萎んだようなもじもじとした声になって、よく聞き取れなかった。

「……違うの？」

「う、うん……」

「……そう」

赤くなって下を向いている葵さんの前で、天野さんも同じように視線を傾ける。見ると、天野さんの耳も少しずつ朱色に染まっていたのが分かった。

……なんだかよく分からないけど、誤解は解けたのか？ 二人の様子を見る限りそうっぽい。

——そんな、お互い照れたように下を見つめている二人の間に、その時、緩やかな風が吹いた。

その風は、二人が抱いた不安を取り除くように——

二人の想いを交わし合うように——

二人の絆が今までよりも強く結び付くように——

二人の眩い笑顔を祝福しているみたいに——茜色の空へと舞って行った。

「……あの、はぴあちゃん。その……それじゃあ、明日は一緒に帰って、くれるかな」

はにかんだ笑顔で葵さんが言う。

「……ん。葵と帰りたい」

「あ……えへへ。はぴあちゃん！」

「っ！ あ、葵……！」

「えへへ、大好きだよ、はぴあちゃんっ！」

ぎゅっと、「これから一緒にだよ」と、葵さんが照れた天野さんに抱きつく。

「ん」

応えるように、天野さんの小さな手が葵さんの背中にまわされた。

「……………」

なんだろうな、この気持ち……。

俺にとって、もうそれは懐かしいとも寂しいとも思う、この気持ち。

胸に広がる、温かな気持ち。

俺が取り戻したいと願った気持ち。

そして、もう一つ——二人の姿が俺の心に新しい想いを刻んでくれる。

それは多分、俺が必要としていたモノ。

心から笑えるようになる為の、かけがえのない想い。

「……少しだけ、俺も……」

俺は夕焼け色に輝く二人を見つめ、満たされていくものを感じた。
？

三歩目 変わる為に出来る事（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます（＃＾・＾＃）
いかがでしたでしょうか？

おそらく納得いかない（消化不良）と感じられたと思われます。
ですが、これは「あえて」こういう展開にしてみました。

なぜそうしたのか？

それは、この作品を読んでくださった皆さんが、人生である問題を
抱えた時、この作品を思い出して問題を解決する手助けになれば、
そう想ったからです。

僕が未熟な所為で、伝えたい事がうまく伝わらないかもしれません。
でも、きつと伝えたい人には伝わったんじゃないかなと思っており
ます。

少しでもあなたの力に―――勇気になれば嬉しいです（＊＾――＾＊）

それでは、こんな力不足な僕の商品を読んで頂き、感謝の嵐です。

ありがとうございました（＜――＞）

もしよろしければ、後々アップする予定のエピローグの方ものぞい
てみてくださいね（＾＾）

エピローグ 一歩ずつ進んで行こうと思う（前書き）

このエピローグでひとまず完結となります。

色々というか、全くもって未熟な僕の腕では、なかなか思い描いた通りに書けなかった部分が数多く、僕自身納得してない出来でした。でも、いくつか自分でも気に入ったところもあるので、この良いところと悪いところを次につなげていけたらな、と思っております。

では、皆さんがこの作品を読んで自分にとって大切であり、必要だと思う「何か」を感じ取って頂けたのなら、それだけでこの作品を創れてよかったと思います（^^）

それでは――

エピローグ 一歩ずつ進んで行こうと思う

「それじゃあみんなあ、気を付けて帰るんですよ」

美子先生が一日の終わりを告げるHRの挨拶をして教室を出て行く、帰り支度を済ませたクラスメイト達が自分の席を離れて行く。

「一前くん。また、です」

「はい。またです、叶井さん……あつ、あのっ」

いつものように挨拶を交わしてくれた叶井さんを、俺は呼び止める。

「あ、はい。なんですか？」

「あ、その……こないだは、ありがとうございました。相談にのってくれて」

俺は叶井さんと綾瀬さんにお礼を言って、頭を下げた。

「い、いえ、そんな……私なんかで役に立てたのなら、良かったです」

叶井さんは遠慮したように手を振ると、控えめに微笑んだ。

「ふん、別にあんたの為じゃないわよ。……まあでも、なんだか解決したみたいだし、良かったんじゃない？」

ぶっきらぼうに言う、綾瀬さんは照れたようにプイッとそっぽを向く。

「はいっ！ 二人のおかげです！」

俺はもう一度改めて二人にお礼を言うと、自然と弾むような笑顔が浮かんできたのを感じた。

あの日のお昼休み——二人に相談に乗ってもらった時の、あのささやかな二人の提案……。

『——俺、その友達に何ができるのか、考えてみても良いアイデアが思いつかなくて……でも、俺が何かする事は、二人にとって必要のない事で……もしかしたら迷惑になるんじゃないかって……』

『……そうね。そういう事なら、確かにお節介かもしれないわね。
下手に干渉するよりも、放っておいた方が二人の為かもしれないわ』
『……』

『……でも、そうね。だったら二人がゆっくり話せるようにしてあげるくらいなら、別にいいんじゃない？』

『そうですね。私も優希ちゃんの言うとおりだと思います。それなら二人の迷惑になったりはしないと思います』

あの二人のアドバイスが俺に少しの勇気をくれた。二人に背中を押してもらわなかったら、もしかしたら俺は、また何もできない自分に自信を無くしていたかもしれないと思う。

——ありがとう、綾瀬さん、叶井さん。

「進くん！」

聞こえてきた元気な声の方を見ると、廊下で葵さんが手を振っていた。葵さんの隣には天野さんも居る。

「あ……それじゃあ、叶井さん、綾瀬さん、また、です」

二人にそう言うと、俺はカバンを手に、廊下で待っていて葵さん達の元へと足を弾ませた。

「お、今日も3人一緒だな」

3人一緒にお助け部の部室に入ってきた俺達を見て、凜先輩が声をかけてくる。

その言葉に、葵さんは天野さんを見て嬉しそうに笑う。

「ん」

自分に向けられる優しい笑顔を受けて、天野さんが確かに頷いた。
「ふふ、そうか」

「はいっ！」

本当に嬉しそうに、元気いっぱい笑顔を浮かべる葵さんは、眩しい太陽のよう。

引き寄せられるように葵さんの笑顔を見ていると、制服をくいっ

と引っ張られた。

「……………」

見ると、何か言いたそうに天野さんが俺を見上げていた。

「？ どうしたんですか、天野さん？」

見上げる大きな瞳に俺は訊ねた。

「……葵に聞いた。勇気を貰ったって……」

「？」

「は、はぴあちゃんっ？ それはっ……」

俺は葵さんを見る。何故か慌てている様子の葵さんが目に映った。

「だから……」

一呼吸置いて、天野さんの小さな唇が、俺へと言葉を運ぶ。

「……すす、む……」

「？ ……はい」

「……進」

「はい。なんですか？」

あどけない声で自分の名前を呼んでくれる天野さんに、俺は微笑みかける。

「……仲良くなるには名前で呼び合うって……昔葵が言ってた。それに、凜も……だから……」

小さな声で、けれども真っ直ぐにこちらを覗き込むように、頬っぺたを赤くしながら天野さんは俺を見つめる。

「あ……」

始めて名前を呼ばれた嬉しさと、仲良くなりたいと言ってくれた嬉しさを混ぜ合わせた気持ち。そして、小さな温かい温もりが、俺の胸に飛び込んできた。

「ありがとう、進」

「っっっ！」

その飛び込んできたとびっきりの笑顔に、思わず心を囚われてしまいそうになる。

「はあううあう……」

言葉にならない幸せ？　が空気となり、漏れるように俺の口から発せられた。

「あらあら〜？　進さん、お顔が真っ赤ですよ〜？」

「っ。あ、天野ちゃん離れて……！」

水鳥先輩に指摘された事で自覚し、さらに気が動転してしまった俺は、呂律がうまく回らないながらも、急いで天野さんに離れてもらおうと抗議する。

「……いや」

「はぐ、そんな」

そんな風にあっさりと、どこか拗ねたような口調で天野さんは首を横に振る。

「……名前、呼んで欲しい」

天野さんは俺のお腹辺りに顔を埋めて、小さく言った。

「あ、へと、ちよの……っ〜」

だ、駄目だ〜。こ、こんな風に言われたら、もう……もう言うしかないじゃないかっ！

「は、はび……」

「ん」

「はぴあ……ちゃん」

「ん、進」

はあう……言って、しまった……なんか、凄く恥ずかしい。

俺は、はび……あちゃん……の顔を見ないようにと、照れを冷ますかのように部屋の中を見渡した。すると、凜先輩と目があった。

同級生を『ちゃん』付けした俺に微妙な視線を向けていた凜先輩が、アイコンタクトで送ってくる。

（何故に『ちゃん』？）

「……」

その冷めた視線に、俺は黙って心で叫ぶ。

いやだって、『はぴあさん』ってなんか違う気がしたんだものっ！
葵さんだっていつも『はぴあちゃん』って言ってるし……そっ

ちの方が言いやすかったただけだものっ！

「うふふ」

俺の心の叫びが聞こえたのだろうか？ 水鳥先輩がおかしそうに笑うので、俺は抑えきれない照れを、右の人差し指で頬を掻く事で誤魔化した。

「進くん」

葵さんがもじもじとした様子で俺の名前を呼ぶ。

俺は照れを（はぴあちゃんはそっと）振り切って、葵さんに向き直る。

「はい」

「あ、あのねっ。その、わ、私からもありがとう」

「え……ああ、いや、そんな……別に俺は何もしていませんし。その……ただ葵さんが頑張ったからと言うか、葵さんの想いが……や、その、何て言うか……」

葵さんにお礼を言われて、あたふたと、また復活してきた照れが邪魔する小さな声で、俺は口の中で言葉を転がす。

「？」

「えと、だからその……」

俺は、まだ抜けない照れを葵さんに見られないようにと、顔を背けながら言う。

「俺は、とっ、友達ですから。だから――」

ここから先はどう言葉にしているのか分からず、代わりに言葉ではない微笑みを送る。

「あ……うんっ。ありがとう、進くんっ！」

葵さんも応えてくれるように微笑みを返してくれた。

「……やっぱり、葵の笑った顔……好き」

はぴあちゃんが笑っている葵さんを見て呟く。

「はぴあちゃん」

「葵……ごめん……」

「ううん。もう気にしないでって言ったのに、はぴあちゃんってば」

「ん」

「私の事を想ってくれたからだったんだよね。だから、もう全然気にしてないよっ」

「……………」

「ね、はぴあちゃん。今度久しぶりにあのブランコで漕ぎ合いっこしようよ。あ、でも紐とか切れたら危ないからまずは新しいのに換えてからかな。ねっ、二人でまた一緒に遊ぼう」

「……ん、葵と遊びたい」

「じゃあ、ゆびきりしよっ」

そう言って、はぴあちゃんの小指に葵さんは自分の小指を優しく絡ませる。

「えへへ、約束だよっ。はぴあちゃん」

「ん、約束」

二人は互いの笑みを交換する。

「……………」

俺は微笑み合っている二人の友達を見て、思う。

——あの時の自分の影が重なって見えたから、だから放っておけなかっただけなのかもしれない。

葵さん達の力になる事で、あの時救えなかった弱い自分自身を勇気づけられたと、そう思う事で自分が満足したかっただけなのかもしれない。だからあんなにどうすればいいのかって頭を悩ませたのかもしれない。

でも——

二人の笑顔に、やっぱりそれは違うんじゃないかとも思う。

だって、俺は今仲良く繋がれた二つの小指を見て、とても清々しい気持ちで微笑んでいるから。

あの頃にも負けないような、心からの笑顔を浮かべていると思うから。

そう、これはもしかしたら、二人の笑顔に教えてもらえたからなのかもしれない。

誰かの為に力を尽くす事で、自分も笑えるという事を――

自分の事だけじゃない、周りの事も想いやれる心を持つ事で、小さな幸せに出会えるという事を――

周りしてくれる勇氣は、新しい一步を踏み出す力になって、確かな心を広げてくれるという事を――

なにより、一生懸命な気持ちが自分を成長させてくれるという事を――

「……………」

……少しだけなら変わったのかな？

もし、そうなら……

俺は思う。

これからもっともっと笑えるようになる。

心からの笑顔で、「楽しい」と思える毎日を創っていける、そんな気がする。

そうきつと、これが俺の見つけた――

新しい？生きがい？なんだと思うから……

エピローグ 一歩ずつ進んで行こうと思う（後書き）

最後までお付き合いくださった方、本当にありがとうございました
っ！ m () m

本当は書きたい事がたくさんあるのですが、書きだすと止まらなくなりそうなので、来月から執筆予定の「真・生きがいを見つけよう（仮）」でまたお会いできた時にでも（＊＾―＾＊）

前に書いたのですが、本編に入りきらなかった各部活のちよつとした短いエピソードも後で載せてみようと思うので、宜しければ時間のあいたときにそちらもお願いしますです。

ではこの辺で――

また会える事を願って……（TOT）／～～～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3588/>

生きがいを見つけよう

2010年10月10日20時20分発行